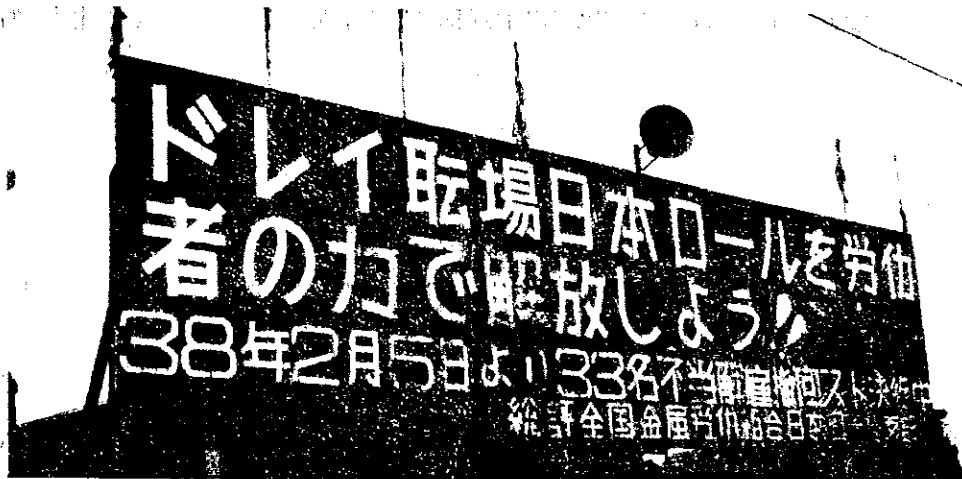


もえひろがれ

葛西の火

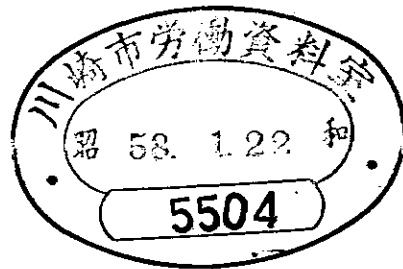
日本ロール斗争を支えた 力は何か



全国金属日本ロール支部編

贈 昭和八年十月八日
寄 新川清治氏

462.2
NLRO



川崎市労働資料室

はじめに

このパンフレットは、全金日本ロール闘争をできるだけ簡潔にまとめ、おおぜいの人に読んでもらい、日本ロール闘争を勝利するための武器にする目的で作られました。

日本ロール闘争は、一九六三年二月、組合幹部三十三名の不当解雇をきっかけとして始まり、すでに六年半を闘い抜いています。この間、全国金属を中心とする全国の労働者の支援をうけ、組合幹部十三名の解雇撤回などのいくつかの前進を勝ちとってきましたが、今だに、頑迷、卑劣な会社は、全員の不当解雇を撤回せず、争議の全面解決をはかるうとしていません。

今、私たち日本ロール支部では、一日も早く全面的な勝利を闘いとする決意を固め、六年半の闘いの力をいっそう発展させるために新たな奮闘を開始したところです。そして闘いを広げ発展させる武器として、パンフレットの発行を計画し、編集にとりかかりました。

これまで日本ロール闘争については、東京争議団共闘会議が編集した「東京争議団物語」や全金中央本部が編集した「長期闘争を支えるもの」に紹介されていますが、日本ロール支部として発行したパンフレットは、がり版刷りの「もえひろがれ葛西の火」と「鋼のちかい」だけでした。このパンフレットは、三年ぶり、三冊目のものになります。

最近、映画「ドレイ工場」や今年一月に発行された「どぶ川学級」を通じて日本ロール闘争を初めて知った人々から、「なぜ争議が始まったんですか」「映画のような事が本当にあったんですか」などの質問が出されます。また、以前から日本ロール闘争を知っている労働組合の幹部活動家の方々からも「なぜ、百名以上の組合員が六年間も闘えるのか」「今、闘いはどうなっているのか」という質問をよく聞かれます。このような質問、疑問に答える事を頭に置きながらこのパンフレットを編集しました。

したがってこのパンフは、日本ロール闘争を理論的にまとめた「中間総括」ではありません。六年半を闘ってきた事実を主にして書かれた「闘いの記録」ともいべきものです。

第一章は、なぜ争議が始ったか。第二章は、どのように六年間を闘い前進してきたか。第三章は、映画「ドレイ工場」に組合員はどのようにと組んだか。第四章は、闘っている一人一人の組合員の考え方や生活はどのようなものか。第五章は、闘いの現状はどうなのか。という内容です。

闘争委員会の任命により五名の編集委員が、組合活動やアルバイトに行きながら、資料を整え討議し、原稿の執筆にとりくみました。七月十日から三十一日までの三週間たらずの短い時間で編集したために、不十分な部分もありますが、日本ロール闘争の要点はとにかくまとめられたと思います。未熟な編集で読みにくい点があると思いますが、このパンフによって日本ロール闘争

を理解され、闘争勝利のために、いつその御支援を寄せられるよう心から要請いたします。

一九六九年八月

全国金属労働組合

日本ロール製造支部

もえひろがれ

葛西の火——目次

I 闘いの発端

- 1 神の愛、説く、社長青木運之助……………三
- 2 ドレイ工場、日本ロール……………三
○賃金——貰ってみなければわからない……………三
○一時金——年四回は魅力だね……………四
○退職金——十年勤めて二万五千円……………六
○厚生施設——便所があるじゃないか……………七
○労働災害——一年に一人は殺される殺人工場……………六
○打つ、買う、飲むでうさばらし……………六
- 3 おっかなびっくりの組合準備……………三
○血判状で誓い合い……………三
○ばれたぞ……………三

4 東の間の感激……………六

- 急進派・動揺派……………三
 - 結成……………六
 - とうとう二年間の苦勞は突った……………三
 - 組合破壊の挑戦状 分裂・アカ攻撃・切り崩し団交拒否・配転……………三
 - 脱出する脱退者……………六
- ### 5 小數で工場外へ……………六
- 解雇……………三
 - 暴力ロックアウト——怒りと涙のピケライン……………四
 - 不安とあせり……………六

II もえひろがれ葛西の火

勝利めざす四つの柱

- 1 支援共闘の発展……………三
○おーい、激励電報がきたぞお……………三
○二万人の団結大集会へ……………四

組合まわり、交流会、ピラまき、行商、支援決議、全国オルグ、大集会成功

○一万人の連帯ストめざして……………六

○ロール対策委の設置、地協常幹の決意、スト権の確立、スト成功

○さらに、ねばり強く……………六

2 統一をめざして……………七

○仕組まれた第二組合……………七

○くやしさをこらえて、おはよう……………七

○玄関ばらいから、まあ上がれよ……………七

○動き出したぞ、第二組合が……………七

○御用幹部をのりこえて、七十二時間スト決行……………七

○こんどこそと、十四日間のスト決行……………七

○全金さえ、入ってくれば……………七

3 地域住民と共に……………八

○署名もしてくれねえや……………八

○地域の要求をほりおこそう……………八

○汗を流せば、分ってくれらあ……………八

○勝ったら、赤坂でお祝いしますよ……………一〇

○町長も斗いの先頭に——バス増車運動……………一〇

○まとめ……………一一

4 闘い続ける組合員……………一二

○俺の田舎は、組合だ。——六ヶ月ぶりに帰ってきた組合員……………一二

○連帯の力強さに支えられて……………一二

○みんなが主人公……………一二

○家族も共に……………一二

○カスミを食っては斗えない……………一二

Ⅷ 映画「ドレイ工場」のモデルとなって……………一三

1 映画作るんだって？——半信半疑の組合員……………一三

○映画人との出会い……………一三

○映画と現実との比較……………一三

○半信半疑で協力を決定……………一三

○資金集めに組合まわり……………一三

2	俺達も俳優……………	一五〇
	○日色ともゑに演技指導……………	一五〇
	○やった、やった、やったえノ……………	一五三
	○この苦勞が分かるかよ……………	一五三
3	感激、感激、また感激……………	一五三
	○俺の演技はどうかかな？……………	一五三
	○成功、成功、大成功……………	一五六
	○再現される名セリフ……………	一五七
4	日本ロール闘争に与えた影響……………	一五七
5	合評会より……………	一六〇

IV 闘いの中で—組合員の手記とエピソード

1	エピソード……………	一六二
	○質問……………	一六二
	○結婚をのばして……………	一七七

	○楽書帳より……………	一八〇
	○飯炊き六年半……………	一八一
	○替え歌……………	一八二
	○松川行進に参加して……………	一八四

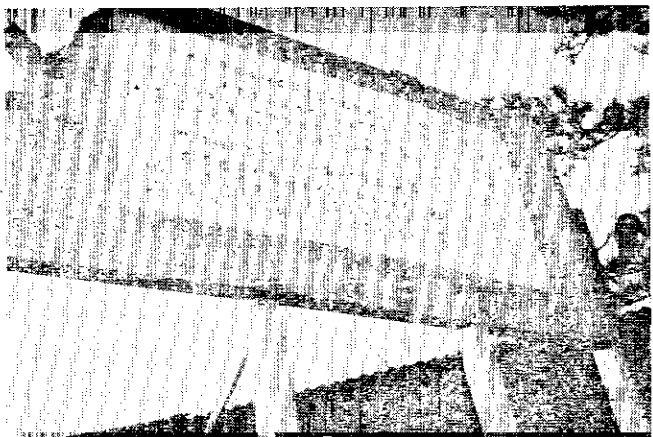
2	手記……………	一八五
	○密告者と疑いをかけられて……………	一八五
	○金さえあれば……………	一八八
	○仲間にはげまされ……………	一九三
	○ふとんを取りにきて……………	一九四
	○初めて、地区別の議長になる……………	一九七
	○兄貴への手紙……………	二〇五
	○斗いの中で父親になる……………	二〇七
	○友人への手紙……………	二一〇
	○初めはデマに迷ったが……………	二二二
	○妻となり母となって……………	二二五
	○争議の中の新婚生活……………	二二八

樽林 勝志……………	一八五
高橋 幸男……………	一八八
内田 宣長……………	一九三
横田精一郎……………	一九四
新谷 照夫……………	一九七
上尾 武人……………	二〇五
新村 貢……………	二〇七
Y・K……………	二一〇
家族 須賀 照子……………	二二二
黒口 葉子……………	二二五
加納富貴子……………	二二八

V 闘いの現状と決意

- 1 裁判闘争について……………三
- 2 「あつせん案」をめぐる経過について……………三
- 3 一日も早い勝利めざして……………三

I、闘いの発端



1 神の愛、説く、社長青木運之助

日本ロール製造株式会社は、資本金二億六千万円（現在三億六百万円）、製鉄用、化学工業用各種ロール機械、鑄鉄、鑄鍛鉄の製造、販売、及び硬質塩化ビニールパイプの製造、販売を行い、江戸川工場一千二百名（現在一千名）、ここで争議が行われている）、大島工場（百三十名）、小松川工場五十名を有し、半期の売上げが二十五億円（現在四十億円）で、株式は非公開、社長青木運之助一族（副社長は息子、専務は実弟と息子、常務は実弟と実妹婿）がその九〇%以上にぎっています。

系列はとくになく、取引先は富士製鉄を主に日本鋼管などの鉄鋼独占を初め製鉄関係会社とプリジストンタイヤ、興国化学その他の化学工業の大手です。

かくて青木運之助は個人資産五億円以上といわれ、千葉県の高領所得者番付の上位をしめてきた一方、日本キリスト聖教団の理事などをつとめ、みずから千葉県中山で教会を開いています。

「額に汗して食を得よ」と聖書の一節をとりあげ、労働者にもくもくと働く事だけを要求し、「牛や馬は文句をいわぬが、お前たちはすぐ文句をいう」と労働者を人間として認めない非人間性、

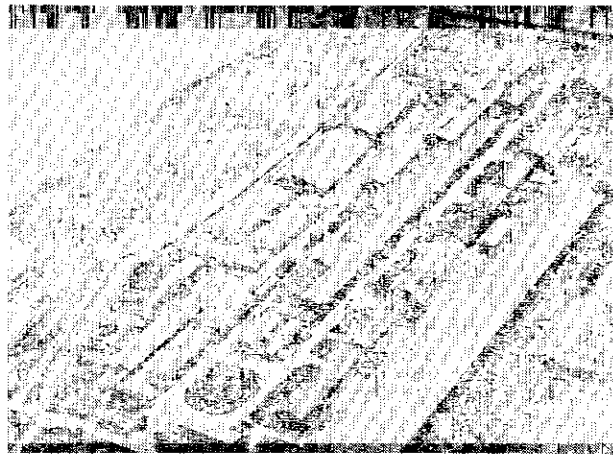
会社のマークまで聖書の言葉「全き愛」の全を「全」に凶案化して使っている熱心なクリスチャンと自称している有様です。

しかも、重役となっているむすこや弟ですら経営に対する考えを異にすることさえできないというワンマンぶりです。

昭和二十一年、及び二十四年に当時「青木ロール」と呼んでいた頃、労働組合結成の動きを二度にわたっておしつぶした経験があり、「組合」を毛ぎらいし、嫌悪をもち続けている「組合アレルギー」の持主です。

2 ドレイ工場、日本ロール会社

黄金——貰つてみなければわからない



日本ロール製造株式会社(全影)

労働条件といえ、賃金は全額請負制。労働者の目の前にニンジンをつぶらさげ、働けば働くほど金になるような幻想をもたせ、一方では製品の単価が明らかにされず、会社が一方的に査定できるような仕組みになっています。

同じ製品にも単価が一定しておらず先月三万円、今月二万円というひどいことさえあります。だからいくら稼いだか計算も出来ず、給料日がくるまで自分の給料がわからないという有さま、自分で自分のしりをたたきながら収入を多く確保するために他人のことなどかまってはもらえない。従って、月三百時間労働ということは珍らしくありません。

全額請負制のなかで、他の労働者よりも一円でも多く稼ぎたいという意識が、しぜん労働者は団結しなければならぬという労働者本来の意識を失わせていました。

会社は「いらぬ人間」になると、給料を一律に下げて「食えない給料」にして、労働者自ら会社をやめていくようにしてしまう。

しほりにしほられて鎧のように自分の身を自分ですりへらしながら生活していきました。

一時金——年四回」は魅力だネ

地方出身の労働者は、会社の宣伝パンフレットをみて『ボーナス、年四回』これが魅力で日本ロールに入社したものが多し。

しかし、みると貰うとは天と地の差、これで日本ロールに幻滅を感じてやめていく労働者が多し。四回あわせても給料の一ヶ月分になるか、ならないかの「雀の涙」で年末は、正月の餅代程度です。

同じ地方から一緒に上京し、他の会社で働いている友達に「お前のところでボーナスいくら出たの」と聞かれても、すぐ返事が出来ない。だから「イヤ、たいしたことはないよ」と答えるか、自分で貰った数十倍もの額を冗談まじりにいつてごまかしてしまふ。

笑話ではすまされぬ笑話である。それも無条件では貰えない。

『賞与支給式』と称して、青運ホール（青木運之助の青と運をとってセイウンといっている）に全従業員を集め（労働時間外で行いながらも、労働者を拘束する）「今日、賞与をいただけるようになったのも、ひとえに神様のお蔭です。神様に感謝しなければなりません」と神様に向かってこうべを下げさせ、「今、会社は赤字だがその中から賞与を出す、だからありがたく思わなければならぬ」「会社が繁栄するからこそ、みんなの生活ができています」と労働者に企業意識をうえつけることを決して忘れない。各工場長は、壇上の社長の前に並び、代表が「雀の涙」を「不況のなかでこんなに沢山の賞与をいただいております」とうやうやしく賞与の目録をもらって下る。

世間に話したら「笑にふされることだ、日本ロールでは、ごく当り前のようにその度ごとにお

こなわれています。

退職金——十年勤めて二万五千元！

退職金にいたっては、お話にならない、でも話さなければなりません。

十年勤めた労働者で二万五千元という「雀の涙」よりお粗末で、しかも算出方法は複雑怪奇で、とうてい自分で計算することが困難です。

それも最終的決裁は、社長みずからするという社長の胸一つでどうにでもなる「代物」

その支払われ方も、社宅に入っている労働者に対しては退職した後、社宅を明け渡さないと支払わないというやり方をとり、労働者を酷使できるだけ酷使し、使えなくなるとポロきれのようにはき捨てるという無慈悲なやり方をとっている。

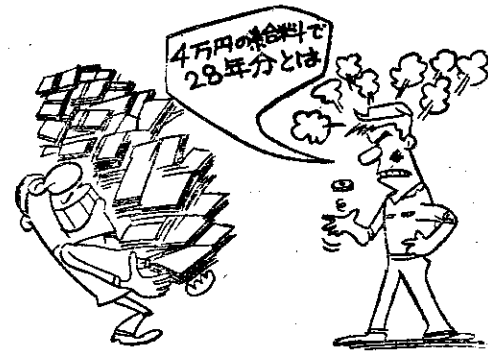
定年になっても「お話にならない額」では、やめるにもやめられず結局は働けなくなるまで働かされることになり、会社は「墓場」ともささやかれている。

厚生施設——便所があるじゃないか

厚生娯楽施設にしても皆無です。探してあるとすれば風呂と便所だけ……。

会社に「娯楽施設を作っしてほしい」と要求すると「会社は遊ぶところではない。遊びたければ会社をやめて後楽園にでもいったらいいだろう」といい放ち、労働者は昼休み時間に、会社構内で野球をやっていると「昼は休むためにあるのだ、野球などやっていたら昼からの仕事が疲れて能率が上らない」と労働者の休み時間まで拘束しようとし、遊ぶことまで否定し、ただ働くことだけを強要する徹底した搾取者をほこっている。

この上、仕事に使う鉛筆、ペン先、作業石鹼まで個人負担、そのほか寮の室代から、電気水道料金まで個人負担させ、社宅は、六畳一間で六千円と驚くほど高い料金をとっています。多量のものといえは会社のもうけと労働災害だけというありさまです。



社長の四十三年度所得は一、六八六万円余である、これは、四万円労働者の二十八年分に当る。

労働災害 一年に一人は殺される「殺人工場」

「一年に一人は殺される」職場といわれ、所轄の労働基準監督署から「要注意工場」のレッテルをはられ、その所轄の監督署から労働災害があまり多いので、わざわざ訓話にきたことがある。その言葉をかきると「日本ロールは、所轄の江東地区の中で、労働災害が一番多い。ということには東京で一番多いということになり、東京で一番多いということは、日本で一番多いことにならる」。

一九六一年十月、十六才の少年に無免許でクレーンを運転させ、事故を起して死亡させた時、工場長は「死亡したのは見習だ、作業に支障はない」と放言し、切断された腕を「ゴミと一緒にでもやしてしまえ」と労働者の腕を棒きれのようにしか見ない利益第一主義ぶりを発揮しました。死んだ労働者を前に、五万円の香典で「少なかつたら裁判でもやったらよかるう」とうそぶき「怪我と弁当は自分持ち」を地でいっています。

打つ、買う、飲むでうさばらし

低賃金と無権利の状態のなから生れてくる労働者の不満と要求を恐れていたのか？、それを解決するような素振りを取りながら、実際はそれを押えていたものがありました。それは、青葉

会といい、社長を会長に、各工場長が理事になり、幹事は各工場から前年度の役員に推せんされたものの中から、社長がさらに選んで決定されたもので構成されていました。

各工場に投書箱を置き、それに集まった投書の要求に社長が直接答えるという形式のものです。「給料を上げてほしい」「ボーナスを世間なみにしてほしい」「退職金を世間並に」という労働者の最も切実な要求が毎回でてきます。

しかし、労働者の切実な要求ほど社長の答はきまっています。これらのことは「会社の規約にのびてだしている。そもそもそんな要求が出てくるのがおかしい。これは各幹事が会社の規約に従業員に徹底させていない証拠だ、これを徹底させるのが幹事の役目だ」と労働者の生活向上への切実な要求ほどその場で一言の発言も許されずボツにされてしまいました。

そして各工場から代表にさせられている労働者に、労働者の切実な要求をふみつぶす役目を負わせていました。

話合われることは「風呂の水をきれいに」「社宅に通じる道を直してほしい」「寮にテレビを入れてくれ」こんな程度の要求だけである。従って労働者の権利問題についての発言は一言も許されない雰囲気であり、もし発言でもしたら会社からいられることを覚悟しなければならぬ状況で、「青葉会」で取り上げられ、決定されることは、社長のポケットマネーでできる程度のものばかりの内容でした。

こうして低賃金と長時間労働、無権利のドレイのような状態のなかで、労働者は青木一族に対する激しい憎しみと不満、生活向上への要求が蓄積されながら全額請負制のトリコになり、個々バラバラに支配されていました。

さらに文化的要求まで踏みにじられ、遊ぶことさえ否定され、ドレイ状態から生れてくる先行き不安と不平、不満のうっ積が殺伐とした暗い職場環境を作っていました。

若い労働者は、会社をやめていくか、ぐれるかの道を選ぶしかなく、会社に対する不平、不満のうっづんを夜のネオン街ではらし、チンピラを装って月払で買収された洋服をはおって闊歩していた。毎日、「金がほしい、金がほしい」と一獲千金を夢みて競輪、競馬などギャンブルに熱中していました。しかし、馬券も一枚の紙くずと化して、やり場のない不満がつのつてくる。

時には、会社に対する怒りと不満は爆発し、上役を殴り倒して会社をやめていく労働者すら現れ、労働者のなかに存在する労働者本来の戦闘エネルギーは正しい方向にむけられていますでした。

しかし、長い間労働者を苦しめ、抑圧し続けてきた劣悪な労働条件と無権利は、激しい怒りと憎しみをかい、やがて闘いにたちあがることを労働者の心の奥に培わせていきました。

3 おっかなびっくりの組合準備

「血判状」で誓い合い

一九六〇年、歴史的な安保闘争は、全国各地で怒濤のように闘われました。

日本の独立と平和、民主主義をかけた安保闘争は、ドレイ状態で働かされていた日本ロールの労働者にも大きな影響をあたえたのです。

労働者の未来を夢み、ドレイ職場をみずから解放しようとする一部の青年労働者は、非公然のなかで全金、江戸川地域支部に個人加盟して労働組合結成準備にたちあがっていきました。加盟申込書の名前も会社に発覚された場合を考え、本名を書かずペンネームを作って署名しました。非公然の中での結成準備活動は、次のことに重点がおかれました。

第一に会社に絶対発覚されないようにすること。

第二に、全労働者の半数以上を組織したら、組合の公然化にたちあがる。

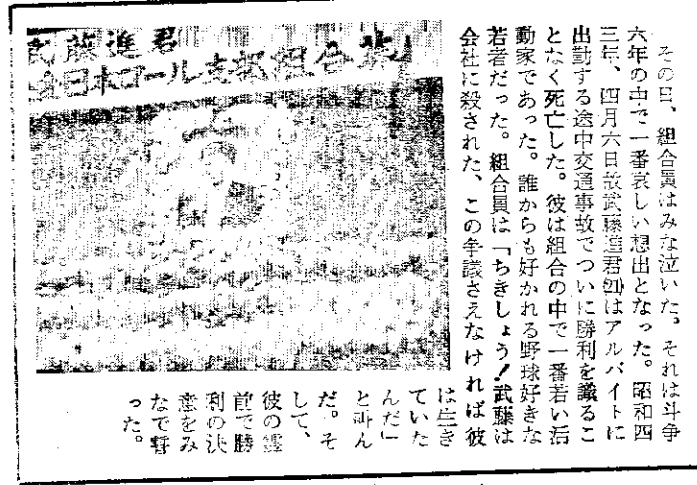
そのために組合員としての条件は、(イ) 私生活及び仕事が始めてであること。(ロ) 口がたたく秘密を守れること。(ハ) 職制との関係、つき合いのないこと。(ニ) 入社経路がはっきりしており職制の縁故で入社していないことなどがあり、条件にかなっている順にA、B、Cの三段階にわ

＜組合員の推移＞

60年 4月 第1, 第2 機械工場の5名にて準備始める
 12月 組合員10名に拡大
 61年 3月 " 20名 "
 9月 " 40名 "
 12月 急激に増加, 第1 第2 機械に別れる
 第1 機械80名, 第2 機械50名
 その他10名 計 140名
 62年 1月 全金江戸川地域支部新年会50名参加
 2月10日 会社に察知される一時中断
 4月 再び活動始める

	第 一	第 二	製 鋼	鑄 造	パイプ	旋 工	合 計
5月	90	45	20			3	158名
7月	118	80	7	11	1	11	222名
8月27日	中心的活動家呼び出される						
9月	137	113	7	20	2	9	計 288名
10月	137	120	10	30	2	49	391名

10月14日 役員, 執行委員12名内定
 10月18日に結成することにし, 当日の任務配置を決める
 10月17日 最終打合せ。 組合員 396名



その日、組合員はみな泣いた。それは斗争六年の中で一番哀しい想出となった。昭和四三年、四月六日故武藤進君はアルバイトに出勤する途中交通事故でついに勝利を譲ることなく死亡した。彼は組合の中で一番若い活動家であった。誰からも好かれる野球好きの若者だった。組合員は「ちぎしよ／＼武藤は会社に殺された、この年該さえなければ彼は生き延びていたんだ」と叫んだ。そして、彼の霊を慰めるために、彼を祀った。

け、さらに拡大する場合、目標を誰にするかを全員で検討し、決定する方法をとりました。最初の一年間は、会社を警戒するあまり、四十名しか拡大できませんでした。当時、ある組合員は、「一年で四十名位では、組合が出来るまで何年かかるだろう」と考えさせられたと語っています。

日本ロールは、第一機械工場、第二機械工場、ロール工場(旋工、鑄造課)、製鋼工場、パイプ工場の五つにわかれており、それぞれの工場で独立採算制がとられていたため、労働者は分裂支配されていました。

労働者もこの関係から他工場とのつき合いが少なく、結成準備にたうあがった青年労働者の所属していた第一、第二機械は比較的早く組織されたが、中心的な労働者のいなかった工場は、組織するまで長い間かかりました。だから各工場に組合員が組織されるまで結成準備決起以来なんと一年八ヶ月もかかっています。

同じ工場の労働者であれば、日常のつき合いがあり個々の性格や人間関係がつかめ、組合員として拡大するために役立ち、比較的容易ですが、いったん未組織工場に組合員を組織する場合には、その工場の労働者の性格や人間関係がつかめないため、特に非公然での組合員拡大は苦勞をしました。

目標の工場に組合員を組織する場合、その工場の中心的に活動できる労働者を選び、すでに組織されている工場の中でごく親しい組合員がその労働者を説得し、組合員として獲得していきました。しかし、非公然のなかでの活動はなまやさしい闘いではありませんでした。

闘いにたうあがった一部の組合員のなかには、秘密を守ることを「血判状」で誓い合いながら会社の監視をかくぐり労働者を一人ひとり機械の影で、あるいは寮を訪ねて組合員として獲得していきました。まさに会社の鉄鎖からの獲得でした。

ばれたぞ！

会社に絶対にバレることをさげながら極秘で進めてきた地下活動であったが、結成準備にとりかかって一年半すぎた頃、どこからか会社に察知されはじめました。

組合の「ク」の字もきらう会社は、組合結成準備の動きにはいつも敏感で、警戒をゆるめてはいませんでした。

「芽は小さいうちに」という会社は早速、全従業員を青運ホールに集め「日本ロールに組合を作ろうとしている者があるが、会社には組合はいらぬ。だからそのような者は会社をやめてもらう。」と一発おどかすことを決して忘れませんでした。

組合は、結成準備が発覚されることを警戒して、社長の「脅迫」以来準備活動を一時中断して時を待ちます。組合は、裸にされることなく守りぬかれ再び活動を開始しました。

会社の監視が今以上にきびしいことを予測し、警戒心を高めながら組合員拡大を急ぎます。この時期から組合員の拡大は急速にのびていきますが、一方組合員が拡大されるに従い「危険度」は高くなっていきました。

寮生に対する私物検査が、仕事にいつて誰もいないのを見はからって勝手にやられました。どろぼう猫のようなことまでする手段を選ばない会社の執拗な「組合追及」の手にとうとう組合の姿が発覚されるはめになりました。

会社は、この時とばかり中心的な活動家にねらいうちの攻撃をかけたきました。六二年八月、

活動家の主軸になってきた組合員は、所属の工場長に呼ばれ組合を作らないことを誓約しろと強要され、会社が勝手に書いたビラを手渡し組合員にまくよう命令してきました。

さらに中心的な活動家は、それぞれの工場長に呼びつけられ「組合の結成活動をやめるよう」執拗に説得され、そのなかの一人の活動家は「組合活動したら、解雇されても異議はない」との誓約書まで強引に書かされ、さらに二人の活動家は、仕事内容のまったく違う大阪営業所に期限を明らかにしない出張を命じられ、結成準備活動が出来ないようにされました。

会社は、組合を素標にすることをねらいながら、活動家を脅かし組合の「軸」を抜き結成準備を押しつぶそうとたくらんできたのです。

組合員は「組合さえ出来れば………」という気持で、攻撃に屈することなく非公然の組合員拡大を続けていきます。

「急進派」 「動揺派」

しかし、組合員は拡大されながらも一方では動揺をかくせず、今までになかった新しい局面が出てきました。

一つは、準備活動をとりにくく情勢を正しく判断せず「一日も早く公然化して会社と闘おう」とする「急進派」と「責任を持ってないので、組合から手を引きたい」とする「動揺派」が生まれた

のです。「急進派」はその後の会社の攻撃でもろくも崩れ、「動揺派」の職場では、非公然の中で五〇名位を組織されながら、その後の結成大会には一部の組合員しか参加できませんでした。

会社の結成準備押しつぶしの攻撃が激しくなるにつれ、そのなかから生まれてくる組合員の不安と動揺のなかで「今、組合を結成しなければ、会社の攻撃で長い間の苦勞が水の泡になる」という段階をむかえて、「全労働者の半数以上組織したら公然化にたちあがる」方針を変えて、六年十月十四日の非公然の執行委員会でも組合の公然化にふみきることを決定しました。

この間の弱点は、組合員の拡大にのみ力が集中され、一度公然化にたちあがれば必ずあるであろう組織破壊の攻撃、弾圧に耐えられるように、労働者を階級的に変える闘いを軽視していたことです。「急進派」であった一部の労働者は、その後の会社の攻撃でもろくも崩れ去っていった事実から、組合員を拡大する闘いと、その組合員を階級的に変え、高めていく闘いを「車輪」のように一つのものとしてとらえる必要のあることを労働組合結成にあたって一つの教訓を示しているといえます。

4 束の間の感激

結 成 //

一九六二年十月十八日、長い苦しい非公然活動から、公然化にたちあがりました。

十八日に結成大会を執行することは、会社にバレて事前に手をうたれることを警戒して、執行委員と一部の組合員を除くほとんどの組合員は知りませんでした。

会社を持ってきた結成大会の呼びかけのピラは、各工場にわけられロッカーのなかに、道具箱のなかに隠されながら終業時間を待ちました。

終業五分前に、組合員に、今から組合を結成することを知らせ、隠されてあったピラは一斉に労働者の手にまかれていきました。

日本ロールの労働者にとっては、歴史的な出来ごとであり、ドレイ職場解放への第一歩でした。このピラは、次のようによびかけていました。

一律二、五〇〇円の賃上げと家族手当の支給、

石炭の支給をかちとろう、

全国金属 日本ロール支部

我々労働者の生活はなぜこんなに苦しいのだ、

なぜ、私たちはこんなに追いつめられてしまったのだ、

有名な「女工哀史」の中に、

「工場は地獄で、主任は鬼で、まわる運転火の車」という小唄がある。

ナアみんな、小唄が今の我々の職場に当てはまらないだろうか？

しかし、そのような中にいた紡織女工たちも、

友よ、泣くだけが抵抗ではない、紡織女工はもう泣かないよ、とい

って起ち上がったのだ。

なぜ、みんなは黙っているのだ？ なぜ、叫ばないのだ？

黙っていたら、いつまでたっても我々の生活は良くなる筈がないじ

ゃないか。

我々労働者を、誰も守ってくれないのだ。

我々自身を守るしかないのだ。

さあ起ち上がろう！　そして我々の生活を守ろう！

自分のために、そしてみんなのために！

× × ×

我々執行部は、二年前からこのように全労働者に訴えつづけてきた。

てきた。

そして今、ここに、生活と平和を守ろうとする、働く仲間たちの

絶対的な力を結集したのだ。

その中で本日、労働組合をつくるのだ。そして要求するのだ。

1　一律二、五〇〇円の賃上げをせよ！

2　家族手当を支給せよ（妻一千元、子供その他三百円）！

3　作業石鹼を支給せよ！

全労働者の団結で、まずこの要求を聞いとうろう。

我々執行部は、全労働者の先頭にたち、あくまで闘いつづける。

労働組合万才！

執行委員会

感激と不安のいりまじって小ささみにふるえる手で、ビラをまいてまわりました。

すでに組合員となっている仲間ですら「今日、結成するのか？」と驚きながら、執行部から渡されたビラを職場の労働者に「これ読んでくれよ」「今から組合を作るんだ！ぜひ参加してくれ」と呼びかけにとびまわりました。

「組合を作る？」と半信半疑でうけとる労働者、「長い間、待っていたものがきた！」と一目散に結成大会に集まってく労働者、もう工場内は、仕事にならない状況でした。

突然、組合結成大会を知って日頃組合の動きをつぶして、社長への点数を稼ごうとしていた職制は「お前たちどこへ行く」「組合に参加するのはやめろ」とあわてふためいて、おろおろするばかり。この時ばかりは、職制にむかって「お前のいうことは聞く必要はない」とつき放し、長い間のウツプンをはらせた組合員の晴々とした顔、顔、顔。

とうとう二年間の苦労は実った。

ドレイ工場の解放をめざす、赤旗、は日本ロールにひるがえりました。

青年労働者を執行部として六〇〇名以上の労働者を結集し、正式に全国金属に加盟を決定しました。我々は要求する『一、一律二、五〇〇円の賃上げをせよ、一、家族手当を支給せよ、一、作業石鹼を支給せよ、』この要求は、全員一致で熱烈な拍手と歓声の中で確認されました。



「ヤッタヤッタゾ」2年間の苦労の後、ついに組合を結成した。

会社は結成大会を不成功に終らそうと赤旗をおろそうとしたり、支援にかけつけてくれた労働者には正門の扉を叩め構内に入れないようにしながらも、あわてふためいていました。

しかし、結成大会は夜まで続き、その日おぼえたばかりの『頑張ろう、つきあがる空に：』の合唱は、組合が結成されたことの感激と、これからの決意をこめて何度も何度もくり返えされました。

会社は、夜になると燈明まで消し、狼狽しながらも妨害をやめようとしませんでした。しかし真暗な中で「がんばろう」の歌はたえることなく夜空に広がっていき、二年間の苦勞と闘いのがい歌をあげつつけました。

組合員は当時の感激を次のように記してい

ます。

『やった、やったぞ、万才』と心のなかで叫んだ。なかには嬉しそうな顔もあり、恐る恐る皆の後ろについて結成大会に行く者もいた。私は、さらに一歩おくれて台貫（結成大会の舞台にしようとした所）の見える所で、まわりの様子をうかがった。

H君やTやOさんを含めて三十人近くの仲間が台貫の所に集まっている。

私は嬉しくてその場で皆んなをみていた。そこを通りかかった書記長の松田さんが怒ったような口調で「お前何をしているのだ、折角仲間が集まってきたのに、バラバラにならぬよう早く行って歌でも歌って引留めておけよ」といい、肩に掛けていたハンドマイクを私に押しつけ「たのんだぞ」といい残り、すでに鑄造工場の方へ走り出していた。

私は、手が痛くなる程マイクを握りしめ、台貫に向って歩き出したが足はガタガタと震えるし、心臓はいつもの二、三倍も早くなっている。それでもようやく台貫の上にあがり「皆さん歌をうたいましょう」とマイクが割れんばかりの大声で叫んだが、足は震え、体は定まらず次の声がないとしても出ない。

台貫の上で立往生と思った時、赤旗を持ってきたIさんが「これを台貫の上に立てろ」といって渡してくれた。私は、助かったと思ひ受け取った赤旗を思いきり二、三度大きくふった。その

旗には、白地に墨で黒々と総評全国金属、日本ロール製造部と書き込んだ細長い布が縫付けられていた。第一号支部旗であった。

私は旗竿を杖に足を半歩開いて力を入れた。今度は重心が定まった。「皆さん、私達働く者の歌、がんばろう、を歌いましょう！」と歌い出した。

そこへ吉川(当時社長室次長)が来て「お前達何をしているの!」「誰が台貫へ上って良いといった。すぐ止めなさい!」「旗を持っているの直ちに降りて来なさい!」「みんなこんな所に集まらず早く帰りなさい!」などと怒鳴っていたが、仲間達は動かない。

労働者の中から「ここはお前なんかの来る所ではない、帰れ!、帰れ!」と吉川に怒鳴り返す者までいた。

吉川は労働者が散らないので、私達に向い「お前達、やめろというのに分らないのか!」といながら台貫に上って来るなり、赤旗を持っている私を引き下そうとした。

私の足は又震え出し、心臓は早鐘のように鼓動してきた。しかし、負けて成るものかと自分自身の恐さを吹きとばすように歌を続けた。

そのうち、私と同年輩の労働者一人が台貫にかけ上がりもみ合っている私と吉川の間を割込んで、吉川を台貫から押し下してくれた。この時は本当に嬉しかった。握り締めていたマイクのボタンの跡が五日間ほど後まで指に残っていた事を今でも忘れることは出来ない。

組合破壊の挑戦状

分裂/アカ攻撃/切り崩し/回交拒否/配転

一方、会社は徹夜で重役会議を開き全金つぶしを協議していました。

翌日、社長命令で全金以外の全従業員は青蓮ホールに集められ、職制を中心に第二組合がデモチあげられ、全金つぶしの攻撃と弾圧が明らかにされ、全金に対する挑戦状がつけつけられました。第二組合への『組合加盟申込み書』が会社の手によって、まだ第二組合が結成される前に作られており、完全なデモチあげぶりを表わしていました。

第二組合によるアカ攻撃と、会社側の、全金は会社をつぶす、全金はアカだ、のアカ攻撃で指導部と一般組合員を切りはなしながら、組合員の動揺をあおって脱退を策し、一方では、要求をまったく無視し、回交は一切拒否し全金の動揺をねらってきました。連日、職場集会を開き団結を固める組合と、アカ攻撃と第二組合を武器に切崩しを続ける会社側とで職場や寮、社宅で火花が散らされました。

地方出身の多いことに目をつけた会社は、親元に『貴下の御子息は民青同を中心とする組合を結成して、会社の発展を阻害しようとしている。これは会社の発展を阻害するだけでなく〇〇君の将来にも大きな障害をもたらす。』

赤旗を追放せよ!!

日本ロール従業員労組結成へ!!

— 皆さん協力しましょう —

- 一、日本ロールに健全な労働組合を結成し、明るく楽しい職場にして生産増強を推進しよう。
 - 一、我らの手で健全な娯楽設備を作り、民青のピンクムードに乗りぬよう一致協力しましょう。
 - 一、寮生の電水料は、今後会社負担にするよう協議しよう。
 - 一、社内に購買施設を設けるよう推進しよう。
- 皆さんの健全な思想に依り、健全な労組を茲に結成し、労使歩みよるよう御協力願います。

昭和三十七年十月十九日

日本ロール製造株式会社 江戸川工場

労働組合 執行委員

我が社はこのような活動家を受け入れる情勢ではない。すでに日本ロールには健全な労働組合が結成されており、いずれこの組合に一本化されるだろう。

従って会社の事情に〇〇君の将来を憂慮し御諒解下さいまして、至急〇〇君の行動を中止するよう勸告下さい」との手紙まで送り、親からの切り崩しをはかり、社宅に入っている組合員には職制が家庭訪問して切り崩しの攻撃をかけてきました。

さらに『全国金属はどんな組合か』の長文の印刷物を作り全労働者にまきました。その目次だけ見ても、『増加している全金指導による争議/長期激増傾向にある中小企業、とくに多い全金/総評の最左翼/中央の天下りで動く末端支部/共産党と民青同が一番喰

いこんでいる/政治闘争第一主義/企業と職制を「敵」とみる考え方/企業無視の賃金闘争/交渉よりもストライキ/スト中の犠牲はほかむり/不法は実力行使/相次ぐ暴力事件/損をするのは組合員とその家族/長期争議で会社解散/全金の内部の動き/強まった社会党と共産党の対立/全金を脱退した例」などでたらしめ内容で全金に対する恐怖心と不信感をあおり全金を脱退させ第二組合への加入を計ってきました。

さらに組合つぶしに狂奔する会社は、活動家一名を解雇し、活動する者は解雇する、というみせしめを行ないながら組合員に動揺と不安を与え、組合からの脱退をねらうての攻撃をつづけました。会社は一向に団交に応じようとせず、たまたま開かれたと思ってもまったく権限をもたない工場長が輪番制ででてくるなど、組合の要求はまったく進展しませんでした。

組合員は、唯一人、権限を持っている社長を団交に出席させなければ要求は一切解決しないことを知っていました。こんな時、社長は会社に現れました。

組合員はこのチャンスをおすことなく社長に団交出席を強く要求しようとしたが、社長はみずから、社長室に入りこみ、中から鍵をかけて団交には応じようとしませんでした。社長が裏窓から屋根づたいに逃げたことを知らない組合員は意を決して徹夜で団交出席を要求しました。(このことが社長監禁事件として解雇理由にされている。この他に委員長、書記長、中心的な活動家を査定課から、仕事の性質上組合活動が不可能な営業課への配転命令を出してきま

した。これを拒否したことが、業務命令違反と旧職場に立ち入り職場秩序を乱したとのことで解雇理由にされている。

さらに団交出席を要請に社長宅を訪問したことが、住居宅を包圍、侵入し、ここに來ていた副社長らに暴行傷害を負わせ、悪罵を加えたとして解雇理由にされている。

統出する脱退者

こうした状況の中で、組合員のなかに二つの意見が出されてきました。

断固ストライキをもって闘えという、強行派と、そんな強い戦術を組んだら脱落者を多くするだけという、慎重派とに分れました。執行部は、会社側の組合否認と分裂、弾圧の本質を明らかにしつつこれらの攻撃に対して職場闘争を強化し、断固闘う。しかし、ストライキだけに頼る一発主義的戦術はさける方針をとりました。

要求は一步も進展せず、逆に切崩されていくという事態をむかえ二つの意見は対立し、強行派、はその後の弾圧のなかで簡単に節をまげ、結成前の、急進派、を含めて、いっちょやってみようじゃないか、という感情的な、正しい情勢分析を欠く弱点をもち、一方、慎重派、は組合員の闘おうとするエネルギーを正しく評価できず、敵の攻撃に対して受身になる消極さを生み出した。

こうして結成大会にかかげた要求は、勝ちとれず年末一時金も例年の範囲を突破することができず、逆に職場での組合活動の制限、禁止、会社、第二組合一体の全金切崩しの攻撃のなかで要求を闘いとする姿勢から、敵の攻撃から組織を守る防衛戦に追い込まれざるを得なくなりしました。

組合員も年末には四〇〇名を維持できたものの、年が明けてからの、会社は大量の首切りを用意している。今のうちに全金を抜けないと首にし、社宅、寮から追い出す、という脅迫と切崩しのなかで脱退者は増していきました。

5 小数で工場外へ

解雇

六十三年二月四日、脱退者が続き組合員が動揺しているところをねらって、会社はいつきに組合を破壊しようとして、全従業員を青運ホールに集めました。

一〇〇名近い暴力団に守られながら社長は「会社は、今生産が低下している。これは生産を阻害している者がいるからだ。これらの者は会社に必要ない。だから解雇する」と高々と解雇を行うことを通告してきました。

生れてきもない組合に対する全面的な組合破壊の挑戦でした。

その夜、執行委員二名を除き全員と職場の活動家、合せて三十三名に対し、解雇通告が内務省防で送られてきました。

被告は、絶対に許すことのできない組合破壊の攻撃をうけて立つため大会を開き、断固全面スト、で闘う姿勢を作るためスト権を確立しました。

その夜、組合は工場の一部を占拠しようとしたが、しかし、広すぎる工場を小數で占拠するには不向であり、暴力団との小ぜり合いの末、占拠することは不成功に終りました。

暴力ロックアウト／怒りと涙のピケラインやむなく翌五日は全力を結集して、解雇者を守りながら一緒に就労する戦術に変更し、

全組合員が会社前に結集することを決めました。

しかし、驚いたことになにごとも起きていない五日の朝六時頃にはすでに二五〇名もの警察機動隊は列をなして会社正門前に待機していました。

(このことは、その後の裁判のなかで副社長が証人として出廷し、「解雇するについて、小松川警察署に相談いき、十二月に解雇する予定であったが、署の方は年末警戒で忙しいのでその後にするようにとのことで二月に解雇した」と証言している。解雇は権力と一体のものであることを明らかにしている)

会社構内には、「臨時守衛」という名で雇入れた竹井組の暴力団は一〇〇名以上に増され、ナツバ服、ヘルメットで身を固め、片手

・臨時守衛」と称して、全金破壊のため、のりこんできた暴力団、竹井組

竹井組は、現総理大臣佐藤栄作の院外団といわれる暴力団で、昭和四十年十月の国会で「日韓条約批准」のなりゆきが注目されている時、都内のヤクザ団体(警視庁暴力犯罪取締本部のリストにのっている)の代表を集めて、日韓条約批准支持、が申し合わされました。

この主催者が竹井一家の親分、竹井啓三である。

佐藤栄作と親しくなったキッカケ

△月刊誌 宝石より▽

「ある人に連れられて会いにいった。その前に、やはり師匠長級の人に会いにいったら、自分の名前を机の端から指先でポンとはじいてこした。

私は、なにをするんだ」と三秒で帰ってきた。

佐藤さんは違うんだなあ、実に正確しく、しかも温かく静かに話をしてくれる。もうすつとひきこまれてしまつてネ。私のようなものでもこんなに遇してくれるのだ。この人は立派な政治家だ。その場でよし、オレはこの人のために死ぬ。」と決心した。そして周囲の人には、オレは佐藤のために死ぬ。もし、佐藤に危害を加えるようなヤツがいたら一族七孫までことごとく殺してやる。」と宣言しておきました。なに一目惚というやつですよ」

その他、防共挺身隊、護国隊八三井三池等隊に介入Vの顧問。

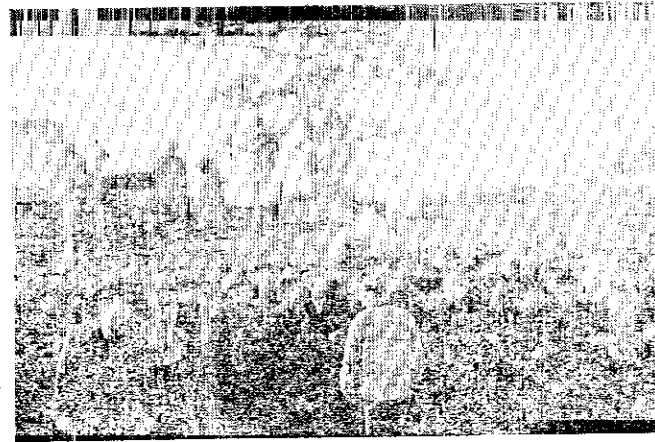
日本園林会の常任理事などもやっている。

に角棒や鉄棒などをもって組合員を待ちうけていました。組合員は、解雇者を守って就労するため会社に入ろうとしたが、組合弾圧を計画した会社、警察、暴力団はこの時とばかり組合員に激しくおそいかかってきました。

前夜とりつけられた構内のスピーカーは、「全金を抜けて、就労しなさい」とがなりたて、全金からの脱退をさげび続けている。

こうして、二五〇名の機動隊と一〇〇名をこえる暴力団の就労阻止の弾圧によって暴力ロックアウトをうけ、小數に分裂させられた上、北風の吹きつける二月の寒空の下にたたき出されるといふ最悪の事態にたたき出されました。

この時、組合員は二〇〇名を割っておりま



組合員は33名を守って生命をはってピケをはった。

した。

それでも「二年間の苦労は無駄にできない」「会社のやり方は許せない」とする組合員は暴力団の暴力、官権の弾圧に屈することなく断固闘うことを再確認しながら、警察、暴力団の挑発と弾圧に注意しつつ、生産阻止の方針をとりました。

そのため会社に入入りする製品、原材料運搬の車を止め、第二組合員の就労を阻止することに重点がおかれました。

暴力団の挑発、警察の介入は一段と兇暴化し、少しでもピケを張れば機動隊がきてゴボウ抜きをやり、暴力団は角材や真赤に焼いた鉄棒などの兇器をふりかざして殴りこんできました。

今まで、ほとんどの組合員が警察を、正義の味方、とばかり思い、暴力団の暴力から守ってもらおうと考えていましたが、逆に暴力団の暴力は見て見ぬふりをし、反対に暴力をうけた組合員をばぐる警察の姿をはっきりと見、それは、資本の味方、であることを思い知らされました。

組合員は、「生産が上がっては勝てない」「車は一台も入れるな」と必死になって車を止めようとし、会社に入ろうとするトラックを動けないように車の下に横になり、自分の体をタイヤの歯止めにしてまで止めようとする等、もう無我無中で闘いました。

一方、就労する第二組合員に「てめえたちが会社に入るから、おれたちは勝てないんだ」「この犬め」「裏切者」と悪罵を憎しみをこめて投げつける組合員もいました。

しかし、警察と暴力団に守られて第二組合員と車は会社に入っていきます。

毎日のように、そして一日のうちに何度となく暴力団の暴力と警察の争議介入は繰り返されました。

会社・警察・暴力団の弾圧の実態

二月五日、朝六時、暴力団一〇〇名、機動隊二五〇名で全金の就労を暴力で阻止する。

二時間にわたって暴力団あばれる。組合員一週間の負傷者六名、軽傷者三十名前後。

二月六日、正門のビケに暴力団数回にわたっておそいかかる。

午前九時三十分、機動隊二五〇名による

竹井組暴力団は無抵抗の組合員の首をしめ髪をひっぱるといふ暴力を振った。



ゴボー抜き、開始される。

一週間の負傷者十四名、その他軽傷者多数。

夜十二時前後、闘争本部に暴力団、二度乱入。

二月八日、朝、葛西各寮出入口にたむろして、全金組合員おどす。

午後一時、ビケ隊に消火用ポンプで水をかけ、暴力団なぐり込む。三名一週間の負傷。

二月十日、前日同様、暴力団、ポンプでビケ隊に水をかける、又、車を説得する組合員を終日脅し妨害する。

正門で徹夜でビケを張るも、ポンプで水をかけられ、数名なぐられる。

二月十一日、朝、八時工場裏でビケ中の組合員暴力団数十名におそわれフクロたたきにあう。

九名一週間をこえる負傷。

午後二時、暴力団に暴行をうけた組合員不当にも検挙される。

午後六時頃、組合員顔面をけられ、両眼失明寸前の重傷を負う。

警察は終始見て見ぬふりをし、暴力団擁護に狂奔する。

三月一日、相変わらずビケを張れば発砲、脅し、車を説得すれば暴行をうける日が続く。

三月十五日、ビケ隊の顔面近くに真っ赤に焼いた鉄棒をふりまわす。一段と兇暴化する。

三十名以上の負傷者が出る。その直後の団交で、車にひかれて死んだら、ビケを張った方が

悪い」と会社側暴言をはく。

三月十八日、朝の就労者を説得中、暴力団におそわれる。数名負傷。夜十時、ピケにポンプで水をかけ、暴力団数十名でなぐりこむ、一時間に渡って自身の体と闘争本部を死守する。重傷十名、軽傷四十名。

四月十三日、第三寮管理人を暴力団がこすまわす。髪の毛を掴んで引きずりまわす。争議開始後初めて社長姿を見せる。一〇〇名の暴力団に守られて、暴力団一列に並び社長に最敬礼をする。

五月九日、組合員暴力団に顔面をけられ、一週間の負傷、そばにいた警察官に追及すると、捕まえてやるから犯人を連れて来い」と腰を上げようとしぬい。

五月十九日、暴力団、組合員の寮の室に乱入し占拠する。

五月二十四日、暴力団ピケに向かって回転椅子を投げて殴りかかり、この際、組合員不当にデッチ上げられ検挙される。

七月二十四日、組合員に、暴力団ナイフをつきつけ脅す。

八月二十四日、委員長、闘争本部で暴行をうけ三週間の重傷

事件が発生すると同時に、電話は警察署にかかり、他に通じないという現象が起き、受話器を置くと警察署から電話が入ってくる状況がおきる。

しかも、附近には空の警察のトラックと共に機動隊が待機していた。これは大量検挙をねらった計画的挑発事件と考えられる。

限らない暴力は、葛西の町を、暴力の町と化しました。

当時の記録には「朝、集合してピケを張ること事態、命がけだった。何時、重傷をおわされるか解らないという恐怖との闘いの毎日だった。しかし、人間の尊厳と基本的権利を守る闘いである」と記されています。

組合員に対する暴力と弾圧の嵐が続くなかで、第二組合員は就労し、車は自由に出入りしていきます。生産を止めれば勝てると思っていた組合員の中にピケの効力のなさに動揺



警官に守られた暴力団は、あらん限りの暴力を行なった

が生まれました。

不安とあせり

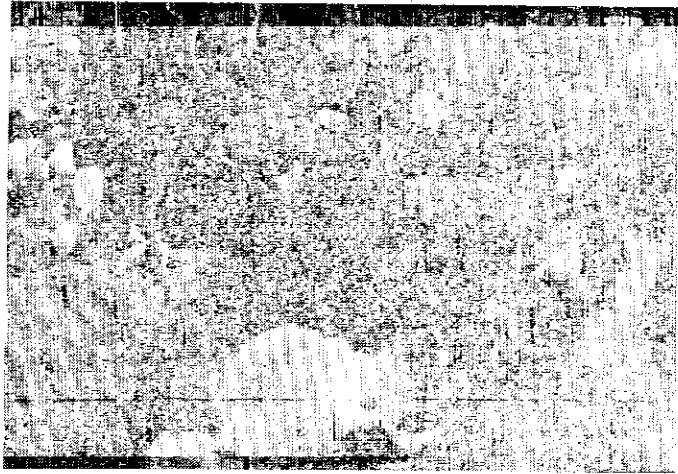
・こんなに就労者や車を入れては組合は敗ける、闘争委員会は挑発にのるなの一点ばりで逃げ腰だが、警察や暴力団はたいしたことあねえよ、多少犠牲を出したって強固なビケを張ろうじゃねえか、という意見が出されました。

しかし、強力なビケは力関係からみて不可能なことでした。

ビケの万能を信じ、暴力と権力をおそれず一途にスクラムを組んできただけにその失望と狼狽は一層大きいものでした。

勝利への展望と確信を失ない組織的に、危険性をはらんだ時でした。しかし、暴力と権力の弾圧に耐えてきた組合員は、「どうしても勝たなければならぬ」「会社に一泡ふかせたい」「運之助は許せない」という怒りと憎しみが組合員に勝利への展望と確信を真剣に求めさせ、少数で分裂させられ、その上工場外にたたき出されている。暴力ロックアウトの条件のもとで、勝利するために、どうすればよいか、ありったけの知恵と力を出しあって討議をかさねてきました。

Ⅱ もえひろがれ葛西の火



勝利めざす四つの柱

全金組合員二五〇名は、工場からたたき出され、約一、〇〇〇名の労働者が、暴力団、警察に守られ就労し工場の生産についているという困難な条件の中でどう闘えばよいのか。

会社にストライキやピケをもって、直接、経済的打撃を加えられないという問題は、組合員の悩みと動揺にさえなっていました。

しかも、まわりの地域住民からは、「全金はアカだ」と白い眼で見られ孤立しており、闘争本部すらもないという全く不利な状態でした。

労働運動の経験の全くない組合員は、全金本部や労働者教育協会などから、講師にきてもらいピケのあい間に十数回にわたって学習会を開きました。

そして、警察や暴力団の弾圧と闘いながら、争議の実態をまわりの組合に訴え、第二組合員にピラマキをやるなどして必死で活動を続けていく中で、だんだん闘争方針をねり上げていき争議に入って四ヶ月後の六月一日、臨時大会を開き、次の方針を決定しました。

1、支援共闘の強化

(1) 全国金属に一層の支援をおおぎ、連帯ストが組織できるまでに闘いを広げる。

(2) 未組織労働者を組織する。

(3) 日韓会談を中心とする全国的な政治課題と正しく結合する。

2、分裂との闘い

(1) 第二組合を敵視しない。

(2) 第二組合の不満と要求を聞き組織し、職場に闘いをおこし、統一を強化する。

3、地域住民との結合

(1) 町内の農民、漁民の苦しみと要求を聞き組織し町民と結合する。

4、支部の団結強化

(1) 以上の方針を長期に貫けるよう学習に励み、全員で闘う。

(2) アルバイトを中心に生活体制をいっそう強化する。

(3) 全員の声を闘いに反映させ、力を発揮させるため二十二班の班編成にする。

こうして、闘いの方針が一応確立され、活発な行動をくり広げていく事になりました。

1 支援共闘の発展——万人の大集会や連帯ストは

どのようにして、成功したか。――

東京の片すみで始まった日本ロール闘争は、争議突入後九ヶ月目に、「日本ロール支援一万人団結大集会」を成功させ、一年後の一九六四年二月五日には、全金東京東部地協一万人の「日本ロール闘争必勝連帯ストライキ」を成功させました。

こうして、日本ロールという比較的小さな単組の闘いが、大衆的支援をうけ、前進し、さらには、映画「ドレイ工場」製作上映運動へと発展させていった力は何でしょうか。

おーい、激励電報がきたぞお。

一九六三年二月五日早朝から、三十三名が不当解雇され、三五〇名の暴力団、警察機動隊の弾圧が始まりました。二五〇名の組合員は必死でスクラムを組み、ピケをはったが、暴力団、警察の弾圧は、荒れくるい血が流されました。

生まれて初めての経験に怒りがこみ上げる。不安が頭をかすめる。会社、暴力団、警察の力が

とても強大に見え、自分たちの力がとても小さく感じられました。

しかし、誰も助けにきません。「いったい、全金は何してるんだらう。俺たちがこんなにやられてるのに！」

日本ロールは、東京のはづれ、千葉県との境にあり、交通機関は都バスただ一つです。一番近い国電の錦糸町、亀戸の駅から、バスでたっぶり三〇分はかかる所です。動員をかけるのには、全く不便という地理的困難性もっています。そのため、支援がくるまでに、いくらかの日数がかかりました。その間は、事態が事態だけに、組合員の間には、不安や孤立感さえありました。

「おーい。激励電報がきたぞお」、ピケをはっている組合員の顔がいつせいに委員長にむけられました。二五〇名の組合員は、初めての支援に心をおどらせ、委員長の読み上げる電報に聞き耳をたてました。読み終るといつせいに拍手がわきました。

「俺たちの闘いを支援してくれる人がいるんだ」。たった一本の電報に、みんなは、うれしくて感激していました。その一本の電報は、感激している組合員の手から手へまわされていき、その後のピケや労働歌の合唱には、いつそう力がこもりました。

二月九日の夕方、全金東部地協と江戸川区労働協主催の日本ロール支援デモが、約三キロはなれた行船公園から、日本ロールへ向けて行進してきました。その数は、約五〇〇名でしたが、その

姿を見た時、ピケをはっていた組合員は、うれしくていっせいに拍手がわきました。

わざわざ現地へきた最初の支援でした。このデモの中には、荒川区から二時間もかかってきた人も含まれていました。ピケをはる組合員の前での激励のあいさつは、暴力団、警察の弾圧をうけ、必死で闘っている組合員にとって、涙がでるほど力強くうれしいものでした。カンパと激文が委員長の手には渡されると再び、いっせいに拍手がわき長く続きました。

このように、争議が始った頃は、一通の手紙、一本の電報、一人の支援もみんなの前で紹介され、それらの支援に感激し励まされました。そして「自分たちは、孤立していない、見守ってくれる仲間がいるんだ」と勇気づけられていきました。

一万人の団結大集会へ

暴力的にロックアウトされ、職場に入れない日本ロール闘争は、闘いを広めることに特に多くの力を使いました。

東京のはづれ江戸川区葛西の一角で始まった争議が、やがて東京の下真中のあの広い日比谷野外音楽堂をいっぱいにする団結大集会を成功させるまでに発展するとは誰れも最初は考えていませんでした。組合員は、必死で組合まわりをやりピラまきをやって一人でも多くの人に闘いを訴えていったその結果が、一万人大集会へと発展していったのです。

闘いを訴え広めていった主な行動と力は、次のようなものです。

1、組合まわりのつみ重ね

毎日、不当解雇と暴力弾圧の実態を訴えるビラが作られました。今までに、ガリ版など使ったことのない労働者が作ったビラは、下手くそで読みにくいものでしたが、労働者の怒りがいっぴいに感じられるものでした。

また、警察、暴力団の弾圧の現場を写真にして、大きな紙にはりつけた写真集や壁新聞は、さまざまに争議の実態を目で見てもらうことができ大きな効果がありました。

これらを持ってオートバイや自転車部隊が、江戸川、江東、墨田、葛飾など東部地区の労働組合を走りまわりました。この時の服装は、はちまき、腕章をつけ、マジックインキで「不当解雇撤回、暴力反対」などのスローガンを書きつけた作業服を着て、履きものは、晴れの日も雨の日もゴム長靴でした。今、考えれば、よくやったと思いますが、当時は無我夢中で恥しいも何もありませんでした。時にはその姿でバスや電車にのり、銀座をぞろぞろ平気で歩いた事も何度かありました。

また、それまでは機械を相手に仕事をしてきた労働者ですから、人前ですじ道だてて上手に話す経験など持っていませんでしたので、づい分と無礼な態度や言葉使いをしたこともありました。「日本ロールは、口が悪い」とよく言われました。しかし、組合員の訴えは真剣でした。あ

る組合員は、組合の理論や論法は全く知らないで、訪ねていった組合役員から、組合用語で質問されても、何を質問されているのか分らず、ただ暴力弾圧の写真を見せ、こんなにやられているんですとだけ夢中で訴えたといっています。

日本ロールの会社の内容や暴力弾圧のようすを聞いた人たちは、「今どき、そんな会社があるんですか？」とびっくりし、最初は簡単に信じない人もいました。ある労組の役員は、ロールの話を聞いて、「日本ロールはひどい。まるでドレイ職場だ」と叫びました。この言葉は、「ドレイ職場日本ロールを労働者の力で解放しよう」という日本ロール闘争のスローガンになっていきました。

こうして、あまりにひどい日本ロール争議のようすが、次第に広がっていきました。組合まわりは、さらに広げられ東京の南部、北部、西部へと足をのばし全金東京地本三〇〇支部を中心に手がかりのある組合へはどこへでも入っていきました。総評、同盟、中立労連などのちがいの全く知らなかったの「盲、蛇におじず」で、ある時は、同盟の大組合にとびこみ、いやな顔をされながらも、弾圧の実態を真剣に話したこともありました。

広い東京を、組合名簿の住所と地図をたよりに一つ一つの組合をまわって歩くには、いろいろな苦労がありました。なかなか訪ねる組合が見つからなかったり、せつかく探してても昼休みにならないと面会させてくれない会社もありました。

こうして、寒風吹きすさぶ冬は、鼻みずをこすりながら、持ち切れないほどのビラ、闘争ニュースをかついで、東京中の組合から組合を訴えて歩き、夏は汗とほこりにまみれながらいつそう重く感じるビラをかついで、真っ黒に陽やけして闘いを広める苦労を毎日続けました。この組合まわりの結果、全金、江戸川区労協を中心にして、多くの組合に日本ロール闘争が知られるようになり、次第に関心が高まっていきました。

2、交流会の組織

組合まわりによって、組合役員の人たちには闘いが訴えられていきましたが、職場の労働者には、闘いを直接に訴えられない問題がでてきました。そこで、「日本ロールの実情を訴える会」や交流会を大衆的に組織してゆくことが始められました。

初めは、江戸川区内の近くの組合から実行に移され、仕事を終えた夕方五時すぎから、その職場の労働者に一〇人でも二〇人でも集まってもらい、日本ロールから五人、一〇人がグループになってでかけていき、暴力弾圧の実態やどうしても負けれない争議であることなどを熱く語り話しました。するどい質問がとび出し、とまどう事があったり、逆にいろいろな闘いの経験を教えてもらい自信をもつことができました。交流会の終りには、その場でカンパが集められ励まされて帰ってきました。

往復四時間もかかる南部や西部の組合へも、闘争を知ってもらいたい一心で出かけ、帰るのが

十二時を過ぎることなどもたびたびありました。そして、話を聞いた労働者が、こんどは、数十人で日本ロールの現地へ交流に出かけてきてくれました。

また、昼休みや組合大会、職場集会などには、訴える時間を作ってもらいました。組合員は、生まれて初めて多勢の人の前で話すことになり、すっかり上ってしまい、全身に汗をかきかき訴えたのがわずかに五分でしたが、後で考えても、自分で何を話したのかおぼえていないという人もずいぶんいました。

こういう交流会や実情を訴える会は、一日に五ヶ所も六ヶ所も重なったこともあり無数に組織され、闘いは、いっそう職場の中に浸透していきました。また松川事件無罪要求行進や平和友好祭などにもピラや写真集をもって参加しました。こうして、いろいろな労働組合や民主団体の人と交流する中で組合員自身もたくさんのことを学び、勇気づけられ、成長してゆきました。

3、大量のピラまき

二月十四日に、全金本部は、飛行機（セスナ機）をチャーターし、空から「日本ロールの暴挙を訴える」ピラ約十枚を日本ロール周辺を中心にまきました。これには、会社も第二組合もおどろいていました。

朝六時ごろから出かけていき、各労働組合の出勤時での早朝ピラ入れをはじめ、錦糸町、亀戸などの駅前でのピラまきを続けました。そして、日比谷野外音楽堂での日尊会談反対や横須賀で

の原潜寄港反対集会などには、もち切れないほどのピラを必らずまきました。メーデーには、組合員全員がはちまき、タスキをして十枚のピラをまきました。こうして労働者が集まる所へはどこへでも、はちまき姿、出かけていきピラまきを続けました。「また日本ロールがきてるな」とか「ここにもきてるのか」とか「集会で日本ロールの姿を見ないことがない」といわれるような状態でした。

4、あざりとお菓子の行商

闘争資金を確保するためのお菓子やあざりの行商も連日、各組合の協力で昼休みに工場のなかで店を開きました。この昼休み行商は、広範な職場の労働者に元気に闘っている姿を見てもらうまたとない場になりました。特にあざりは、浦安海岸でとれたばかりの新鮮なもので、「団結あざり」と名付られ、安くて、品がよくて親切だということで日本ロール名物として大評判になり、闘いを広める上で役立ちました。

5、各組織の機関紙にとり上げられ、闘いは全国へ。

このようにして闘いが少しずつ知られるようになっていき、次の段階でいろいろな機関紙に日本ロールの闘いがのせられていきました。

「全国金属」は、何回も特集号を出してくれました。そして、「赤旗」「社会新報」「総評」「月刊総評」「学習の友」「グラフわかもの」「民青新聞」などが、写真入りでとり上げてくれ

ました。各支部の組合ニュースで日本ロール闘争をのせてくれた所は、数えきれません。

また、総評などが呼びかけて、日本ロール闘争の共同デスクが行なわれ、さらには日本ロールの最も重要な取引先である富士製鉄の労働組合が加盟している鉄鋼労連は、門閥委員長「日本ロール闘争に勝利を」という訴えをトップにした日本ロール特集号を発行してくれました。

少し後になってソ連のプラウダや中国の人民日報にも紹介されていきました。これらの新聞、雑誌の報導で闘いは、全国に伝えられ文字どおり北海道から沖縄にいたる全国各地の労働者から次々と激励文や寄せ書やカンパが送られてくるようになり、組合員は闘いのいっそうの広まりを知り、確信をもっていきました。

6、全国金属、総評、東京地評で支援決議

全金東京地本は、五月十五日の委員会で「日本ロールの闘いは鉄鋼中小資本家の前近代的ファシヨ的労務管理を打ち破る人権擁護闘争として、その成否は中小企業全般に大きな影響をもつことを確認し、地本の全組織を上げて闘う方針」を決定しました。

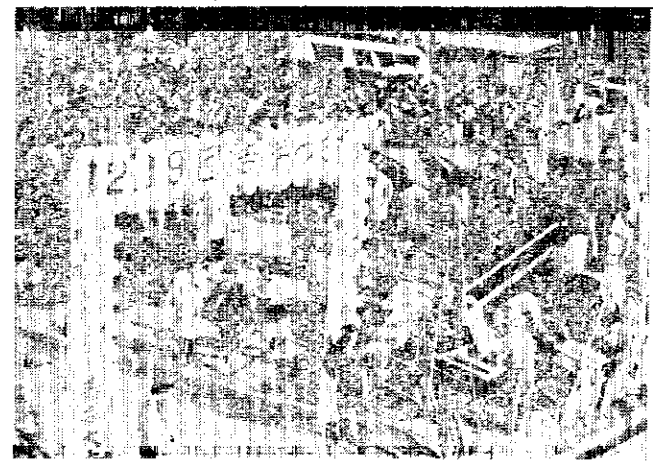
さらに七月には金属共闘全国代表者会議での支援決議につづき、第二三回総評大会で、全国の争議団と共に壇上に上り、代表して千葉委員長が決意を表明し、長期争議支援の決議をうけました。つづいて、東京地評大会でも支援決議がなされ、これらの支援決議は、組合員を励まし、組合まわりをいっそうやりやすく闘いは急速に広められていきました。

7、支援カンパ、決起集会、全国オルグ

こうした支援決議が次々と実行に移され、支援カンパは、全金東部地協が二月に、東京地本が五月に、全金中央は七月にとりうふうに次々と何回も決定され、その納入率は八〇%をこえました。

また、総評、地評、江戸川区労協、全金の共催による総決起集会が六月八日に、日本ロール現地で開かれ、地理的な困難性にもかかわらず、三〇〇〇名が結集し、江戸川区内の集会としては最大規模のものになり、葛西の町に初めてデモ行進が行なわれました。

六月二日からは、他の争議団と共に全国オルグに出发し、全金二〇万組合員に直接闘いを訴えることができました。また富士製鉄の室蘭、釜石、広畑の三工場二万人の労働者へ



争議支部に一時金はないがどでかい連帯があった。(もちつき大会)

のオルグ団派遣も富士鉄労連の好意で二回にわたって行なわれ、日本ロール会社に動揺を与え
した。

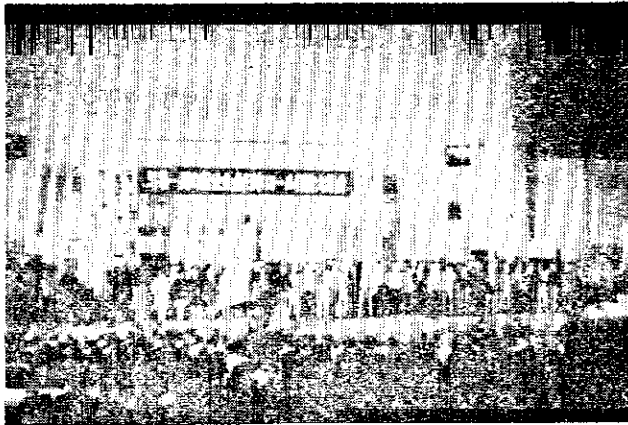
こうして闘いは、全国の職場にまで広がり、全金の呼びかけにより激励団結袋が全国から届け
られてきました。その袋の中からは、お米、カンヅメ、インスタントラーメン、衣類、ビタミン
剤など心暖まる品々が、山とつまれ、組合員は労働者の連帯を肌身感じて知ることができまし
た。

8、十月十八日の一万人大集会の成功

これらの宣伝、オルグ活動の積み重ねと闘いの広まりの中で、八月三〇日、東京地本佐竹委員
長、全金中央の平沢争対部長、東京地評佐藤争対部長、東部地協中里議長と支部が出席して、日
本ロール対策会議を開き組合結成一周年の十月十八日に一万人規模の大集会を開くことが決定さ
れました。そして10・18めざし、総評、東京地評、江戸川区労協、金属共闘、全金などで実行委
員会が作られ、ポスター、新聞、ビラなどによる宣伝とオルグ活動が約一ヶ月間にわたって続け
られていきました。

十月二十一日付の「全国金属」は、第一ページ全面を使い、次のように書いています。

十月十八日、日本ロール闘争一周年団結大集会は、一万名の参加で見事に成功した。会場の日
比谷野外音楽堂の入口には、全国各地の組合からよせられた激励の赤旗がぎっしり並べられ闘い



生れて初めて舞台上に上った。仲間の顔が涙でみえない。(10.18集会)

の激しさと広がりをも物語っている。午後四時
栃木県労、全金栃木地本、長野地本などか
ら、日本ロールへの激励団結袋がトラックで
運びこまれ、壇上につみあげられる。五時半
頃には、東京の東の果てからバス二台で日本
ロールの家族、就労者、地元の町民などが到
着、子供づれも交ってなごやかな雰囲気がか
会場に広がる。6時の開会までには、鉄鋼、全
日自労、都職、全国一般、電通、造船などの単
産もふくめ約一万名が会場を埋めつくし、舞
台には「ドレイ職場日本ロールを労働者の力
で解放しよう」などのスローガンが鮮やかに、
浮かび上っている。……」

そして、東京芸術座が中心になって演じた
「団結は暴力に勝つ」と題する野外構成劇は
参加者に、日本ロール闘争を感動的に訴え、

鳴りやまぬ拍手の中で、全員総だちになってスクラムを組み、「がんばろう」の大合唱がくり返えされ、「日本ロールを勝利させよう」という感激と連帯の気持が参加者の胸に広がり燃え上っていきました。

10・18 一万人大集会は、九ヶ月前に工場外へたたき出され九分九厘負けているような状態から全金を中心とする全国の労働者にガツチリ支えられ、逆に会社に対して反撃に移っていく態勢を日本ロール闘争が築いたという点で大きな意義をもっています。また、この一万人大集会によって、組合員、家族がどれほど、励まされたかはかり知れません。

一万人の連帯ストをめざして

1、日本ロール対策委員会の設置

10・18 大集会は、参加した各組合の労働者にも大きな感動を与え、その後の組合まわりでは、あちこちの組合で「あの集会は、本当によかった」といわれ、「あの夜は、感動しすぎてねむれなかったよ」「ああいう集会なら何度でもやってくれ」などという意見まで出されました。

こうして、「日本ロールをなんとか勝たせなければ……」という声が広まっていき、10・18 大集会の成果の上になたって、全金東部地協は、「日本ロール対策委員会」を全支部に設置すること

を決めました。この対策委員会は、日本ロールの闘いの内容と意義を全支部の全組合員が理解し、闘いを強化することを目的としました。

対策委員会は、組合三役から一名を加えるほかは、職場の組合員によって構成することを原則とし、各支部の対策委員会の代表者によって十一月四日に、東部地協の第一回日本ロール対策委員会が開かれました。

この会議では、各支部とも日本ロールの闘いが組合員の中に浸透してきている事が報告され、10・18 大集会にしても、支部役員の予想以上に参加者が出てきている事によっても証明されているという発言がありました。そして会議の中では、地協常任幹事会の「日本ロールの闘いの決定的な勝利を得るには、資金カンパ、行商の受け入れ、動員などの支援行動から、東部一万人組合員の連帯行動を組織する必要がある」という提案について討議されました。

しかし、この行動は、東部地区でも、全金東京地本の歴史の中でも、初めての試みであり、まだ十分理解されておらず、ふみ切る段階にきていないが、その意義を年末闘争の中で討議していく事が確認されました。

2、地協常幹が連帯ストを決意。

その後、全支部で討議がつみ重ねられ、一月十一日に開かれた地協常任幹事会は、

① 地協あげてのロール必勝連帯ストは、争議突入一周年の六四年二月五日午後一時より一時

間決行する。

② 各支部は一月末日までにスト権を確立し、地協に集約する。

③ この闘いを春闘の第一波の統一行動とし、突破口とする。

との指示を出すことを決め、二〇日の第四回ロール対策委員会で確認されていきました。

3、各支部でスト権を確立

この決定にしたがって、藤沢製作、松尾橋梁、日本鉄塔、前田鉄工など次々と各支部でロール必勝のスト権が確立されていきました。

スト権投票の前に、日本ロール闘争の内容と意義について、地協では二度にわたって一万枚のピラを配布し討議を深め、地協常幹全



全国各地から、団結袋、カンパ品が山の様に届いた。決意がかたまる時だ。

員が全支部をオルグし、スト権確立を促進してまわりました。

ある職場では、最初の大会で「ロールスト権」は、「うちだけで大変なのに、いくら日本ロールでもストを打つまで手はまわらねえよ」と否決されてしまいました。しかし、ロール対策委員会に参加し、他の支部の準備の状況を聞くなかで、「自分の工場だけの条件の困難さを目をうばわれている時ではない。なんとしても「ロール必勝2・5連帯スト」に参加しなくては」と思い立ち、職場に帰って教宣活動を徹底させました。ロール闘争だけを切りはなして訴えるのではなく、春闘要求との結合をはかるように苦心し、ロールの仲間にもきてもらい、交流会を行ないました。

そして、再び大会を開いた時は、すでに職場の空気は変わっており、圧倒的な支持でスト権が集約されました。また、もう一つの職場では、スト権確立の過程で「うちの賃上げストを打つならまだわかるが、他人の争議でストを打たれてたまるか。もし決行したら断固責任を追及する」という資本の攻撃を受けました。しかし執行部は、連帯ストの問題だけで、七回におよぶ団交を開き、日本ロールの劣悪な労働条件と組織破壊の兇暴な弾圧を訴え続け、どうしても連帯ストの必要を説きました。その結果、経営者までが、「経営者としても許すことのできない非人間的な行為だ」と語り、責任を追及するどころか、組合と共に日本ロールに抗議電報をうつというめざましい成果を上げていきました。

4、一万人の連帯ストの成功

こうして緊張のうちに明けた二月五日、安
保闘争後、日本の労働者階級が初めて勝ちと
る歴史的な連帯ストは午後一時を期していっ
せいに打ちこまれました。

日本ロール闘争本部の電話はなりつづけ、
各支部に訴えにいった組合員から、スト成功
の知らせがとびこんできました。

結果は、ストライキ決行三十一支部、時間
内にくいこむ抗議集会、残業拒否十一支部、
昼休み抗議集会九支部、計五十一支部、参加
人員一万人。今までの地協の各支部の歴史の
中で一支部の闘争の意義は判っていても、資
金カンパ、動員などにとどまっていたものが
「ドレイ職場日本ロールを労働者の力で解放
しよう」という呼びかけに、全金東部のすべ

全金東部の仲間たちは、俺たちのためにストライ
キまで打ってくれた。(2・5連帯ストを訴える)



ての組合員がこたえ、たち上ったのです。

また、全金東部地協だけでなく、南部、北部、西部の各支部でも昼休みに抗議集会が開かれ、
日本ロールに向けて抗議電報が集中されました。

さらに、全日自労東京支部や全国一般秋山機械もこの二・五連帯行動に参加し、いっそうの広
さと力強さをつけ加えました。

さらになお強くなる

こうして、一万人大集会から一万人連帯ストの成功へと高まっていく中で、十二月五日には全
金青婦協主催の団結もちつき大会や、一月一日の日本ロール激励集会なども開かれ、さらに二月
九日には、総評弁護団と自由法曹団一〇〇名が「日本ロール激励、大学習交流会」を開くなど支
援共闘体制はぐんぐんもり上り広まっていきました。

その後、この年の四・一七ストについての日本共産党声明に対してとった支部の態度をめぐる
混乱などにより、日本ロールの支援共闘体制は一時的につまづきましたが、再び、組合まわりや
ピラミキなどの活動を続ける中で、毎年十月十八日には一万人規模を目標とする大集会が行なわ
れ、二月五日には、東部地協の昼休み一斉抗議集会が決行されてきています。

こうして日本ロールの六年半の闘いは、大衆的な支援共闘の発展によって大きく前進してきま

した。

これらの支援共闘が大きく組織されてきた方の一つは、組合まわり、交流会、ピラまきなどの活動を一步一歩ねばり強く積み重ねてきた事であり、二つは、全国金属、江戸川区労協などをはじめとする各級機関の強力なとり組みであり、三つは、これらの要請に応じてくれた各労組の努力であると思います。

日本ロール闘争が、一日も早く勝利するためには、もう一度、一万人大集会や一人連帯ストを成功させた、あの押せ押せムードの巨大な力を日本ロールへの抗議行動としてぶっつけていく必要があります。

今、全産業にはげしい「合理化」攻撃が加えられ、労働者の生活と権利を守る闘いは、ますます重要になってきていますが、これらの各職場での闘いと日本ロールの闘いを結びつけ、いっそうの支援共闘の発展のために努力していかねばならないと考えています。

2 統一をめざして——第二組合が、どのようにして、

七十二時間ストや十四日間ストを決行したか——

日本ロールの第二組合は、全金日本ロール支部をつぶすために会社が、作らせた御用組合でした。

しかし、一年後の六三年には、年末一時金闘争で二十四時間スト、六四年には退職金要求で七十二時間スト、そして六七年には春闘で十四日間のストにたち上って闘いました。なぜ、どのようにしてたち上っていったのでしょうか。

仕組まれた第二組合

第二組合が結成されたのは、六二年十月十九日の夕方でした。その前日の十月十八日の夜に、全金日本ロール支部が公然化されたばかりでした。

十九日の朝、職制が、門前で出勤してくる労働者に「日本ロールから赤旗を追放しよう。」のピラを日本ロール(株)労働組合執行委員会の名でまき、マイクでがなりたてていました。

そして八時からの朝礼の時に各工場長から「全金に入っていない者は、青運ホールに集まれ」

の号令が下り、追いたてるようにして集合させました。青運ホールには、社長を先頭に重役、工場長、職制が並び、社長は「全金は認めないが、御用組合なら認める」主旨の演説をし、第二組合の結成をその場で行なおうとしました。これらは、みな昨夜の緊急重役会議で決めておいたのでしよう。

しかし、場内はざわめき、「いくらなんでも、社長や重役といっしょに組合をつくるのはおかしいんじゃないか」という声がささやかれました。そのため、社長、重役たちは、まずいと思ったのか、いったん解散し、夕方再び、青運ホールに集まるのが命令されました。夕方の集会では職制たちが、重役会議の指示どおりに第二組合結成大会を進行させ、職制を中心とする執行部を承認させました。このように、日本ロールの第二組合の出発点は、会社の手によって作られた天下一の御用組合でした。

会社は、「全金は過激で会社をつぶす」「全金はアカだ」などの宣伝を大々的に行ない、全金組合員の切り崩しや団体交渉の拒否などを一貫して続けてきました。一方、第二組合とは、団交をやり、あらかじめ打合せた、ごくささいな要求(たとえば十八歳以下の寮生には寮費の補助を出す)に回答して、第二組合に入っていれば、安全だという印象を与えようとしていました。

このような状況の中で労働組合がどういふものか知らなかったり、全国金属についてよく知らなかった人たちが、会社の宣伝や圧力のために第二組合に入った人もいました。そして第二組合

にも全金にも入らない中立の人もかなりいました。

このように日本ロールの第二組合は、執行部は、御用幹部ですが、下部の組合員には事情がよく分らないで入った良心的な労働者もまじっているという性格をもっていました。

くやしきこらえておはよう

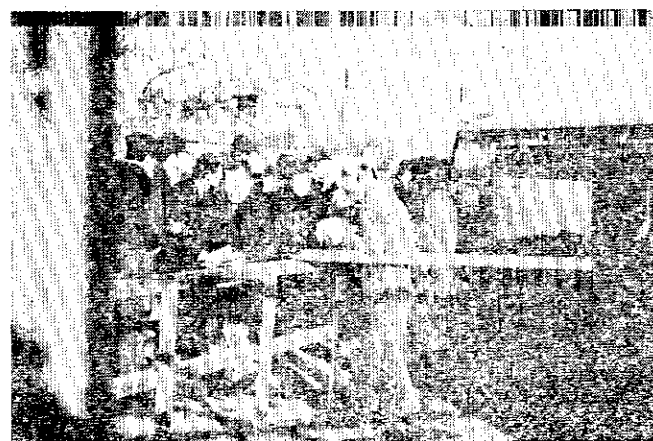
六三年二月五日に全金組合員が一人残らず工場外へたたき出され争議に入りましたが、この時全金組合員二五〇名、就労者一〇〇〇名という数字でした。分裂させられ、しかも少数派に追いかまれその上職場からたたき出されるといふ非常に困難な状況につきおとされてしまいました。

「職場をトリデにして闘う」という労働組合の原則から考えれば、どうしても、生産点にいる就労者と団結すること、共闘できるようにすることが重要です。職場で、第一組合と第二組合がいっしょに働いていても、なかなか団結し共闘することはむずかしいものですが、日本ロールの場合同は全金は外へ、第二組合は中にと隔離されてしまっているのはいっそうの困難さがあります。しかし、全金が外に出されているから、なおさら職場に入っている就労者と団結し闘いにたち上らせることが重要になります。

こうして、第二組合を敵視しないで、あいさつをし、話しかけようという方針が決定され実行されます。

ピケをはっている全金組合員の前を暴力団、警察に守られて第二組合員が就労し生産を上げ、

勝つためには第二組合の人にも、くやしきこらえて、おはよう。(暴力団に守られて就労する第2)



会社の全金破壊攻撃を保障する役目を果しました。

心の中では、くやしい、憎らしいと思いがらも、「おはようございます」と声をかけピラをわたさなければなりません。大部分が、ふり切って逃げるようにして、門の中へ入っていきます。

ある組合員は日記に次のように書いています。

「人の前を通るのに顔をかくしたり、全然上を見ず下をうつむいたままだ。ああいう人はどんな気持なのか。……中には「おはよう」というと「うるさい」と一言いうのを見ると寒い所に自分らは立っているのだから、にくしみは百倍だ。また暴力団になぐられ、警官におどされたりするとそれに輪をかけたよう

に憎しみがます。しかしながら第二組合員をうらんだりしてはだめだといわれ「忍耐と寛容の精神で一闘わな限り勝利はあり得ない」とのことだ。貧乏には、なれているが、精神的にはどうも参ってしまうようだ。……」

また、社宅では、どこでも全金に入っている家は圧倒的に少数で、中には一〇〇軒に四軒しかない地区もあり、第二組合の奥さんたちからつまはじきされ、買物物にいくにも別々にいくような状況で、「とてもつらかった」と話しており、なかなかうまくいきませんでした。

玄関ばらいから「まあ、上げれよ」へ

第二組合がにくい、くやしいという気持ちを押えて就労者対策活動がつづけられていきました。毎朝、門前で「おはようございます」と声をかけてピラまきをくり返しました。ピラの内容は、全金の首切りのことばかりでなく、他の職場の労働条件を知らせ日本ロールの賃金や一時金がどれほど低いものであるかを比較せたりしました。また、労働組合とは、どうあるべきなのか、賃金や一時金の本質についてなどく基礎的な考え方なども教育宣伝していくようにしました。しかし、このピラもなかなか受けとらず、あいさつしても顔をそむけ、ピラをわたしてもまるめて顔にぶつけられることもどれ位あったでしょうか。

また夜には、社宅や寮などを訪ねていき話合うようにしましたが、「こんばんわ」と呼びかけても全金だと見ると玄関のカギをかけて中へ入ったきり出てこないという状況で、話合うどころ

か玄関の中へも入れてもらえない有様でした。そんな時、玄関に向つて「バカヤロー」と力いっばいどなってやりたいくやしさを感じたという人もいます。しかし、争議に勝つためには、どうしてもそのカベをやぶらなければなりません。

こうして、二ヵ月、三ヵ月とねばり強く工作をつみ重ねていくにしたがつて、次第にピラを受けとる人数もふえ、道であつてもあいさつする人がふえていきました。玄関ばらいをくわされていた家庭訪問も、玄関でのたち話が始まり、次には「まあ、上ってください」とすすめられ、出されたお茶のみながら話をきいてくれる方向へと進んでいきました。

「俺は、全金の組合がよく分らなかつたので、中の組合に入ったが、全金のピラで少しづつ労働組合とは、どういうものか分つてきましたよ。しかし、全金は俺たちのことを第二組合とか御用組合とか呼ぶが、はじめに自分たちの組合だと思つている人もたくさんいる。たしかに執行部は御用幹部かも知れないが、下では、要求を出して会社と交渉しようという人もふえてきているんですよ」と話してくれる人もでてきました。この事から反省し「第二組合」とか御用組合という呼びかたを改め、就労者とか労組とか労組と呼ぶようにしました。

また、「労働組合のはなし」とか「賃金とは何か」などのやさしいパンフレットや「学習の友」などを月に一〇〇冊位売つて、読んでもらつたりして労働者としての自覚を高めさせていきました。さらに、もっと多くの人と結びつぐために、お菓子や軍手などを安く仕入れて社宅や寮に売

りながら話合つていくようなことも行いました。こうして職場のようすを聞き、要求について知り、相手の考え方を高める努力し、ピラだけでなく、全就労者の住所を調べて手紙を書き、就労者の要求や全金の闘いを知らせ、全金の闘いと就労者の闘いは、根本的に一つのものだということを書いてきました。

また、アンケートを作つて朝、門前でいっせいに配り、夜には、社宅、寮などを訪問して回収しアンケートに書かれてある要求について会社と団交をやり、それをピラにして流すという活動もやつてきました。社宅では、全金の奥さんが、就労者の奥さんに内職の世話をしやるとか、子供たちのために「どぶ川学級」を開くとかの事もやられました。

動き出したぞ、第二組合がノ

こうした活動の中で、六三年十一月十九日、就労組合（五〇四名）は、年末一時金闘争で初の二十四時間ストを決行しました。

日本ロールの一時金は、〇・四ヶ月分位で、十年以上勤続した四〇歳のベテランでも二万円に
ならないという低いものです。

全金が十一月三日に、二・五ヶ月分の要求を出し、ピラで連日、教宣する中で労組も十一日に二ヵ月分の要求を出しました。全金は、労組執行部に文書で共闘申入れをし、これをピラで全員

に知らせ労組執行部の態度に注目するようにし、労組執行部からの「考え方がちがうので共闘できない」という回答書もビラにして、執行部の本質を就労者が見ぬけるようにしました。こんな経過をへて、下部組合員は、執行部をつき上げ、二十四時間ストを決行しました。

しかし、労組執行部は、会社が出してきたほんのわづかの回答のうわづみを口実に、組合員を「説得」し、職場に大きな不満を残したまま妥結していました。

このストは、会社にとって、飼犬に手をかまれたショックだったことでしょう。翌六四年春闘で、会社は、早々と二月から安定賃金協定を労組幹部との間で結び、賃金と一時金では二年間ストができないようにしてしまいました。

御用幹部をのりこえて七十二時間スト決行

六四年の暮もおし迫った十二月十四、十五、十六日の三日間、江戸川工場労組は退職金改善要求でストを決行しました。この七十二時間ストは、ねばり強く二年間、就労者対策をつづけてきた全金組合員にとって大きな激励と確信を与えてくれました。

日本ロールの退職金は、十年勤続した人で二万五千円位、十七年勤続で四万五千円位という全く少ないものです。そのわづかな金額も社長の決済がないと支給されないと社宅、寮から出た時にわたすというひどい条件付きです。

六四年春闘で、安定賃金協定が結ばれた以後、会社は不況を理由に、社宅補助の打ち切りや残業規制などで労働者の生活をますます

圧迫したため、日本ロールに見切りをつけやめていく人がこの年だけで七〇名位にのぼりました。そのため、退職金増額が職場の切実な要求になってきました。当時の労組のビラにも、次のように書いてあります。

「……近ごろ各職場において退職金要求がとみに高まり要求大会を開催せよとの署名は二百名に達した。三十年勤めて三十万円、自己都合退職は、まか、ままたはこれ以下の場合があるとの当社退職金に手を染め得なかった執行部は、当然その責を問われるべきであると考えます。署名が二百名をこえて出されている事は、意気込みの現われでもあり、組合

私たちは、就労者の要求もとりあげ会社と交渉した。(中央今野労務部長)



の大きな進歩と言えよう。執行部としては、実力行使を裏づけとした交渉以外に満足のいく回答は得られないものと考えている……」(六四年十月二十八日付のビラ)

このビラは、二年前には「赤旗を追放しよう」一年前には「労資協調で企業繁栄への意欲に燃えております」というビラをまいていた労働組合のものです。職場労働者のつき上げや役員選挙の結果、職制が執行部から落され、代ってまじめな幹部が少数ではあるが生まれてきた事が、全金頭まけの戦闘的なビラを書かなければならなくなった要因でしょう。

十一月五日、労組は「一年勤続で賃金一カ月分」の退職金要求を決定しました。全金はこれを全面的に支持し、大島、小松川工場にもよびかけ、四労紙が退職金要求でせいぞろいしました。全金は、四者共闘をよびかけ、連日ビラ入れや家庭訪問をつづけていきましたが、江戸川労組だけが、三〇二対四三でスト権を確立し、十四日から二日間のストに入りました。

思えば二年前、吹きつまる寒風に身をふるわせながら暴力団、警察の兇暴な弾圧に必死に耐えたその場所で、いま裏切ったはずの就労組合員が赤旗とプラカードを押したてビケを張っているのです。ビケの正面には、十二月一日に完成したばかりの「ドレイ職場日本ロールを労働者の力で解放しよう」の鉄の看板がそびえ立ち、とりつけたスピーカーから労働歌が流れビケ隊を激励しています。全金組合員は、はちまきをしめ大看板の下に並んで、労組のデモを拍手で迎えます。道路をはさんで向い合うと労組員は、「もっとスピーカーの音を大きくしてくれ」とか歌を

教えてくれとか声をかけてきます。全金は歌集一〇〇部を配り、労働歌を合唱していました。そして「ビケは疲れるだろう」と言って行商のアメを配ってやる組合員もいます。分裂させられて二年間、職場の内と外で顔を合せていなかった者同士が、「なんだ、おめえまだ生きていたのか」などと冗談をまじえたあいさつをしている光景も見られます。「こんどこそ徹底的にガンバルゾ」と労組員が笑顔で話しかければ、「しっかりやれよ」と全金の仲間が激励する。そればかりが社宅へ行けば、労組の家族までが「うちの父ちゃんもなかなかやるでしよ」とうれしそうに話かけてきます。全金本部の役員とともに労組の組合事務所へ陣中見舞や檄をもって激励に行き、全金各支部からも労組に激励電報がとどけられました。こうして全金と就労組合員は、笑顔で交流し合いました。

この間、労組の三役は、会社と打合せをし、なんとしてもストは終らせるよう命令されたようです。スト二日目の夕方、労組はビケをばづし全員集会を開き、三役は、「ストは今日で終り、明日からは就労し、ようすを見よう」と提案しました。しかし組合員からは「今、就労したら会社にナメラレル。もっと強いかなきヤダメだ」という意見が次々に出ます。困った三役は、なんとかストを終らせようとして「これ以上ストを続けるなら、責任をもてないから三役をやめさせてもらいたいと脅しに出ました。三役がいなくなるとは困るからストをやめようという気持ちに全員がなるだろうと期待してそんな脅しをしたのでしよう。ところが、組合員から出てきた意見

は、三役に向って「あんたたちの三々四人はすぐやめられるが、俺たちの要求はどうしてくれるんだ」というつき上げでした。こうして三時間に及ぶ激論の末、三役は「辞職」を撤回し十六日もストに入る事が決定されました。この全員集会のようすからも、組合員は退職金要求に並み並みならぬ決意をもっている事が示されました。大会が終つて、暗くなった中を帰つてゆく労組員はみんな自信に満ちており、うれしそうです。全金組合員が、闘争本部の前で「ガンバロー」と声をかけると、にっこり笑つて「おーっ」と答えていきます。

三日目の十六日は、組合のストに頭にきた会社が、食堂の利用を禁止してきましたが、労組員はパンを買つて対抗しました。さらに会社は、全金組合員におそいかかった暴力団を使い、労組のピケに脅しをかけてきました。闘う労働者に対しては、全金だろうが、第二組合だろうが弾圧を加える会社の卑劣な本質がむき出しになりました。

こうして日本ロールの就労組合は、会社の圧迫や御用幹部の労資協理的な指導をものりこえてしかも闘争資金、生活資金が全くないという状況で、さらには十二月という最も金が必要な時に三日間の賃金を犠牲にして力強く七十二時間ストを闘いました。しかし結果は、退職金協定について、社長決済をなくすなどいくつかの成果を勝ちとつたのみで、執行部が妥協して終りました。そして、このストをまじめに闘つた組合役員二名が、不当に配置転換させられ、執行部は、それをなんの反対もしないで認めてしまいました。職場の組合員は、また三役に裏切られたという

感じを強くもつことになりました。

こんどこそノと十四日間のスト決行

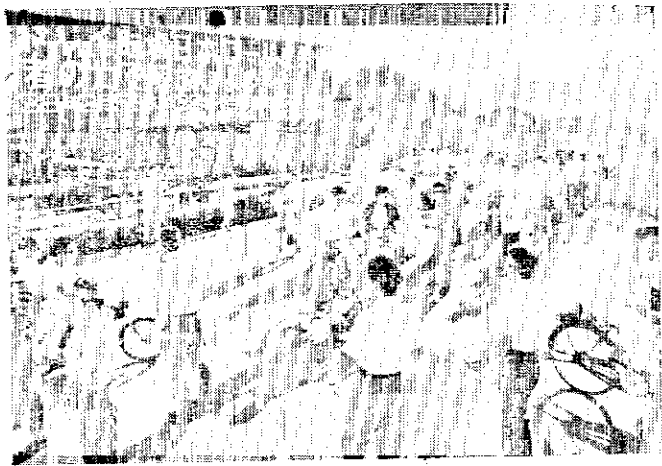
六四年末の七十二時間ストの後、「強力に闘うためには、上部団体に加盟しなければ……」という意見が職場で話合われていましたが、これを利用して、六六年二月に執行部は、十分な討議もせずに、大会を開き二八九対七〇で同盟への加盟を決定してしまいました。

六六年春闘は、平均六五〇〇円の賃上げ要求で六波にわたる時限ストを打つて闘いましたが、またも同盟幹部は、平均二三〇〇円で妥協し、しかも夏と年末一時金までも含む年間協定に調印してしまい、職場には、不満と執行部不信の空気を大きく残したまま終わりました。

そして、いよいよ、六七年春闘を迎えます。

「今まで何回かストをやり闘ってきたが、いつも山場へくると執行部が妥協して、低額回答で終っている。こんどこそ、徹底的に、会社がまいったというまで闘わなきゃだめだ」という事が話合われ、職場の空気になっていました。

江戸川、大島、小松川の三労組は統一して、二月二十八日に賃上げ七五〇〇円、時間短縮三〇分の要求を提出しました。四月一日の会社回答は「平均二三四〇円、時短は拒否、そして今年も一時金は昨年並みで年間協定を結ぶ」というものでした。



就労者(第二)とはいえ、彼等も我々の味方だ！(就労者へのピラまき)

これに怒りを爆発させた三労組(江戸川三三〇名、大島八六名、小松川十七名)は、四月十三日から、無期限ストに入りました。会社は、またしても、暴力団を増員し威圧を加え、さらに社外工や職制など二五〇名を就労させ生産を維持しようとし、職場の中心的な人たちをストから切り崩そうとするなど、不当な組合攻撃の態度をとってきました。しかし、組合員の決意は固く、挑発をさげながらストを続けました。組合員は一週間後には全金に習いアルバイト体制をとるなどし、ねばり強く闘う構えを示しました。「全金が三年も四年も争議をやっているんだから、俺たちだって二週間や三週間のストができぬはずがない」などと話し、どこかいアルバイトを紹介してくれないかと全金に頼んでくる

組合員もいました。

こうした勢いを見て「どうせ、五日か長くて一週間もすれば、ストが終るだろう」と甘く考えていた会社は、あわて始め、会社から固交を申し入れて「賃上げは二〇〇円プラスする。一時金は昨年の十五割アップする」など、わづかな譲歩をしてみました。三労組は、問題にならないと拒否し、ストが続けられていきました。スト十日目に、それまでふんぞりかえていた社長自ら、三労組の委員長を「説得」するなどし、いよいよ追いつめられた会社は、スト十二日目に四五〇〇円程度の回答を用意することを決定したようでした。(鉄鋼労連は四三〇〇円の回答) ちようと、その頃、アルバイトに出ないでいた各職場の年配者などが、工場長や職制の切りくづしに負け、「これ以上ストが続くなら組合を脱退する」といい出し、三〇名位の脱落者が出ました。しかし、三労組の闘争委員会「会社はまいてきている。もう一步の所だ」と判断し、十七対三でスト続行を確認しました。ところが、江戸川労組の一部の幹部は、「脱落者がこれ以上でたのでは大変だ」と宣伝し、闘争委員会の決定をふみにじり、妥結の方向を打ち出したため、会社は、四五〇〇円の回答をしないまま、ストの乱れを期待するという態度をとりました。同盟の幹部は、ストをいったん中止しても就労して態勢をたてなおしながら闘おうという説明をし、ストは十四日で終わりましたが、それから先は、会社のペースで押しまくられ、同盟幹部は簡単に妥協し、平均二五四〇円、時短は拒否という回答のまま終わりました。

このストライキは、三労組が統一して決行し、アルバイト体制をとるなどこれまでのストよりさらに力強いものとなって発展し、会社側に脅威を与え、もう一步の所まで追いつめましたが、同盟の労資協調という弱点につけこまれ、会社の計画通りの低額でおさえられてしまいました。全金は、このストの中で就労者への励ましやカンパ、アルバイトのあっせんなどを通じて闘いを援助し続けました。

日本ロールの就労者は、このように六三年に二十四時間スト、六四年に七十二時間スト、六六年に六波にわたる時限スト、六七年には十四日間のストと次第に大きな闘いにたち上ってきましたが、その要因について簡単にまとめておきましょう。

① 要求が、非常に切実だったこと。

低い労働条件におさえられてきたために、生活を守るためには、どうしても要求を勝ちとらねばならない状況にありました。要求は闘いの大きなエネルギーを生み出すことをはつきり示しました。

② 全金の流すピラなどで他の会社と比較して、日本ロールの労働条件の悪さに不満が高まり自分たちの要求は、全く正当なものであるという理解と確信をもってしたこと。

③ 全金の工作などにより、まじめに労働組合を強め、闘おうという人たちがふえ、一定の量として存在していたこと。



ついに起ち上った、就労も初めて葛西の町をデモ行進した。

④ 全金がロックアウトされながらも不屈に長期に闘っていることに励まされたこと。

などがその主な力であったと言えます。

全金さえ入ってくれば!

今、日本ロールには、約一二〇〇名の労働者がいますが、その半分は社外工や出かせぎの季節工です。これは、会社が本工は組合に入ってストをするから安心できないと考え、本工をへらし、社外工をふやす政策を三年前からとってきたためです。

そして、江戸川工場の同盟は、かつては六〇〇名の組合員を誇っていたのですが、今わずかに八〇名位と言われ、組合費を納める人はさらに少ないといわれるような状況にあり

ます。なぜ、このような状況になったのかといえますと、十四日間のストが終ってから、職場では「また、裏切られた。もう同盟なんか信用できん。」「組合費を払うのが馬鹿らしい」という声が広がり、同盟からぬける人がふえていきました。また、労働者は、会社にも組合にも失望し日本ロールをやめていったからです。こうして、同盟の信用はどんどん低下し、今では、大会をやっても集まらず、ピラも出さないうりさまです。そして職場では「全金が入ってこなければだめだ。全金さえ入ってくれば、俺は全金に入って徹底的に闘う」という事を半ば公然と話す労働者もでてきています。

全金は、今年になって三回、出勤時に門前で「不当解雇撤回闘争の資金カンパ」を許えましたが、会社の守衛が見ている前で、一月は一〇七九一円、三月は一〇四七四円、五月は、一四六五八円のカンパが寄せられました。

これは、就労者の中に、全金の職場復帰を望む人たちがふえていることを示しています。

この人たちを基礎にして、社外工、季節工も含めた二二〇名の労働者をどうやって団結させ、再び闘いにたち上らせていくかが、非常に困難であるけれども、ぜひともやらなければならぬ大きな課題です。

2 地域住民と共に——地域住民との結合を——

日本ロール支部はどのように闘ったか

私たち、日本ロールの争議団にとって、工場外にたたきだされてるだけに、町民との結合の問題は、この外、大切な仕事だったといえます。

日本ロール支部の構成員は、そのほとんどが、若年の地方出身者であることから、地域との関係は皆無の状態、会社、官憲の卑劣な攻撃と弾圧の下では、孤立感と「俺たちは、やっぱり間違えた事をしてるのではないか」という敗北感がただよいました。事実、闘争に突入した時は、地域住民からは「アカがやっているらしい」「全金のヤツらは、仕事をやりたくないから、ストをやっている」等々の声がささやかれていました。

争議団は、内(会社)と外(地域)から狭撃されていたと言えます。

組合の活動経験を、まして闘争経験をもたない組合員は、これだけでも身にこたえ、初期は「被害者意識」が濃厚でした。

署名もしてくれねえや

連日、一〇名もの重傷者をだす暴力団の攻撃を受けていた頃、暴力団追放署名が地域から圧倒的支持が得られるものと思ひ込み、勇んで闘争本部を飛びでて行った若い組合員は、ものの一時間とたたぬうちに、すっかりうちのめされ、しょげて帰って来ました。

「ちきしょう、俺たちがこんなにやられているのに、あのばばあ、親父が留守だからといって署名してくれねえ、」

「暴力団の追放をするなら、イシ等（お前たち）が組合をやめればいいなんていいやがる」

「すぐやってくれたのは、暴力事件を目の前でみたごく近所の人たちだけだ、こちら辺の奴等は遅れているよ。こんな当り前な署名するのにおっかなびっくりだもんな。これじゃあ、訴えたって無駄だよ」

組合員たちは、いくらかも記入されていない署名簿を自棄的に握っていた。しかし、こうしていくらかでも、町民とことばを交した者は、すくいがある。中には、アカ攻撃に感わされ、また見知らぬ他人との会話に、はずかしくて話もできず、数人のグループで相談し、家の表札を盗み見て、名前を写し、ピアノ式と称して自分のゆびを赤くそめてくる者さえいた。そして、これらの一面における事実は、組合員の間には、「俺たちは三十三名の首切りで闘っているんだ。町のことなど関係ねえじゃねえか」「こんなことしていたら、争議は負けちゃうぞ」という反対論がわき

起った。

しかし、こうした中であって、真剣な討議は続けられた。

「わずか、一回や二回の署名活動、ピラまきがいい結果がでなかったといって、方針を否定するわけにはいかねえ。現在の俺たちの闘争の状況をみてみる、第二や中立は暴力団、警察に守られて就労している。俺たちの闘いは正義の闘いだ、ということ、暴力団や警察と渡りあうだけで勝てると思うのか。そりじゃねえ、俺たちの闘いが正義の闘いだからこそ、俺たちの正義をみんなに理解してもらわうことが大切なんだ。それが方針でもいっている敵を政治的に包囲する力の第一歩だ。俺は、だから、このまま地域活動を続けるべきだと思う」

「こちら辺の土地の連中は遅れているよって声を聞いたけど、そんないい方は悪いと思う。それじゃあ、組合のために、闘争本部、食堂、集会場を無償でかしてくれ、その上に、会社の正門前に五〇〇坪ものハス田を埋めたてて、月々数十万円もの闘争資金をかせぎます。『葛西鉄工』を援助してくれたKさん、Hさん、Sさんの好意はどうなんだ。現在、俺たちがこうして会社側と真正面から対決できるようになったのも地域の人たちのおかげじゃないか」

「そうだ、それなのに俺たちは、手前たちの勝手のよい署名に、署名してくれなかったからといって地域を批判するのはおかしい。俺たちこそ、地域にお返しをすべきだと思う」

そして、どうにか「俺たち労働者が不平不満を持つように、地域の人たちも貧乏人なら必ず

生活の不安や悩みをもっているに違いない。俺たちはこの点を忘れていたんじゃないだろうか」というところまでたどりついた。とにかく、これが勝利につながり正しいと思ひこんだらなんでもやってみることだ。

地域の要求をほりおこそう

この討議のあと、それまで資本家の無慈悲な仕打ちや、警察、暴力団の暴力弾圧を連日伝えていたビラが、『日常生活の中で困っていることはありませんか。町会や区議会に対して要求した事はありませんか』という要求をひきだすアンケートに変っていった。しかし、当時においては「地域とは関係ねえ」「闘争とはなんのつながりもねえ、もっと会社に対して攻撃を強めて、対決すべきだ」という観点を捨てきれずにいる組合員はもとより、活動家といわれる部類の組合員にとっても、これぐらいのことで地域住民と結びつくことができるのかどうか、また、実際集めた要求がからとれるかどうか、まったく半信半疑のまま地域に散っていった。正しいと思ひ、みんなで決意したからやるだけやってみようという姿勢に近かった。

こうして、江戸川の葛西の町に『赤ハチマキ』姿の「不平不満よろず屋」が飛んで歩くようになった。

ところが、見ず知らずの家を訪問するのは大変勇気がいる。いきなり「こんにちは、全金ですけ

ど、何か不満はありませんか」と真正面から、ストレートに飛びこみ、相手の奥さんに「ハア？」と問い返され、次の句がでず赤くなつて飛びだしてくる組合員がでたり、「あんたたち、今度は何をやる気なの？」と聞かれ、まさか「勝つためには町民の要求を組織しなくちゃダメだそうですから」というわけにもいかず、二、三軒だけまわつて、あとは自分で適当に自分の感じた要求を書きこんで、まことしやかな、したり顔で総括会議にでもものさえいた。

しかし運動は、見違えるように生き生きとなり前進し始めた。機械だけを相手に一日を過ごしてきた油くさい労働者は、はじめこそ惑い、悩みもしたが、わずか一日で、百数十枚のアンケートと一〇〇〇をこえる要求が回収されるという予期に反した成果が発表されると、「ヘエ！」そんなもんかなといった感慨と共に、改めて地域を見直した。

日本ロールの仲間たちはまたしても地域から勇気づけられた。まさに、地域は変革の教師であった。これらの要求を手がかりに、組合は、最も地域に密着しており、地域で根深い要求となっている『街灯をふやせ』『保育所をつくれ』『道路を直せ』『夏でも水のである水道にせよ』『区民税を下げる』の五つにまとめて、再び地域に返した。

ここまでくれば、もうしめたものだ。なんとなく、地域と結びつけるような感じがしてくる。五つの要求署名は、地域から圧倒的な支持を受け、六三年七月から翌年の一月にかけて、不可能と思われた二〇〇〇名の署名をあつめた。しかし、署名をあつめ、地域からの支持が増してもそ

れをどのように実現したものか、組合員はまた行きつまった。自分達は、そのほとんどが葛西の町の、日本ロールの寮、社宅に居住しながら、葛西の住民の構成員でありながらも、江戸川区の行政とは隔離した存在として、地方自治体のラチ外にあるように、支配されていた事に原因していた。

五つの要求に対する二〇〇〇名の署名の重みは、それ自体、自治体への区民としての権利意識と会社というわくを超えた自治体闘争への決意を迫ってきた。

今でこそ、労働組合の活動を地域闘争まで高められ、また、その必要性が当り前のようになっている時とは違い、当時のなにもかもが新しい経験である日本ロールにとっては、予想しない闘いへの発展だったといえる。

二〇〇〇名の署名は、新しい敵への闘いから日本ロールの仲間たちを逃避させてくれなかった。区議会に五つの要求をもって請願した。そして、社会党、共産党の議員の力もかりて、大衆を動員して、ただがむしやらに圧力をかけた。

そして、秋には早くも成果が現われた。自民党の区議会議員を地域からだしても実現しなかった保育所の建設がはじまり、夜になったら女性の歩けなかった葛西の町に街灯がついた。

地域の人たちは、この成果をみて、真っ先に「全金の組合の等（ものたち）がやってくれた」と評価し、「なかなかいいことをやる。若いのに感心だよ。町のためにもなる連中だ」「自分の

ところだけで大変なのに、町のことまでやってくれる」と日本ロールの争議団に対する見方を変えはじめた。その中には「全金は「アカ」だ。働きたくないのでストをやっている」とかげ口をきき、暴力団追放署名には冷めた態度をとった人たちも、もちろんふくまれていた。

しかし、一方で、地域ボスを中心とする。今まで葛西の町を、物をより多く持っていることだけで、思い通りに支配していた層にとっては、自分たちの政治基盤を失う恐れから組合への中傷を含めた、地域住民に対する圧力を加え、攻撃も強められた。

組合はこの攻撃に対して、さらに、新たな要求を組織し、住民との統一を図る方向で対峙していった。

また、先の五つの要求をたたかいたる闘争の中で、日本ロールの企業拡張にもなう土地の買収の際に、経営者が悪どい買いたたきをやって、地域の農民から激しい憎しみをかっていることをつかんだ。それは、会社で拡張したい土地の真中を地域ボスから良い値をつけてゆづりうけて、そこに建物をたて、工場の汚水等をまわりに流し、ほとんど田の使用が不可能になった時、はじめて地主から安く買いたたくというあくどさであった。

組合は、農民から憎まれている会社の弱点を突いて、地域住民の間へどんどん入って味方を拡大した。そして、当時会社が、この方法でさらに、新しく土地拡張を企んだ時、組合はいち早くこれを暴露し、会社の野心を粉碎し、農民の利益を守った。

あわてたのは会社側だ。

「俺はクリスチャンだ、だから日本の祭りは関係ない」といって、今迄一度もだしたこともなかった寄附金にも、地域ボスの申し入れで一度に五〇万円もはずんだ。やったこともない映画と講演の夕べ（経済評論家斎藤栄三郎）を地域で開催するという方法で、地域住民と組合の結合に、分裂をうちこもうとした。

また、地域ボスも、組合の『〇〇道路を補装し、下水道をつける』という闘いの中で、その道路に直接利害をもつ住民一〇〇名の署名（一軒を除いて全て）を集め、その住民と共に、区に請願した際に、自民党区議であるボスは、「住民は、住宅や植木が道路にくいこんでいることから、全員が反対しているので、今はむずかしい」ところ然と妨害に出た。その後、意見調整という欺瞞を行ない成果を横取りする姿を示し、町内におっとり刀で出かけ、一年後に組合の要求が通ると自分の成果としてウソブクのだった。

しかし、ここでも住民は、この偽装を見抜き、組合員に対して「おかげで、いい道ができた」とあいさつを交した。

組合員は、もはや、地域不信のカラをぶち破った。更に、追い打ちをかけて、『日本ロールの工場公害』、『道路を全部補装せよ』等の闘いと共に『脱脂ミルク反対』、『固定資産税評価替え反対』などの全国的な誤頭も幅広く進めている。また、これらのたたかいの中で、地域住民の具体

的な生活上の要求を実現するための統一行動、統一闘争、さらにすすんで統一戦線の恒常的拡大の武器として、二〇〇〇部の『町民新聞』を発行し、地域住民である、農民、漁民および商店のオヤジさんたちの利益を守る立場にたった。

一般に、地域がそうであるように、葛西の町は特に、上からの力は官僚機構という組織された力に、地域ボスの日常的な人間関係やたての関係で組織された力が加わり、支配の網の目は、住民の生活や個人生活、さらには思想生活にまで根深くくい込んでいる。

それ故に、住民の側にも、それに対応した組織されたものが必要とならないかぎり、闘い切れない。職場においても『分裂させて支配する』ように、地域においても、労働者、農民、漁民、市民、さらには老若男女との分裂を固定化し、支配しようとしている点は同じである。

葛西における、日本ロールの地域対策の必要性ならびに重要性は、これらの分裂支配に対する住民の側（日本ロールに働く労働者を含めて）の統一した組織作りの初歩的な段階といえる。

汗を流せば、分ってくれらあ

しかし、争議団は、こうして要求を通じて組織的に政治的に、農民を中心とした町民と結合するだけでは不十分である事も知らなければならぬ。

たたかいが前進してくると組合員は地域に知り合いも増え、道で、バスの中であいさつをかかわ

す人が日毎に増した。ここまでくれば、首を切られている不安、自分たちだけが孤立しているのだという不安感やさびしさはなくなる。地域が味方なのである。自分たちがある程度、地域住民になっただけになる。

そして、より闘っている労働者が、地域住民となるために、地域変革の中心となり得る住民となるためには、もう一步、より幅広い地域住民となり得るためには、地域のエネルギーを体臭として身につけ、地域の土じょうに感性的に、感情的にも深く結びつくことである。

朝、雨が降っていけば、農民にとって、この雨がどんな雨であり、漁民にとっては何を意味するのかということさえ、彼等の立場に立って、朝のあいさつを、彼等と団体として消化されていることは大切である。

この意味において、労働者と農民、商人等あらゆる他階層を結ぶ最大のものは、「労働」することである。労働者はもとより、農民も漁民も、全ての働く者は、労働することの中に、人間としての、その階級としての誇りや喜び、苦しみや怒りを覚えるものだ。

だから、たまたかう労働者は、この最大の共通点を統一への闘いの武器に変えなければならぬ。その中にこそ、たとえ階層が違っているとしても、暗黙の中に大きな信頼関係を築き、ごく自然な人間関係を作る。

そのためには、できるだけ、共通の場で共通の労働を営み、その労働する姿をぶつけあうこと

だと話し合った。

地域と比較的つながりのある世帯持ちの組合員が、沼地を埋たてる土方の仕事を見つけてきた。

組合員は、灼熱の太陽の下で、みんな素裸になり、真剣になって土方をやった。その姿は農民をして、青木（日本ロールの意）のサラリーマンみたいじゃねえ、どうみても本当の土方だ、「どうして、仕事ざらいどころか、若い者が今時、土方なんていって嫌うのをあんなに喜んで働いてやがる、やっぱり仕事をしてえのだな、それにしても青木はとんでもねえ野郎だ」いわせた。

田植、稲刈りから引越しの手伝い、日曜大工にどぶ掃除まで、相手が困っているとみたら損得抜きで一生懸命手伝った。そして合間に、互いの生活を交流するのだ。

しかし、こうはいつてみても、すべてが順調に思惑通りいくとは限らない。オルグ活動や、アルバイトで疲れたからだは、思ってはみてもなかなか動かないし、職業安定所ではないから、手伝う仕事を見つけないのですら闘いである。しかし、誰かがこの壁をのりこえ、展望を切り開き、典型を作らなければならない。

日本ロールでも苦心した。

組合員「こんにちは、おじさん稲刈りを手伝わせてくれませんか」と思いきって言うが声が思わぬしなやかさをもたせてしまう。

農民「うん、なに？」

組合員「すみません、日本ロールの組合のものです、稲刈りをやらせて下さい。」

農民「いやいや、やってくれんでもいい、俺一人でたくさんだ。イシ（お前の意）ら、しろろとにやられたら余計迷惑だ」となかなかてこわい。

組合員「俺はおじさん、これでも百姓のせがれですよ」

農民「そうにも見えねえが、故郷はどこだ？」

組合員「信州、長野県ですよ。稲刈りぐらいなら少し位いできますよ」

農民「いや、会社のテラ（者）には無理だべ、百姓というものは、一つの物を作るのに、今の仕事が終わらなければあした、あさってと働いて、「〇〇日だつて働らいてやつと収穫だ、イシら勤め人にはできません。頭数がそろえればそれでいいというものでもねえからな、それにわし等のところは、人を頼む程田もねえし、そんな金もねえ」

組合員「いいえ、金はいりませんよ」

農民「金をいらねえと、いまだき金をとらねえで働くアホがいるか」

組合員「本当ですよ、俺たち働きてえただけだよおじさん。……ところで、このできじゃ反当り五俵つてとこでしよう。」

農民「まあ五、六俵とればいい方だべなあ、……イシはそんなに稲刈りがしてえか」

組合員「ええ、お願いしますよ」

農民「そんならやってみろ」といつてカマを渡した。組合員は、十年振りにカマを握ったが、そこは昔とつた杵づかで、すくなれ、器用にかつてみせると、「こりゃ本物だ、早速たのむよ」とやつとうちとけた。

こんなやりとりが、江戸川区葛西の町の、あつちこつちで行なわれ、やつとこのことで鎌を手に田んぼにおりることができた。あとは夢中だった。ギシギシいう腰をたたきながら、なかには、はじめて稲刈りをするものもいた。しかし、「俺たちは間違えたことをしていねえ」という感情が故郷の肉親を想い浮べ、死に物狂いで、やつと勝ちとつた農民との接点である稲刈りを手伝った。

合間には相手の生活の話聞き、世間話しに花をさかせ、どこそこのなにがしという娘は、なかなかの器量よしだとか、あそこの家のせがれは、先月どこそからいい嫁をとつたとかの会話がでて来た。そして、帰る時に、金をもっていけというのを辞退してくると、後につきたての白いモチとともに、又、忙しい時には是非来てくれろとのことづけも届いた。また、そんな時には隣の家でも、何人か頼みたいとの嬉しい報せも届いた。そしていく日も経たない時に、組合本部に「地域と結びつぐために稲刈り要員を募集します」というはり紙がはられ、日曜日には集団でかけることもしばしばである。



20年振りに組合の手によってパチ音はとどろいた。

味方が欲しくて、恐る恐るピラまきをしていた時とは雲泥の差である。

この自信は、葛西の町では二〇年間、久しく盆踊りのパチがきけなかったが、町民と共に、榮しく夏の夜を日本民族の文化伝統を掘り起し、更に、結びつこうとの積極姿勢を生みだし、組合員の民主的運営のもとに、数百人の町内の住民、子供たちと催した。それは地域対策の方針の討議の中で自分たち組織労働者が感性的にも知性的にも葛西の土壌となるうという決意の集大成の感さを得たのである。

この盆踊り大会は葛西の町では、人があつまればけんか沙汰がおき、負傷者がでるといふ因習をも打ちやぶり、地域から多額のカンパを得た事に、支持の声を認識した。そして

しかし、うまいことばかりは続かない。一日目はなんとか手伝って見たものの、二日目は慣れない仕事につかれて、サボッてしまつて評判を落したり、でかけてものの二〇分とたないうちに稲ならぬ、自分の指を刈つて病院にかけこみ、四針も縫うなど失敗談もあった。

それでも地域の人たちは、この日本ロールの組合員のまじめな、炎天下における土方、田植え稲刈の労働する姿をみて、さらに態度を変えてきた。

ある農民は「わしはイシラがストライキに入つてから、今日までイシラを『アカ』『アカ』と思つて、とんでもねえ怠け者だと思つていた。町のものたちも『他国者が入つてくると、これだからいけねえ、他国者にだけえ顔さすな』といつていたが、今じゃ、ヤツラなかなかやるし、まじめだといふものも増えているよ、とにかく今日からわしもイシラを信じる。運之助（日本ロール社長）はとんでもねえ野郎だ。俺たちもあいつには恨みがある。今度何かあつたらすぐ相談しよう」と素直に反省し、一肌ぬぐことを約束してくれた。

またもう一人の農民も「はじめ勤め人に稲刈りができるかと思つていたが、いやたいしたものだ、勤め人も大変だべ」と古い知り合いにでも接するように親しみをこめて話しかけてくれた。

全く感激である。苦労は無駄ではなかったのだ。ここにも労働者の果たさなくてはならない仕事を発見したようで展望がひらけてきた。

町のどこをあるいても、日本ロールの人氣は上々だ。やつと胸をはって、俺は全金だといえる。

翌年からは実に二〇年振りに組合の働きかけによって、バチ音も高らかな盆踊りは高西の町に復活した。

争議団が被害者意識を克服して、地域の要求を組織し、労働を通じてさらに住民との結びつきが強化されるまでになると逆に争議団を支える力が町のなかに生まれてきた。

勝ったら赤飯でお祝いだ

六四年二月八日、自由法曹団の弁護士さんたちが、組合幹部と共に一〇〇名を超える大部隊で日本ロールの現地を訪れた時、それは、いかに発揮された。

この交流会の中で、全金の組合に何かいうことはありませんかという質問に、地域のおばさんたちが真剣に「日本ロールの組合に何もいうことはない。ただ、一日も早く勝って欲しいと願っています。勝った時には、この辺のものたちで赤飯をたいてお祝いすることになっているので、もっと応援してやって下さい。早く若いものたちに赤飯を食べさせてやりたいから」と訴えてくれた。

そればかりか、なかには「あんたたち、何をまごまごしてんだい。もつと一生懸命応援しないと日本ロールは負けちゃうよ」と県命に食ってかかるおばさんまで現われた。居合わせた弁護士さんと組合幹部は思わず感動で声をつまらせずにはいられなかった。なかには、涙をながしながら

ら「これだけ地域と結びついている日本ロール闘争は絶対に勝てる。いろいろ日本ロールに対する批判もないわけではないが、連帯ストライキの体制を組んで勝たせてみせる」と固い決意を語る組合幹部もいた。

日本ロールの組合員は、この時の感激をどうい表わしてよいのかとまどいながら、「こんなにも俺たちのことを心配してくれているのかと思ったら涙がでてきた」ということは、全組合員の気持が集約されている。

また、闘争本部の前のおばさんも口癖のように、「青木運之助くらい悪い奴はいない。だからあんたたちが勝ったら『日の丸』を上げるんだ。それをみるまではとても死ねないよ」と話している。

おそらく、その時の日の丸はどんな赤旗よりも、さらに素晴らしいものに見えるにちがいないであろう。

組合結成間もなく『丸腰』で工場を追い出された日本ロールは、地域住民との共闘を進展させ町をかえながら、その力で会社正門前にしっかりとした陣地を築くことに成功したのである。

まさに、敵は地域から孤立し、逆に日本ロールは味方をふやして戦力を豊かにした。選挙のたびに共産党、社会党の票がのびるのも、社会的客観情勢ばかりではなく、こうした、組織された労働者が戦闘的に組織的に訓練された組織労働者が主体的情勢を切り開いていった成果であるこ

とはいうまでもない。

町民も闘いの先頭に――バス増車運動

地域が階級対立の場であることから、もっとも組織的訓練をうけており、現代の階級闘争の主力部隊でもある労働者の組織がその中核的役割を果たさなければならぬという意味において、日本ロールの地域対策の中で、最も教訓的問題提起をしたのは、葛西地区住民の足ともいべきバス増車運動である。

都バス増車運動は、まさに地域の移り行く情勢、葛西の変貌しつつある過程の中で闘われた葛西の町の生業は、明治以来、半農半漁であったが、昭和三十八年から、高度成長政策のもとに京葉工業地帯の再編成、首都圏整備のなかで開発の中心となり急激な変化がもたらされようとしていた。

特に打撃を受けたのは、浅草のりの養殖、アサリの生産場である東京湾の埋立計画により、漁業権を奪われた住民で、それまで四十五％を占めていた漁民が翌年にはわずか二％に激減したことからわかるように生業の転換が大きな問題となっていた。海をおわれた漁民たちは、丘に上ったカツパと同じように、その悩みは深刻な問題をかかえていた。

半農半漁である住民たちは、農業といっても、塩害に悩まされる田んぼ五、六反歩では、明日

からの生計の糧は、賃金労働者に転身することにみいだすより手だてもなく、若い者はサラリーマンに転業し、五〇代の人でさえ通勤労働者にならざるを得ない状態であった。

この工業地帯の再編成は更に、葛西の町の緑を容れなくなり、中小企業の工場、倉庫がそれにとって代り建ち並び、一度に大量の賃金労働者をつくりあげた。

当時の交通機関である都バスによる、錦糸町と浦安間と浦安と新小岩の二系統では急造された通勤人および再編による教育要求の増大に伴う通学生をとうていさばききれぬ限度を超えていた。

ラッシュ時における混雑状況は、どのバスも二〇〇％の乗客をつめこみ、さらに、満員通過で始発停留所からの乗車以外はほとんど不可能な状態で、葛西周辺の住民達は、タクシーを利用したり二キロメートルも歩いたり、始発バスに乗るといふ異状を呈していた。

組合はこの問題を重視し、地域対策の中心にすえ、運動にたち上った。

バスの混雑状況を綿密に調査するために、朝、始発時から、各バス停にはりつき、乗降者をしらべる一方、葛西地区に、ロールの手によって組織された地域サークルにも呼びかけ、さらに町会、母の会へと共闘を訴えた。

また、この増車運動にとっては、増車ということにより、都市交通労働者との共闘の問題も大きな位置をしめている。

この二つの共闘体制の成否が増進運動の成立として必要である。

前者においては、サークル関係からは圧倒的支持を得、自分たちのサークルでもかねがね考えていたぜひ一緒にやろうと、ともすると組織の中に埋没しようとしていたサークル活動を大きく飛躍的に発展させる上からも同意を得た。

しかし、問題は町会と母の会との共闘の問題である。今までの組合の活動は（地域における）直接町会組織とかかわりをもつものでなく、一人一人の住民を点としてとらえ結合してきた闘いであった。そのために、町会としても陰で、みてみぬふりをしつつも必死に支配体制を維持するという関係にあった。それを今度は真正面から町会の組織姿勢を問うことになる。

ロールとサークル団体は、町会に共闘して申し入れ書にして申し入れた。

・早速、町会から反応がでた。ある町会からは、「ロールは特殊な団体である。ロールがよびかけたのなら参加できない。」「ロールの手先になって町会が動けるか。」「ロールが参加しなければ協力する。」「町会は、この問題については、数年前から行っているが、駐車場地としているところが完全に整備されるまでは無理だ」という返答がきた。

「分裂させて支配」する方式がはつきりできている。ロールと地域の青年たちとを分裂させて、青年達を支配しようという思想がはっきりとうかがえる。

組合員と地域の青年たちは、この返答をもち帰り検討を加えた。そして、現状からみて、町会

との共闘は急がないで、あくまで共闘の姿勢を維持する。ロールが共闘のために困難を持っているが、ロールを加えてやってみよう、しかし、ロールは地域青年の自発的運動と指導性を信頼して彼等の側面から支えていく方針をきめ、運動を地道に組織することにした。

町会の反動的姿勢とは異なり、運動は、今までのどの運動よりも幅広く、また、あらゆる階層から支援されていた。

「署名でもなんでもやってくれ、喜んで協力する」「家の子はお茶の水の学校に通っているんだけどかわいそうでねえ、小学二年生の子供が六時十五分に出て、始発にのるように待っているんですよ、学校は七時二〇分ののれば間に合うんだけど、学校へはいつでも一番先に着いて、さびしいっていうんだけど……」

「町会にまかせていたって、どうせ、先の話だ。いろいろな人が運動して少しは町会をつきあげてやらなきゃだめだ」

「〇〇さんは交通関係にくわしいから、一度相談したらどうか」等々の圧倒的に運動を支持する人が増えた。地域の有力者の人のところで働いているお手伝いのおばあさん、今まで組合のどんな署名に対しても拒否し、ビラを受けとることさえ拒否していたが、バス停で、朝早くから乗降者調査をしていると、組合員に「朝早くから大変だなあ、腹がへったらパンを食え」といい「いつもの署名やビラはいけねえがこれはいいことだ」といってパンを置いていったり、町

内の人たちも、訴えれば、多額のカンパを置いていった。「今度町会が〇〇日にあるから、俺から町会にいつてやるう」と町会の一部有力者も動きだした。また、青年団役員のある一人は、「お前たち青年団にも申し入れてことわられたって、俺たちになんにも相談しねえで、フテエ野郎だ」と青年団の体質に露骨に怒りをしめした。

ここまでくると、バス増車運動は、日本ローレル争議団の手をはなれ、地域住民の手による闘いとして組織されていった。

この直後、サークルの仲間たちは、地域からはげまされ、地域に闘争性があること、地域は決して保守反動でなく保守反動の巧みな網の中に組みこまされているだけであることをしり、自らの力で自らの地域を解放し、自らの自治をめざしてより運動は積極的にとり組まれた。

そして、ついに、ある町会では、このバス増車運動を通じて、ボス支配の旧体制を打破し、地域の若者たちと共に起ち上り、各政党を呼びバス増車こん談会を成功させ、その力でバス増車をガッチリと闘いつた。

このバス増車運動は、先の種々の日本ローレル争議団が中心となって闘った闘いとは異なり、地域住民が日本ローレルの指導の中で自ら闘ったという性格をもっている。

組織された労働者の地域における指導性の問題を再考させると共に、地域そのものをどうとらえるべきかをこのバス増車運動の成果しめしているようである。

まとめにかえて

日本ローレル支部にとっては、地域は争議団を励まし、闘う共闘者であった。それは、「どぶ川学級」(労働旬報社刊)でも明らかである。

そのため、長期争議を闘い抜く上で、地域住民と結合することは、極めて重要である。

「東京争議団物語」(労働旬報社刊)で住民との結合上の注意について端的に要約してありますので、転載させていただきます。

第一は、感情的な団結を重視するという事です。争議団は労働という最大の共通点を武器に変えなければならぬ。日本ローレル支部は、争議突入当時、「アカ」「ナマケ者がストをやっている」という声を、灼熱の太陽の下で、土方、田植、稲刈り等をする中で、争議団を、真の労働者階級を理解してもらった。

第二は、やられているので助けてくださいという受身の姿勢や、自分の要求だけにしがみつくセクト主義を改め、地域住民の要求を掘りおこし、争議団が先頭にたつて闘うことである。

第三は、客観的条件として、物価問題等で労働者と他階層とで団結できる情勢にあるという点を認識し、労働者がこの客観的条件を主体的に闘う姿勢をもつことである。

第四は、地域には必ずボスが存在し、利害関係も直線的なものでなく複線的であるから、調査をしっかり行ない、労働者は組織的に行動し、町の未来像ともいうべき、闘いの長期計画、政策をたてる必要がある。そして自らが闘いに起ちあがれるよう援助することが大切である。

4 闘い続ける組合員

俺の田舎は組合だ——六ヶ月ぶりに帰ってきた組合員

半年近くも蒸発していたM君が、気まり悪そうに組合事務所に戻ってきた。

「ナンダノMじゃねえか」「そんな顔してねえで、入ってこいよ、ここは俺たちの家なんだぜ」。

M君は闘争突入後、三年程たって、支部の中でアルバイト体制が順調に動きだし自活体制が確立した頃、突然、組合から姿を消し、半年以上も消息がなかった。当時、組合員の中には、このM君と同じように、アルバイトにでてから、ある日突然、組合を離れて一ヶ月、二ヶ月、はては一年近くも、雲隠れしてしまう組合員がいた。M君はそんな中の一人だった。

組合員は、そんなM君のことを、「あのやろう、フテエヤロウダ。あいつはもう組合をやめた

んだよ。除名しちゃった方がいいよ、組合費だっていれていねえだろう、もうガキじゃねえんだから甘やかしていたらきりがねえ」と蒸発のあとMの行動に対して批判していた。

しかし、そう批難していた仲間たちも、今、こうして組合事務所の前で、蒸発したままの姿形で、名状しがたい顔で立っているとほっとして、「ここは、俺たちの家なんだぜ」となつかしうに声をかけるのだった。

M君は、六ヶ月振りに帰ってきた気持をこのようにいうのだった。

「六ヶ月以上も組合を離れていたけど、やっぱり組合のことは忘れられなかった。蒸発する時は、勿論組合をやめようとしたわけだけど、いざ離れてみるとさびしくて、さびしくて……」

金はそりゃあ、組合にいるよりはあるけど、結局みんなさびしくて、飲んだり、食ったりギャンブルでなくなり、ごらんの姿さ。他のところに行つてはじめて、俺には仲間が一人もいないことに気がついた。日本ロールの連中だけだ俺の仲間は。」といい、こんな俺をもう一度仲間に入れてくれ、というのだった。そして、組合は本当に俺たちの家だというのだった。

又、T君は、闘争生活の苦しさに勝つ事ができず、自ら会社に退職届を出し、故郷に帰り再就職したが、彼も数ヶ月後に手紙の中で「一度、退職届をだしてしまつたが、もう一度組合に入ってもらえないか、就職してはみたものの、友達ができない。ロールの友達がなつかしい」と書いている。

日本ロールの組合が、今日こうして六年以上の長期闘争を闘ってきた裏には、あらゆる人間磨像がうずまいているのである。上は、己れの寢食を忘れて活動し、自己の身体をぎりぎりのところまで追いつめて肉体的にも精神的にも限界に挑戦している若い活動家から、M君やT君のように、闘争の厳しさと、苦しさの中で時には蒸発までもしながらそれでもロール闘争を闘いつづけている。辛うじて組織に身をどめていた仲間たちまで百數十名がいるのである。

六年余を闘い抜いて、今なお、百数十名の仲間たちが日本ロール支部に結集している。そしてこの百数十名が長期闘争を支えているのはまぎれもない事実である。この百数十名の人間を、敵に立ち向かわせている力はなにかのか。

連帯の力強さに支えられて

不落の城を築きつつある日本ロールも、たたかいはじめから、組合員の一人ひとりが勝利への確信と「ど根性」「楽天性」を身につけていたわけではない。組合結成に至るまで、血判状の誓約書で互いの意志と信頼を誓いあつたごく一部の自覚された労働者は、その二年間に多少の労働組合の経験を経験してはしたが、十月十八日の組合結成と同時に公然化され、そこに結集した組合員約六〇〇名は、二月五日までの四ヶ月間という短期日の分裂との闘いしか経験してはいない。

こうした労働運動の経験の浅さは、争議突入後三ヶ月ほどは、門前における会社側、暴力団、国家権力の言語を絶した弾圧攻撃の最中であつては敵側の攻撃に対する憎しみと「クソツツ」という反発的感情やその爆発的なエネルギーで闘えても、再び膠着状態になると「こんなつらい闘いが何日つづくのだろう」「もう二、三ヶ月したら本当にこの争議は終るのだろうか」と考えこむ仲間も多かった。

「みんながやっているのに、自分からいいたすわけにはゆかないが、俺の首などどうでもいいから、だれかの責任で早く解決して安定した生活を送りたい」という考えの者も出てきた。そして、この争議突入から三ヶ月間の熾烈な暴力弾圧のあとのホットしたすきに、何人かの仲間が脱落していった。残った者は、展望を失って去って行く仲間の後姿に「卑怯者ノ弱腰者ノ根性のねえやろうだ」「あんな奴は、どこへ行つたつて通用しねえさ」と悪罵を浴せた。

しかし、この批難も自分の弱さと紙一重のところだった。仲間が去つた夜は一人で寝る事が不安であった。夜の暗さと、たんととした日中の闘いが、去つた者を羨望し「俺もそつと組合を抜けだそうか。執行部は口を開けば有利だ、有利だというのが本当にそうなのだろうか。」「俺だつて去つていった奴とはたいして変りない。どうせこんな会社にいたつてもうあんな仕事をするのはいやだ」「もし勝てば解決金が入るといふが、一体どの位いなんだろう。もし敗けたとしたら借金が残るだけだ、こんなに苦勞してまで借金が残るのなら今のうちに夜逃げした方が得じゃ

なねえか」という煩悶と焦燥がつづいた。この自分の弱さが、脱退者に批難を浴せさせたのだ。

しかし、日本ロールの仲間たちと、その家族が、身をよるわせる程の感激と共に、狂暴な敵に
対決してたち向う『ど根性』をすえる日が来た。それはスト突入九ヶ月目の「日本ロール闘争必
勝10・18団結大集会」の夜であった。

日本ロール闘争の必勝をねがう労働者は、つぎからつぎと詰めかけ、さしもの日比谷野外音楽
堂もあふれんばかりの満員となった。町内の人たち、第二組合の仲間たち、家族も全員参加し
た。秋風は冷たかったがだれもが秋であることも夜であることも忘れていた。舞台にうず高くつ
まれた力強い支援カンパの物資にうれしくとまどい、東京芸術座の大野外構成劇「団結は暴力に
勝つ」に改めて涙を流し、怒りを爆発させ、熱っぽく会場を包んだ。

ロールの組合員はみんな泣いた。みんなで肩をたたきあった。油と汗で太く節のでた手で、
誰はばかることなく泣いた。それは今までに味わったことのない感情だった。この日程、労働者
の階級的連帯の力強さと美しさを知らされたことはなかったのだ。暴力団におそわれた時の殺さ
れるのではないかという緊張感、機動隊にふみにじられたときのえたぎる怒り、家族に、妻に
子供に「本当に勝てるのか、父ちゃん」と迫られた時答えることのできなかつたせつなさ、それ
までの苦しさ、つらかった事が混然と頭の中を駆けめぐった。

構成劇の感動が会場をだきこんでまだはなされない中に、舞台に勢揃いした日本ロールの組合

員は、争議団を熱烈に励ます「日本ロールは負けない」の大合唱、歓声をコールする一万人の仲
間で一杯の客席が涙にかすんでみえなかった。

日比谷の夜の森をとどろかす『ガンバロー』の大合唱は、アンコールとなってどんなオペレッ
タにも敗けない、組合員は舞台の上になちつづけ、全金の仲間たちに、地域の、家族の全国の仲
間たちに勝利を誓った。組合員は壇上を去り難かった。できることなら、このまま、この熱い連
帯の中でいつまでも立ちつづけていたかった。

今だかつて、私たち労働者がこのように主役になったことがあったらどうか。日本ロールの組
合員たちは、初めて、自分たちが主人公になった事を知った。主人公でいる喜びと決意を知った。

あのどうしようもない程の孤立感、あとかたもなくすつとび、連帯のふところの中にいるこ
との安らぎと勝利への展望をかぎとっていた。

自分たちが人間として生活し、いかなる時も、いかなる場所においても主人公として扱われな
かった。そして、俺たちは常にそのように終るのだからという知らず知らず身についた敗北感と
不信感がぬぐいさられていくのを感じせずにはいられなかったのだ。

まさに、日本ロールの組合員は、この10・18大集会をはじめとして、二・五連帯スト等々、多
くの他の闘う労働者、全国の仲間たちの格闘高い熱烈でそして同志的愛情と品性の中から、一歩
一歩、労働者がなにするか、労働者の歴史的責務を学び、導びかれていった。最初は頼りな

った争議団も、一つ一つの成果をつみあげ、確信にかえて、ど根性をもった、筋金入りの争議団に成長していった。

みんなが主人公

私たちは一人ではなかった。私たちは、全国の労働者を意識しないわけにはいかなかった。私たちが包む、私たちの情勢は勝利への保障を与えている。

労働者階級の連帯の中で、日本ロール支部は、さらに勝利を現実のものとするために、仲間たちの期待と先輩たちの切り開いた今日までの労働運動の勝利への道すじを明らかにし、前進させるために、日本ロール支部の現状を正しく認識し、より強固な争議団に成長させなければならぬ。

予測されたとはいえず、二月四日夜の組合幹部三十三名の解雇通告は組合員には一大ショック事であった。この解雇は、組合員の間を寮から寮、社宅から社宅へと口伝えに伝わっていった。

「ついに解雇がでたぞ、」 「解雇者は、誰だ、」 「千葉委員長以下、何人かでたらしい。」 「委員長以下って、誰と誰だ、」 「俺たちの職場ぢや、〇〇と△△だ、他の職場のほうもはつきりしねえ。」

組合員はお互いに、自分の職場の仲間を知っていても、他の職場の仲間については知らなかった。顔は集会、大会等でみたことがあるが、名前や性格については知らなかった。そのために、おなじ寮等に住んでいても、また隣りの部屋に寝起きしていても、それは他人に近い存在でしかなかったという例がしばしばあった。労使関係が平常時であれば、このことも大して気にならないが、ひとたびそのバランスがくずれると、これは組織活動の中で弱点をあらわす。

工場の外に放り出され、つねに緊急事態が予測され、それに対しての敏しよさと対応性が必要とされ、更に、一日も早く全員の団結を勝ちとるためには、とびとびに散らばっている職場の組織より寮、社宅単位の居住地区ごとの組織がより効果的である。

争議突入当時、組織の体制を点検する間もないはげしい攻撃の中で、就労時における職場別の班編成のままたかわざるを得なかった組合側は、組織そのものに弱点を内含しながら闘いに立ち上ったのである。これが原因で、失なわなくても良い貴重な仲間を失ったこともあった。

「あいつは、俺の弟子だ。入社当時から俺のおテコ（助手）として、仕込んできたから、あいつの事は俺にまかせろ、裏切るような事をしたらただじゃおかねえ」とか「仕事もろくに出来ねえ奴がでっかいこというな」といったような古い封建時代の徒弟制度的な思想が突入時には、職場での力関係がそのまま外に持ちだされていた。

この人間関係が闘争の中でも微妙に反映し、職場別班会議や組合大会の中でも、いわゆる実力

者の発言権と決定権は大きな比重をしまい、反面、内気で人前で話すことのできない人にとっては、自主性をそがれ、不平不満は内にこもりがちとなり、労働組合も理解しないままに去るのである。この傾向は、闘いがはげしく展開されている間は、はっきりした形であらわれないが、たんとした長期闘争の形態をしめだすとようやく表面化し、展望の厳しさと平行して人間関係の上で大きな不満となり、ひいては組織不信の形であらわれてきた。

こうした弱点を克服するために、支部は早急に対策を必要とした。職場別班体制に変わるものとして、居住地区別毎の体制に再編成し、新しい人間関係の確立と強力な集団主義の指導に移行させた。必要にせまられた対策である。

この地区別会議は五人から十二、三人までの班として、大勢の人のまえでは話や意見の述べることのできない人にも、発言できるようにとの配慮が行なわれるように工夫した。

地区別会議では組合の闘いばかりではなく、家族の問題なども話されるようになり、その地区別会議が相互援助の場となり、団結の基礎として成長言成されていった。

この初期における徒弟制度的なたてのつながりの班体制から横のより民主化された地区別会議の班体制は日本ロールにあつては、一人ひとりが真の労働者として、主人公になり得る保証を与えたということでは大きな役割と任務を果たしたといえる。

争議が長期化の様相を呈しはじめると、個々の組合員の中に種々の矛盾があらわれてくる。そ

してこの矛盾解決のために、まだ十分に集団的訓練を受けていない組合員たちは、これを集団の力で克服しようという姿勢より、自分一人の力で解決しようとする風潮があつた。

日本ロールでは長期闘争にそなえ、一日も早く自活体制をうちたてるために、大部分の組合員をアルバイトに出した。しかし、完全プール制をとる中で、「ヨロク」というごまかしが横行しだしたのである。この「余録」というのは、アルバイト先で賃金契約を結ぶとき、千円で約束しておいて、組合には八〇〇円で働く事にしたと届けでて、二〇〇円を自分の不正収入にしてしまふということである。

アルバイトの行先も、若い未熟な組合員一人ひとりでは、思うような仕事もない事や闘争という特殊な状況も考えて、なるべく職場の実力者（仕事の面）を中心に職場単位で、でるといのが原則になっていた。ある実力者は、この余録を考え、自分の弟子たちにもこの恩恵を与えた。

「この二〇〇円は、決して余録ではない。これは、会社側で俺たちが争議中で生活も大変だろ」といって、タバコ錢にでもしてくれといってくれたものだ」と、千円の中から二〇〇円を抜きとり、若い組合員にもっともらしく手渡した。若い者たちは、そんなものかとそれを受けとった。また、この実力者は、若い自分の部下の組合員から若干のピンハネもしていた。

しかし、この余録は長くかくしおせるものではなかった。「あそこの仕事では二〇〇円余録しているそうだ」「いや四く五〇〇円だそりだよ、俺たちもうまい口ねえかな」と広がって行っ

た。

そんな中で、まじめな若い組合員の何人かは、この誘惑と闘っていた。「こんな不正が労働組合の中で許されているのか、労働組合はみんなの利益をみんなを守るどころなのに、余録ならまだしも、組合員の働き分を組合員がピンハネするなんて、俺は口ベタだし、仕事もできねえからあんまりでけえ事はいえねえけど」と真剣な顔で地区別会議で訴えた。地区別会議は急に白々しくなった。大変勇気の必要とする発言である。この当時、発言したX君は、みんながわかつてくれなかったら組合脱退も決意していたそうである。

みんなの苦しさは同じである。勝ちたい気持も一緒である。真実の発言はみんなを感動せずにはおかない。地区別の仲間たちは、この発言の一時、みんな自分と闘っていた。今、自分が何らかの発言をすることは、今後、自分が余録をできないことを意味していた。

「俺もそう思う、いや思っていた。だけど自分からいうことはできなかった。こんなことをいったら憎まれるのがおちだと考えていたからだ。それに俺も余録していたんだ。」という言葉にはじき飛ばされたように次々と同意見と自己批判がだされ、結果として「地区別の中で困っている人がみんなで助け合っというこう」という相互援助も組織され、新しい労働者階級として成長を生み出した。この成果は、各職場別の積立金制度にもあらわれ、一人の苦しみを全員のものとしていく、個々の利益を集団で守り勝ちとっていくというモラルと規律を作りだしていた。

地区別会議は、このように諸問題に対して、同志的にとりくんでいくための単位集団として機能を持ちはじめた。

こうした単位集団は、多くの活動家を次々につくりだしていった。そして、日本ロール闘争を闘った組合員をして、日本ロールには英雄はいない(誰か一人の意見でまとまらない)みんなどんぐりの背くらべであるといわれてもいる。このことは、みんなが主人公になっていることであり、一つの事を決めるにも、みんなで必ず一度討議されないと決してまとまらないという意味をしめしており、一人一人が常に日本ロール闘争を闘っているという自覚に他ならない。しかし一面では、こうした、徹底した組合民主主義の保障は時には情勢に即座に対応するという点においては、一歩遅れることはあったが、どんな小さな諸問題でも全員のものとし、仲間意識の高揚と二つ一つの活動、討論の中で仲間は成長し、たえず新しい仲間を自覚し、活動家は生産され、主人公が産声をあげた。

六年余の長期争闘を闘ってしまだ三ヶ月の仲間がゆるぎない団結を堅持している原因の一つには、内部の組織が民主的、かつ階級的闘争性をもって運営されていなければ保てるものではない。

そして、そのためには、一人ひとりの組合員が資本に対して無数の要求と不満を持っているように、内部に対しても存在することを理解すべきである。よく、私たちは、うちの組合員は戦斗

性がないとか、自覚的でないとか、動かないという『どうしようもない組合員』といった言葉を耳にし、口にするが、これは一部主人公の、英雄の大衆不信の発言である。

日本ロール支部にあつては、全員が同地点から同時にスタートしたこともあつて、そのほとんどが初期にあつては『どうしようもない組合員』であつたといえる。そのどうしようもない組合員一人ひとり、常に闘つていふことから、闘いの場を常に与えられ、それを集団的に評価される中で力強く成長していった。労働組合そのものが大衆の要求によつてその組織成立の意味がある事に注意し、個々の要求を明らかにし、組織要求まで高めてゆく手だてを重要視し、組織集団が個人の利害を徹底的に守る姿勢を堅持することによつて個々人の信頼を勝ちとり、組織への信頼を勝ちとつていくことを全体で明らかにするといふ集団主義思想を追求していくことが大切である。このことが、日本ロール百数十名の組合員の中で自民党支持者、創価学会員、民社、社会、共産党支持者、さらにはノンセクトの仲間たちを含めて団結しているという原因である。また、それだけに、日本ロールの組織は、統一行動、統一戦線のたちばにたつて問題処理に与つてきたともいえる。

一方では、このような組織を運営するむずかしさや、長期闘争の中での闘いのマンネリ化現象の中で、自分の生活が大事か、闘争が大事なのかといった問題もあり、「金だけ納めていればいいんだ」といふ幹部まかせの傾向とアルバイト先を移り歩き、定着して活動しようとするこ

うが少なくルンペン化した労働者の傾向も生まれている。又、役員のみならず手がないといった一面もある。

しかし、これらも、長期闘争を闘つてきた労働者のど根性をすえた創意と工夫でもって克服されるであろう。

家族も共に

組織内部の団結と不可分に密着しているのが家族との団結の問題である。日本ロールには、ある組合員が活動がになると「彼、また家でなにか仕出かしたな」「かあちゃんとの共闘に失敗したな」といわれる程、家族との団結は重要である。

この家族との共闘、団結の問題は、組合の内部の団結以上に、組合員一人ひとりにとっては、厳しい思想闘争であつた。

日本ロールの家族との団結を語る時、高橋宏さん夫妻の事件を抜きにすることはできない。高橋さんは、実直な組合員だったが奥さんに反対されて争議が始まる少し前に組合を脱退してしまつた。

闘争に突入してから、組合はもう一度高橋さんに再加入するように説得した。ところが彼は組合の説得工作以上に、奥さんから「この三人の子供をどうするのですか、組合に入ってストに参

加するのだけはやめて下さい。」といわれ、なかなか態度を決しかねていた。

しかし、仲間たちはドレイ工場解放のスローガンのもとに、連日、警察や暴力団の大弾圧に屈せずたたかっている。血まみれになりながら必死に守る仲間たちのピケットをかくくぐって就労する毎日は耐えがたかった。奥さんの反対にもかかわらず再度組合加入の方向へと変っていった。

このような主人の変化に気づいた奥さんは怒った。「こんなに頼んでも、組合に入るのですか私のいうことより組合の人のいうことの方が大切なのですか。それならかつてにして下さい。私は里にかえります。」最後は夫婦別れの話にまでなった。

彼は悩み抜いた。ストに参加すれば妻が一番心配しているように、その日から生活の不安が訪れるのは間違いない。布団に入ってからなかなか寝つかれない。「しかし、彼はけっして自分の妻を話のわからない、どうにもならない奴だとは思わなかった。」

一ヶ月後、彼は、ついに決心した。仲間たちとガッチリスクラムを組んだ。さあ大変だった。奥さんは本当に怒ってしまった。里帰りこそしなかったが、いっさいの家事をほおり出してサボタージュに入ってしまったのである。

彼も大変だった。昼間は仲間とストライキ。家に帰れば、今度は奥さんのストライキ、夫婦ともども要求貫徹のストライキ合戦になってしまった。

ところが、彼は奥さんのストライキには、文句一ついわなかった。毎朝五時に起きて御飯をた

き、子供を起して食事をさせ、学校に送り出し、家の中から庭の掃除をすませ、奥さんの茶ワンを食卓にそろえて、かけつけるようにピケに参加した。これを彼は肌寒い三月の初めから五月まで、実に三ヶ月間も続けたのである。

さしもの奥さんも、夫のあまりにも真剣な生活態度に心を動かされ自然に夫たちの闘いこそ、働く者のやむにやまれぬ闘いにはちがいないと思うようになった。そして、また、この闘いに参加している夫こそ、苦勞を共にし、信じあっている人にならなければならないとあらためて見なおした。夫婦の最も身近な力強い共闘者になったことはいうまでもないことである。

これは高橋さん夫妻に限られた事ではなく、世帯持ちにとっては一度はかくぐらなければならぬ壁であった。

家族ともども闘いに起ち上ること、それ自体は大変なことである。具体的に明日の生活がそれだけの家庭に迫られているのである。その意味において、家族全体がギリギリのところをたたさされている訳である。ですから時には、闘うことは正義である、正しい事はしなければならぬ。今、闘うことは将来の明るい豊かな生活につながるという言葉と論理だけでは、どうして理解されない場合が多い。家族は私たちの態度や行動を常に実践的に裏表から観察しており、マ化せないからである。

ある組合員は、親兄弟が鬭争に参加することを猛反対した。父親を含め、自分の一番理解者と思っていた姉までが「お前は正しいことだから、俺たちがやらなきゃというが、思いあがるのもいいかげんにしなさい。アカに煽動されているんだ。それでなきゃ私が貸したお金をまだ返さないお前に人様を助けるみたいなのができるものか」と私生活の乱脈さをついてきて、理解しようとしなかった。彼は、この時、ズバツノと胸をさされたのだ。彼は、毎月、九〇〇〇円の生活資金から借金を返済していった。そして返し終ったその時、姉さんは「お前も本物になった」と月々の援助を申しでたという。

また、KさんはKさん夫婦と食べざかりの四人の子供を抱えていた。鬭争に入る前は、四万円が一家六人を養っていた。勿論これは生活して行くにはギリギリの線だった。それが鬭争突入と同時に二五〇〇〇円の生活費になってしまった。Kさんの家の食事時間は連日、子供たちの口汚ないおかずのとりあい、Kさんは頭をいため、悩みつづけた。働らいている時なら、頭からどなりつけ、ピンタの一つもどぶとどろだが何もいえなかった。Kさんは無類のタバコ好きであった。

Kさんは、ある時から一本のタバコを三つに切り、パイプですうようようになった。それから何日かたつた時、子供たちのけんかはなくなったそうである。子供たちは、現在、大きくなってKさんというそうである「あの時はつらかった。せめてソーセージ一本を一人で食ってみたかった。

だけど親父が一本のタバコを三つ切りにしてすっているのをみたら、自分たちが恥かしかつたよ。いつもなら、すぐぶんなぐる親父が、あれ以来(鬭争突入)なぐらなくなったもの、親父もつらかったろうなあ」と。このKさんの子供たちは、今、立派に成長してそれぞれKさんに劣らない活動家になっているとので、Kさんは子供たちのことを語る時、「あいつら」といいながら、相好くずし、相変らず三つ切りタバコをすっている。

こうした、単なる血縁によって結ばれた家族関係から、六年余の鬭いは家族関係をもかえていった。

新しい愛と規律の中で、貧しくても子供たちもすくすくと育ち組合員を上げました。Yさんの子供は小学校に入学して、先生が日本の国旗を書いてごらんなさいという、他の子供が日の丸を描いているのに、無邪気に、紙一面を真赤なクレヨンで塗りつぶし、赤旗を描いた。また、ある子供は、どんな童謡よりも早く「ガンバロー」の歌をおぼえ、ところかまわず大声をはりあげて親をとまどわせた。

Yさんの子供にとって、赤旗はまさにどんな旗よりも素晴らしい国旗であり、「ガンバロー」はどんな歌よりも夢があるにちがいない。Yさんにとっても、これ程すばらしい強力な同志は他にありません。

組合の集会等には、ロール二世が集まってくる。組合員はこの二世にハチマキをせがまれ、ハ



組合員をする土方を流汗を

チマキをリリシクしめてやる。そして誰もがその姿を喜んでゐる。

家族との共闘、団結は、誰よりも緊密な共闘者、同志になり得るといふ特殊性はあるにせよ、他の職場の労働者、他階層の人たちと共闘し、団結するのとまったく同じ問題である。共闘と団結の原則を強調することがなにより重要である。

そして何より、家族も一人の一人前の人間であつて、決して特殊な人間でないという観点が重要である。要求をもち、自分の意志で働き、たたかう力をもっている人間なのである。そのために家族に理解と共闘を訴えるのなら、まず本人が誠実な態度、行動のささやかな動き、日常生活の中で自己変革の実践をたえず追求しなければならぬ。そして、更

に、これが集団（組織）の中ではつきり保障、指導されていることが大切である。

この中で、労働者階級にふさわしい家庭像を創造していくことは、極めて重要であるといえるだろう。日本ロールの組合にあつては、これを集団的にとらえるという点では、まだまだ、弱点となつており、集団の力としては十分に発揮されていない。

カスミを食つては鬨えない

「長期争議の生活は、ご存知のように給料が出ない生活であります。結婚を延ばし、子供を生むことにちゅうちょし、子供が学校へ行くたびに新しい心配とおそれをしなければならぬ生活であります。そのたびに、私たちは、仲間の中で団結をし、討議をし、自治体その他とも闘いながら、生活を支えて闘つてまいりました。率直にいつて、大変しんどい生活でありますけれども同時にまた、映画「ドレイ工場」でたとえば表現されていますように、しんどさに負けず明るく元気に闘つております」

これは全国一般、正路喜社の佐藤氏が第三十六回総評大会での長期争議団を代表してあいさつした一部分である。

長期争議を闘う中では、争議の先行き不安と焦燥に自分は勝てるだろうかという精神的闘いと共に、一体、俺たちの生活はどうなるんだといった直接的な不安が大きくのしかかってくる。そ

して多くの仲間たちはこの闘争に敗けてしまう例も少なくない。

この点で財政の問題は時には、理論や階級性そのものよりも重く、切実な問題をなげかける。

財政は団結のカナメであるといわれるユエンもここにある。

私たちは、いつも思想的に高い労働者だけで争議をたたかっている訳ではない。日本ロール支部にあっても全く同じ事である。ある者にとっては、労働組合運動に参画する目的の最も大きな一つに、「金をもっと欲しい」「もっと人間らしい生活をしたい」といった実利実益を重視し追求のために参加しているのである。どんなに理論に通じ、活動的なようであっても、いざというとき自身の生活費をまっ先にきりつめられる労働者ばかりではないのだ。

それだけに組合の財政体制には、二つの側面が要求される。一つは、組合員の最低でギリギリの生活保障であり、他の側面は、闘争を広げ有利にするための純粋な闘争資金である。

まだ十分に自覚されていない組合員の多い争議支部にとっては「カスミを食っても闘う」といった発想は厳しいものがあつた。

日本ロールの争議団は、結成から争議突入までの期間も短かく、その組織形態もまだ十分に整理されていないままに争議を余議なくされたため、闘争資金もなく、また職場の労働条件の劣悪さと共にまさに丸はだかの闘いであつた。

若い組合として敵の弾圧がおよそ常識をこえた狂暴さを超えていたこともあつて、それに対す

る反発と抵抗の姿勢は最大限に高められていたが、怒りだけではどうにもならないものがあつた。それは、第一回目の生活資金の支払い日が迫って来るにしたがつて、重く一人ひとりの身心を圧していった。

「俺たちの給料は大丈夫なんだろうな」

「確か、執行部では、労金から金を借りて、中で働いていた時の七割を保障するといったのを聞いている」

「それならいいけど、どたん場で無理だったなんてことばないだろうなあ」

「まあ、なんとかなるさ、全金だつてついでにっているんだし、本部の人がいつてたじゃねえか、君たちの闘いは正義の闘いである、だから本部としても徹底的に支援する。日本ロールの仲間たちは何も心配しないで、この闘いを勝利することにのみ、細心を払って欲しいと」

組合員は半信半疑であつたが、君たちの闘いは正義の闘いであり、君たちがここで一敗地にまみれたら、他の労働者たちに与える影響も大きい、いわば、君たちの闘いは、自分たちの闘いであると共に、全労働者のためのたたかいである、という仲間たちの激励の言葉に感動していた。「俺たちもたいしたものだ」と考えていた。

組合員は各班毎に班会議が召集された。組合員は、給料の支払いかなと浮き浮きしていた。執行委員が毅然とした口調で訴えと説明を始めた。

「組合は、みなさんも知っているように、丸腰の争議団です。今は正直いって、金も力もありません。しかし私たちが勝たなければなりません。だからといって、生活費をださないということではありません。生活費は全金の仲間たちの努力によって、労金から借りられるようになります。ですから賃金の七割は保障できます。しかし、ここに大きな問題があります。賃金の七割ということになると、組合員一人ひとりの生活費がちがうことになります。ある人は、子供さんもたくさんいて、それにおじいさん、おばあさんもいます。そして、中には独身者もいます。それでいて、日本ロールの賃金体系からみると、多くの家族を抱えた人より、独身者の人の方が賃金が高い場合があります。この点について考えて欲しいと思います。」執行委員の話は単刀直入であった。

「話はわかるけど、それで執行委員の見解はどうなんだ」と質問がでた。「執行委員会では勿論一定の見解をもっているが、その前にみなさんと十分に討議して欲しい」と答えが返った。

いろいろな意見もでた。そして、ついに「組合は給料の賃上げを会社と闘う時、生活にみあった賃金として闘っている。だけど会社は、利潤追求をすすめる上で、労働者にあらゆる差別と選別を行ない分裂をぶちこんでくる。今、俺たちが闘っている日本ロール闘争にしてもそうだ。俺たちは俺たちの労働組合にこの資本家の考えを許してはいけない。闘かっている俺たちは、みな平等に闘っている。だから、会社の賃金にしがみつくのはおかしい。まず組合の中で生活給にし

ていこう。俺たちは、今日から給料をもらうなんて卑屈な言葉を使わないで生活資金ということにしよう」とまとまった。

そして、世帯持ち、二万四〜二万五千円、独身者七千〜一万円の生活資金体制はとられた。

ここまでするのに紆余曲折があったのは事実である。「なんだかすつきりしねえなあ。俺はてつきり七割はもらえなかったのに。」「俺も七割は欲しいと思ったけど、俺より生活の大変な人が二万円でもいいですなんていわれると、俺はもっと欲しいともいえねえしな」「執行委員は全員七千円ときちやあ、どうしようもねえよ」という声もあった。しかし、この声も、一面で納得の意が含まれていた。生活資金は、全員の前で、自己申告の形がとられ、あまり少なく申告する人には、お前のところをもっと必要な管だ、俺たちの分をけずるからと同志的なフインキで決定されていき、一人ひとりの生活資金の額を全員が知っていたというより、一人ひとりの生活資金を全員が決めるという極めて民主的な方法がとられたのである。また、この事件は闘争財政のガラスばりをも意味していた。そのために、今、組合の財政は赤字なのか、どうかを全組合員がつねに知っていたのである。

三カ月程は、労金の融資により、闘争財政をまかかってきたが、それも限界にきた。支部の中に、「いつまでも仲間たちの支援にばかり頼っていてはいけない。長期闘争を闘い抜くためには自力で闘う力を身につけなかったら本物にならねえ。」それにうちの組合は人数も多いし、一ケ

月の闘争資金の借金も大変だ、現地での闘争要員を除いて、全員がアルバイトにでたらどうか」と長期化する闘争を真剣に考えている者が多かった。

この提案は、早速、全員に受け入れられた。これも初めは希望制にした。希望者は殺到した。みんな働きたかったのである。ビケの合間に俺のオンボロ旋盤はどうなっているかな、誰が使っているのだろうといった嘆息まじりのつぶやきもあった。労働者はどこでも労働者なのであり、労働することにはほこりをもっているものである。

アルバイト要員になった人たちは、更に、生き生きとし、毎朝組合に集合し、夜は必ず組合事務所によって一日の闘いの報告を受け、また、自分たちの仕事ぶりを交換しあった。水を得た魚である。

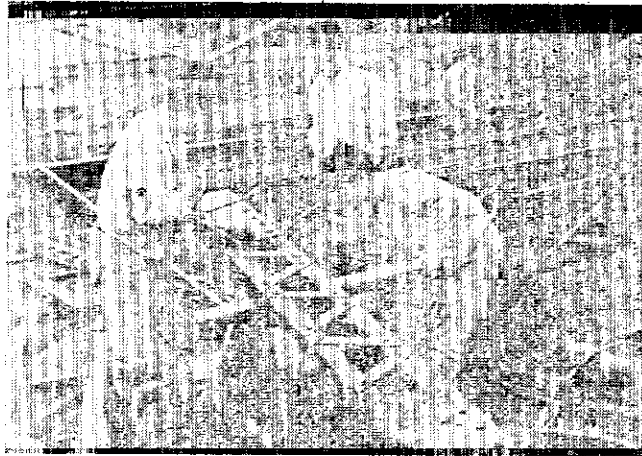
このアルバイト体制をしくに当っては、闘争が第一義である事を確認し、なるべく組合員がまとまっていけるところで、さらに、組合事務所の近所にする事と確認した。

アルバイトで得た賃金も完全プール制が採用された。プール制というのは、アルバイトで得た賃金の金を組合に全額いれ、その中から先にのべた生活資金を受けるという方法である。そのため、若い組合員は四万円かせいできても、自分の取り分は、七千円程度である。しかしこのプール制に直接不満をぶつつける者もいなかった。(後になって、余剰問題が提起される)

アルバイト要員となった若い組合員のT君は、久しぶりに仕事ができる喜びから必死になって

働いた。その働きぶりはアルバイト先の主人の目にとまり、主人からアルバイトでなく本工になる事を説得された。主人は、四万円もとって自分の取り分が七千円とは、いくら争議を勝つためとはいえ、そうそうできるものじゃない。組合をやめて俺のところに来てくれ、アルバイトの資金もだしてやるし、一生面倒みてやるといい、T君の昼食はいつでもパンであったので、昼食時には必ずT君のところに来て、俺がパンを食うから君は俺の弁当を食えといっただけだ。

T君は、このことについて、あの親父のいうことは、はじめのうちは聞きながしていたけど、毎日毎日、面倒をみられるとつい情がうつってしまつてことわり切れなくなると思ひ、そつと止めてしまつたと屈託なく笑つ



俺たちはアルバイト要員、ツライケド勝利の日までがんばるゾ

た。アバウトも、一生面倒をみてくれるのも魅力だけど、みんなが完全プール制を守っているのに、どうして仲間を裏切れるものかとシャープな澄んだ目で答えた。

アルバイト体制と共に、日本ロールの財政活動の中で重要な位置をしめ、内部の団結に大きなげましを与えた。

日本ロールの行商は、当初あさり売りから始まった。それは、機械しか扱ったことのない油でまみれた手で行なわれたのである。武士の商法でもある。それでも、アサリの行商は、日本ロールの位置関係もあって、浦安に居住している組合員もいて、なかなかどうにいったものであった。日本ロールのアサリヤさんでなく、しまいは、アサリの日本ロールさんと呼ばれ、親しまれた。

このアサリの行商も、夏場だけしかできず、次第に多角経営の方向をたどり、こんな物がいま職場で喜ばれていると聞くとなんでも、手を広げた。菓子を中心に、電気カミソリ、アンマ器、書籍、ランプ、クリスマスツリー、書籍だな等々である。

行商活動は、はじめこそ、闘争資金確保が唯一の目標であったが、それだけではなかった。他支部の仲間たちとの日常恒常的な接点であり、闘いを広げる重要な武器としての位置づけと共に日本ロール争議団がたえず闘いを点検されるという他の労働者たちとの連帯の場であった。

闘いを自覚する場でもある。

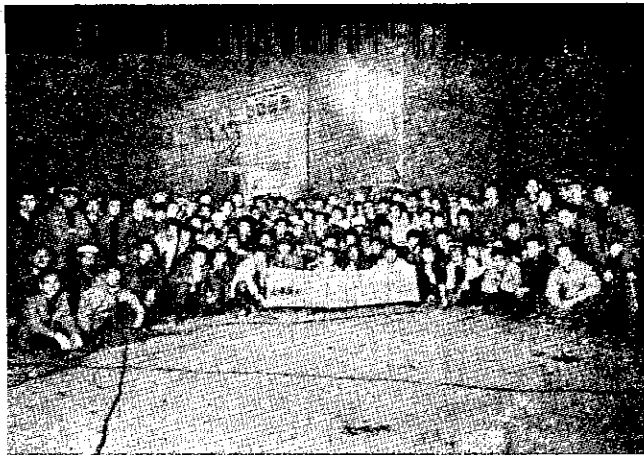
組合活動にあまり熱心でない組合員が行商から帰って、興奮のおもちで、「今日は売れたぞノうれしかったな、俺が行っても売れたものな、みんな、ダダダダツときて、あつという間になくなっちゃったよ。向うの組合の役員の人飯もくわねえで手伝ってくれた。ある人なんかよお、ロール久し振りだな、まだみんな頑張っているか、それにしても長いな。といって一人で五百円も菓子を買ってくれた。うれしかったね。あれみんな欲しいわけじゃねえんだろうになあ。俺たちが勝つて中に入ったら、他の争議団がきたら、組合員全員がガポツと買ってやろうぜ」といい、一人頭二〇〇円位かな、いや三〇〇円は買ってやろうと争議に入って初めて組合員らしいことばをのべた。それは連帯によって目覚めさせられた勝利への決意であった。

こうした経験は決して珍らしくない。争議団が腹の底からど根性をすえて、楽天性をもって、でんと闘える力は、ここにある。

再び、佐藤氏のことばを借りるならば、長期争議は大変しんどい生活であります。同時にまた映画「ドレイ工場」でたとえば表現されておりますように、しんどさに負けず、明るく元気に闘っています。

それも基本的には、総評四百三十万、全国の仲間たちの私たちに對する連帯と支援なのだ。そのことに對する私たちの限らない信頼なのだということになります。そういう立場で、私たちは皆さんの御支援をあたたく、うれしく感じています」ということである。

闘争財政を、生活費も含めて勝ちとっていくためには、組合員の自覚をたえず高めていくことが不可欠であると共に、現在、いかに争議が大衆的にたたかわれ得るか、また、大衆的な長期争議として粘り抜くことができるかという点で、こまかな配慮が同志的になされていなければならない。



撮影は完了した

Ⅲ 映画「ドライブ工場」のモデルとなつて

1 映画作るんだつて? ——半信半疑の組合員

私達は全国で百四十万人以上の観客を動員し、働くものに勇氣と確信を与え、見た人のほとんどに大きな感動と明日からの闘いのエネルギーを与えた、映画「ドレイ工場」のモデルと言ひ光榮にあずかりました。この映画は全金日本ロール支部の闘争を發展させる上で計り知れない大きな貢献をはたしました。そこで、ここに全金日本ロール支部が映画関係者とのようにして出会い、どのように映画作りに協力していったのかを報告します。

映画人との出会い

一九六六年四月十六日——この日が映画監督の山本薩夫、武田敦さん等映画関係者と全金日本ロール支部組合員が初めて会ったのでした。この日、映画関係者が「東京争議団物語」を映画化する為の現地調査ということで、組合員や家族と争議についていろいろ語り合ったのでした。

(これより前、一九六五年十二月頃より「東京争議団物語」の映画化の話が専門家や東京争議団共闘の会議の議題にのつていたこと、六六年の正月には五名位の組合員が山本監督の自宅に招待

をうけ、大変歓迎をされ、映画化について話し合ったこと等はありませんでしたが現実的ではありませんでした。)

この日から約二ヵ月に渡り、武田敦、小島義史さん等映画関係者が時には泊り込み、寝食共にしながら組合員や家族と、組合を結成するのに連判状をとって準備をしたこと、一年間に四十名位しか組織出来なくて、いつになったら組合結成が出来るのだろうと考えた事、組合が結成出来た時の喜び、分裂させられ仲間が段々減少していった時の不安、警察や暴力団に弾圧された時の怒り、初めて激励電報を受け取った時の喜び。組合の「く」の字も知らずに訴えに行つた事、等々を語り合つたのでした。

「こうした話し合いの中から谷山、佐賀、馬場等の人間像が形成されていったのだと思います。

映画と現実との比較

ここで二、三映画に出てくる場面と実際にあつた話を比較して書いて見ますと、

林がクレーンから落ちて死亡する場面——組合を結成する丁度一年前、未成年で運転免許も何も持たない少年がクレーンの運転をさせられ映画のように、クレーンが動かなくなったので修理をしていて、ギヤーにかまれてクレーンより落ちて死亡させられました。この時心配して集まった労働者に、工場長は仕事だ、仕事だと言って働かせたのでした。

会社門前での弾圧場面——解雇の出た当日、組合員はいつもより一時間も早く門前に結集し、全員で就労しようとしたのですが、この時すでに暴力団百名と機動隊二百五十名が来ており、組合員に言わせれば、あの映画の弾圧シーンの何十倍というひどい弾圧をうけたのでした。後に副社長が裁判の証言の中で「解雇は事前に警察と打ち合せをして行った」と言っている一事をとっても警察と会社の結びつきがわかると思う。

佐賀が塀を乗り越え出勤する場面——日本ロール闘争の当初は、毎日門前でピケをはり、就労していく人達と一緒に闘いに起ちあがるよう説得をしていました。モデルのSさんはそれをふりきって就労していく事が出来ないのである時は裏門にまわったり、時には塀を乗り越えて出勤しておりました。又ある時は組合員につきまわり持ってきた弁当をカンパして家に帰ってしまうこともありました。こうして苦勞し、会社に協力して来たのに、その月の給料をものすごく下げられてしまいました。そこで職場の仲間十名位と全金に加入したのでした。

「見とおしなんかねえ、勝った時が見とおしだ。」という場面——副委員長とOさんは静岡に訴えに行きました。Oさんは副委員長と一緒に訴えはすべて副委員長がやるものと思いきや、静岡行きをOKしてついて行ったのでした。ところが現地についたら廻る所が多いからと別々にされてしまい、Oさんはある所で全員の前で訴えなければならなくなりました。

壇上に登るまではいろいろ訴える事を考えていたのですが、壇上に登り皆から拍手をされたら

たんに、今まで考えていた事すべてを忘れてしまいました。それでも何とか日頃の支援のお礼までは言ったのですが、それ以上の言葉が出ず立往生してしまいました。その時会場から「勝つ見通しはどうなんだ」という言葉がかかり、咄嗟に「勝つ見とおしなんかねえ勝った時が見とおしだ。」と言ったのでした。

馬場が十五年前にもこれと同じことがあったという場面——日本ロール闘争ではこういう事はありませんでした。しかし、過去に二回組合をつぶされた経験があり、ドレイのような状態で働かされて来た組合員は今度こそ組合をつぶさせない、という決意をそれぞれ持っていました。又、馬場のように奥さんに全金に入ったことからストをされ、毎朝組合に来る前に、炊事、洗濯をして組合活動をし



「みんなわかるかよう、馬場さんの気持が……」
俳優に交って組合員も真剣な演技。

奥さんを理解させた人もいます。

しかし、この中で私達の組合が男ばかりで、しかもあまり女性との交際の機会がなかったため（実際は機会があってもモテナイ男ばかりなのかも知れない）闘いの中での恋愛問題も取り上げなかったらしいがモデルになる所がなく、何人もの若者をつかまえて、苦勞していたようでした。

それと第二組合との関係、委員長はどんなタイプが良いか、等もいろいろ苦心されている様子でした。

この頃は映画作りは現実的でなく、映画関係者と交流のあった人達でさえ、「おい、今度映画になるんだってよ、」「へえ、本当かい。そうなりやスゲエナ。」とか「シナリオを作って見るだけだって言うじゃねえか」と言われている程度でした。

しかし、この年の五月シナリオ製作のためのカンパを組合員に訴えたところすぐ目標の一万円が集まったところを見ると、映画作りへの期待はかなりあったのでした。

半信半疑で協力を決定

一九六六年十一月、いよいよ映画人の努力によってシナリオが作られ、その普及活動を行うことになり、全金本部より六千部の普及割当が来ました。そこでこのシナリオのモデルが我々だと

いうことで一人が五冊を売ることに、その他に、行商、交流会、各種集会場等あらゆる機会をとらえ、積極的に販売活動をしていく事にしました。

しかし、闘いとシナリオ販売との結合が良く討議されなかつた為、一人五冊の販売のノルマをはたした人はほとんどおりませんでした。

こうした中で、六七年四月には推進委員会よりいよいよ本格的に映画製作を開始するから専従オルグを一名出してほしい。（給料は今の所金がないから支給できない）という要請がありました。

この頃の組合内部では「はたして映画製作が可能なの事なのか?」「今まで自主製作をした「松川事件」「武器なき闘い」等が皆赤字を出しているというのに赤字になった場合どうするのだ」「映画一本を作るのに莫大な金がかかるというのにその金が集まる可能性があるのか?」等と映画撮影の出来る可能性の少ない事を考え、それよりは「今、第二組合が春闘でストに入っている事でもあるし、裁判も結審になったばかりだから、現地で闘いに力を入れて会社を押ししていくべき時だ」とする意見と、「この映画作りを成功させることが、松川事件が映画（松川事件）を作り上映する中で急速に闘いを全国に発展させることが出来、無罪判決を勝ち取るひとつの有力な武器となったと同じように、日本ロール闘争もこの映画作りを成功させていく事が、勝利へのひとつの有力な武器となりうるし、特に今、裁判が結審になった時でもあり、裁判所に不当判決を

出させない武器となりうるのだ。」「資金は専門家と働く者が協力すれば何とかなるのだ」「第二組合にだって映画を見せることで我々の闘いを理解させ、共闘を組んでいくのによい」と映画作りを主張する二つの意見があり、熱心な討議がなされました。

その結果、とにかくもう運動も進んで来ているのだし、モデルである我々が日和っていたのではしようがないし、実際に利点がたくさんある。だから映画作りを投入しよう。という結論で内田渉外部長を専従オルグに派遣することを決定しました。

しかしこの期間は、本当に映画が出来るのかどうか。半信半疑でした。

資金集めに組合まわり

一九六七年八月二十九日の支部定期大会で映画製作の意義として次の三点を再度確認し、映画作り成功のため全力を投入することにしました。

(1) 現在の日本の労働者の闘いを真正面から取上げた映画であり、労働者の闘いを励ます力となる。

(2) 日本の映画が退廃していく傾向の中で、真に健康で前進的な日本映画を復興していくひとつの大きな武器となる。

(3) 日本ロール闘争を広め勝利する力として大きな役割を果たす。

こうして、これから約二ヵ月半の間、ほとんど映画製作成功のための活動に力を投入したのでした。

まず、推進委員会一〇一〇〇〇円に加入していただく活動も地域、友好労組を中心に行い、これは全金本部の指令もあって目標口数三十口加入を達成いたしました。この活動は労組の幹部に映画製作の意義を良く訴えていくと比較的スムーズに加入してくれました。

九月より協力会員券（一枚二五〇円）の普及活動が始まると組合員には一人が最低十枚の券を販売する事を義務づけ、本部要員は、行商や交流会等ありとあらゆる機会をとらえ、券の販売をしました。最初はどこでも労働組合が製作する映画は「カタイ」し「おもしろくない」という声や、映画が実際に出来ていないということではなかなか思うように券がはけませんでした。

ところが映画の撮影が始まり、方々の組合からエキストラとして映画作りに参加するようになり、撮影の様子が職場の話題になるに従って券が順調に売れるようになりました。

一方組合員は自分達の目の前で撮影が行なわれ、映画人の苦労を目で見ているので自然に券売りに力が入り、自分達が早く券を売らないと撮影もストップしてしまうと、目の色を変えて販売活動を行いました。

その結果、今までにない成果として組合員のほとんどが目標数をやりとげ、中には一人で百枚もの券を売る者すら現われ組合員だけで一六六二枚の券を売ることが出来ました。又支部全体で

は七六九枚の券をうり、就労労働者にも二六〇枚売ることが出来ました。

この成果は何回となく闘いと映画作りの関連について討議して来た結果だと思えます。

2 俺達も俳優

日色ともえに演技指導

一九六七年九月十九日、ついに映画の撮影が開始されました。場面は「東京争議団共闘会議会場」で会議の様子が原宿の全造船会館で撮影されました。会場には実際に首切りや合理化、企業閉鎖で闘っている争議団と大村委員長役の木村幌、谷山役の前田吟、光子役の日色ともえさん等俳優が入りまじり、文字通り映画人と労働者が一体となって作る映画だという感じを与えています。この日より映画人と撮影終了の十月二十九日まで毎日行動を共にし、今まで旋盤やプレーナーの前になって油にまみれて仕事をしていた労働者が初めてカメラの前にはたらき、ライトをあびて演技らしきものをするようになったのです。

だからスタッフの人より「いつも映画に顔を出せる人を十人位きめておいてくれ」と言われ、組合員に参加希望を募ると、一方では映画に出れると言うホコリを感じながら、もう一方ではそ

の何倍もの不安があり、「俺はどうして演技など出来ない。」と言ってシリゴミをするのでした。

それに「映画に出て日当が保証されないし出演する場合は何日かアルバイトを休まなければならぬ。そうすると組合に闘争資金が入れられなくなり、闘争財政が困るのではないか。」との問題があったのですが、一、二度出演するうちに不安がホコリになり、「俺は今日、日色ともえさんと静岡弁を教えたのだぞ。」と仲間にも自慢する者があるかと思うと、「俺はよお、日色ともえと一緒に映画に出演したんだ。でよお、その記念に一緒に写真を撮ってもらったんだ。これを田舎のオフクロの所へ送って自慢してやるんだ。」と言って仲間をうらやましがらせた。中にはその写真とサインを大切に額に入れて室に飾っておく者もありました。

又ある者は「今日は足立区に撮影に行ってきた、出番を待っている間に宇野重吉さんと将棋をやったよ、俺が勝ったんだぞ。俺の将棋もたいしたものだ。」というものもあれば、「いや今日はまいったよ。板橋の東発で撮影だというからそこまでいったんだよ。したら便所に落書してあるシオンだって一日クサイ中で落書をさせられちゃったよ。しかし、スタッフの人は落書もうまいなあ、スタッフになるには落書までうまくなけりゃいけないのかなあ。」と変なところを感じる者もあれば「大村委員長が警察から釈放される場面をとり蒲田警察までいき、警察の態度を見て、闘争の当初の警察の態度を思い出し、頭にきて警官にくっついて来た」と報告する者もあり、又、撮影の様相を「では、テストいきますよ。」とか、「では本番いきますよ。本番

用意、ハイ、スタート、カット」というように、まるで自分が映画監督になったように組合員に話したり、「おい、昨夜は長島寮で徹夜で撮影をしていたぞ。映画作ってるで大変なんだなあ。」等と映画作りの模様が毎日組合事務所でも話題になり、映画に出演する組合員が段々増えるに従って「この映画は、本当に自分達の物だ。」という実感を強くし、どんなことをしてもこの映画は完成させなければと決意を強くし、日本ロールの闘争財政は撮影終了後、皆で頑張って穴うめをしようという事になりました。

しかし、それとて皆、組合のオルグ活動やアルバイト先との関係があつての映画出演であつたので、それぞれの活動との都合で常時十名を映画に出演させることが出来ず、映画製作に迷惑をかけてしまいました。

それと映画作りというのがどんなに時間がかかるのか良くわからなく、ましてや一つの場面（映写したら三分間の所）を撮影するのに一日かかるということを知らないため、午前中一つのカットを撮影、その時十五名位が出ていたのに、午後その続きを撮影する時には何人かが蒸発してしまい、その穴うめに苦勞をかけてしまった事もありました。

ある俳優さんが「俳優とは待つのが商売だ」と言っていたがつくづくその通りだと思いました。

やった、やった、やったえ!!

このように様々な問題やエピソードをかかえながら、私達は映画撮影に全力をあげ、協力していったのでした。そして十月二十九日、最後の撮影が日本ロールの現地で行なわれたのでした。この日の撮影は門前での弾圧シーンと寮に暴力団が殴り込みをかけるシーンでした。この場面の撮影には組合員のほとんどが参加し、それぞれ暴力団や機動隊、争議団になったのですが、この役の割振りが大変でした。ある者は機動隊の役はガラにあわないとか、俺は暴力団が良いとか言うものが出、大変なざわざわでしたが、撮影が始まると皆、当時弾圧された時の状況が思い出され、自然と演技に力が加わり、演技と実際とが一緒になってしまい、夜の撮影では、暴力団役をやった者が、本当の角材で副委員長役の渡辺さんの頭を殴ってしまい、大きなコブを作ってしまったというハプニングが出ました。

このようにして、午後十一時、ついに映画「ドレイ工場」は幾多の困難を乗り越え、全ての撮影が終了しました。誰からともなく「ごくらうさん」の声がかわされ、スタッフ・キャスト、労働者がおたがいに固い握手をかわしあい、撮影完成の喜びをわちあいました。

この苦勞がわかるかよ!!

このようにして、スタッフやキャストの人達と行動を共にし、ある時は天気が悪くて撮影が中止になって、明日は天気になるようにと祈ったり、機械工場が決定したと聞いて喜んだりし、苦

楽を共にして一ヵ月半を過しました。

この事は、私達にとって一生忘れることの出来ない楽しい思い出となりました。こうした中で組合員の感じた事を二、三ふれて見たいと思います。

(4) 映画人の映画を作るフアイトと情熱のものすごさに感心した。——これは、ある俳優さんが笑い話のようにして語っていた「ドレイ工場」を撮影している「我々がドレイ職場だ。」という言葉に代表されるように、朝は三時や四時に起床、朝の出勤風景撮影、夜は十一時、十二時まで撮影、その後、翌日の打合せや道具そろえとほとんど睡眠をとる時間もなく、安い出演料でやってくれていたのです。

(5) 映画を製作することが、どんなに大変であるかということも痛感した。——今まで、画面に出て来た所しか見ていなかったが、その裏でスタッフの人たちが道具を一つそろえるのにも、いかに苦勞しているかがわかった。例えば翌日撮影するのにトラックがないというので夜中の二時、三時までトラックのとめてある家を一軒一軒おこして、貸してくれるように交渉していた。

(6) スタッフ、キャストの団結の強さに感心した。——今まで違った職場で働いていた人達の寄合い世帯であったそうであるが、皆の呼吸がピッタリとあっていた。

3 感激・感激・また感激

俺の演技はどうかな？

今まで述べて来たようにして、私達は映画作りに参加して来ました。だから上映が開始された時に二つの心配をしました。

そのひとつは、はたして自分はどのように映画に写っているのだろうか？、ということでした。だから初めて映画を見た時の感想がある組合員は「俺は最初に映画を見た時には、ストーリーや俳優がどんなことをしゃべっているのかは全然わからなかった。ただ自分の出て来る所が気になって、今度の場面には俺が出て来るが、変なようにとれていないかなあ、どんな顔をしてとれているかなあ」と写る前から心配していて、写ると「あ、ここは皆が笑っているのに俺だけ笑っていないぞ。ここはちよつと表情がかたいなあ、早く次の場面に移ってくれねえかなあ。お//、ここはうまくとれているぞ」と自分の出ている場面の事ばかり心配していた。」と語っているように撮影に何度か参加した者は、ストーリーを追うどころではなかった。そして又、会場では自分が皆に見られているような気がして落ついて見ていられなかったという事でした。

それが二度三度と見るうちに、映画から改めて自分達の闘いをふりかえさせられ、例えば映画で稲垣が「第一組合はな、ここに戻って来るために闘っているだけ。」という場面から、日本ロール闘争の目的を再確認するというような具合でした。

成功・成功・大成功

もうひとつの心配は、映画は出来たが、「はたして動員がきくだろうか？」ということでした。実際、祝賀会の初めの一週間は、入りが悪く、会場警備やシナリオや原作の販売に会場に行った組合員は「今日の世田ヶ谷区民館は半分も人が入っていなかったけど、これでは赤字が出るのではないか。」と言って心配していたものでした。

それが日時がたつに従って、「いや、今日の会場は動員がものすごく、理由を言って帰ってもらうのに苦労したよ。」と嬉しいヒメイに変わり、「この映画は絶対に大成功するぞ。何って言ったらストーリーがいいよ」と成功への確信に変わったのでした。

シナリオや原作、パッチ等の販売も、上映前にはサツパリ売れないが、終了後は飛ぶように売れ、感動した人が売店の組合員に握手をもとめ「本当に良い映画が出来た。俺達の職場もああいう状態なので頑張らなけりゃ、これからも一緒に頑張ろう。」等と激励や連帯の言葉がかわされる光景がどの会場でも見られました。

又、ある会場では「組合から五枚券を売ってくれと言われて預かったんだが、今日で三度自分で見てしまった。何だか券を売るのがおしくて、誰にも売らないで自分で見てしまえうだ。」と言われ、この映画の素晴らしさを痛感する組合員もいましたし、ある所では組合結成前に日本ロールに勤めていた人が売店に来て「良く組合を作ってくれた。自分は何も出来なかったけど、これ少したが闘いに役だててくれ、頑張って会社に必ず勝ってくれ。」と言って千円のカンパをしてく人もいました。

再現される名セリフ

こうした中で組合員の間ではさかんに映画の中で使われた言葉が使われるようになりました。例えば、一寸どこどこへ行ってくれと言われ、行く気がないと、「やめどころ、気がすすまねえ。」と言って断る。すると「そんなやわなこっちゃ、争議に勝てねえぞ!!」と言ったり、ちよつと若い者が活動をサボると「いや、どうも若えもんは、労働者の自覚が足りねえ。」と言って、闘いに役だてるようになりました。

4 日本ロール闘争に与えた影響

働く者が中心になり、働く者の立場にたつて作られた映画「ドレイ工場」が百四〇万人以

上の観客を動員し、この映画の影響をうけて全国のいろいろな場所で闘いの火がともされており
ます。この偉大な映画のモデルに我々の闘いがなったという名誉にあずかりました。

この事は、日本ロール闘争を支えていく上で大変大きな力となり、次のような影響を与えてく
れました。

(4) 全国のいたる所（遠くは山口県の上映委員会や長野の上伊那学習協等）から交流会の申し
込みをうけたり、今まで一度も行った事のない所へも闘いを訴えに行けるようになり、闘い
を一段と広く広げることが出来ました。

しかも、交流会に参加した組合員はいろんな場所で闘っている労働者と接触することが出
来、激励をうけたり、自分自身の学習ともなり、闘いのエネルギーを吸収することが出来た。

(5) 第二組合員や就労労働者約三百名位に映画を見せる事が出来、全金の闘いを理解させ、協
力を作っていくのに一定の力となった。特に同盟日本ロール大島工場労組では、組合として
全金の要請をうけ入れて、工場内の食堂や組合掲示板にステッカーやポスター類をはり、積
極的に会員券を売ってくれ、組合員六十名の内四十名位の人を観賞につれて行ったり、小松
川工場労組では二十名位の組合員のほとんどが映画観賞に参加している。

その後、会社の門前での闘争資金カンパに協力する人が多くなった。

(6) 闘いを訴えに労組まわりをするのがやりやすくなり、組合大会で訴えをさせてもらう場合

組合員に紹介する時、どこでも映画「ドレイ工場」のモデルになった全金日本ロールとか、

「ドレイ工場」でおなじみの、というように紹介されるようになった。

今まで、オルグに行っていなかった組合でも熱心に闘いの模様を聞いてくれる所がふえて
います。

(7) 直接間接に組合員をばげまし、ともすれば長期闘争の為、タルンでいた支部内の団結強化
に役だった。

しかし、これらの闘争力は、まだ日本ロール闘争に対して十分に集中されているとはいえず、特
に映画で発展した力を、直接日本ロール経営者にぶつけていくことが出来なかった為、
闘いの進展はしていませんが、これからこの映画の力を総合的、目的意識的に活用させていた
だき、闘いを有利に展開させて行きたいと思っています。

5 合 評 会

出 席 者

千葉邦彦 (31才) 委員長	須賀定雄 (40才) 佐賀のモデル	山 谷 俊 孝 (40才) 関東鉄工、中央執行委員役	酒 井 孝 一 (28才) 映画出演	藤 村 喜 一 (26才) 組合専従券の販売と会場での売店係	手 塚 義 勝 (28才) 関東鉄工、中央執行委員役	渡 辺 志 津 夫 (30才) 上映委員会、東部専従オルグ	新 井 政 次 (28才) 関東鉄工、中央執行委員役	横 田 精 一 郎 (27才) 上映委員会専従	須 長 茂 夫 (27才) 教宣部長	司 会 佐 藤 翼 (26才) 日本ロールでの映画責任者
----------------	-------------------	----------------------------	--------------------	--------------------------------	----------------------------	-------------------------------	----------------------------	-------------------------	--------------------	------------------------------

あれはテメエがモデルだろう

司会 私達の闘いをモデルとして作られた映画「ドレイ工場」が今、全国で上映され大変な反響を呼んでおります。そこで今日は、モデルである我々が映画をどのようにとらえたかを話し合

って見たいと思います。

まず、それぞれ一番感動したところを出しあってみましょう。

須賀 じゃ俺から。涙が出て来たというところは、林が死んだらうーあの時光子が「あたしものむ」「本当に良い友達にかこまれて幸せだったに」と言っているところなんか画面を見ているのが、いやになっちゃったんだ。涙こぼすのもシヤクだと思ひ、チクショウとほかの事を考えようとするんだけれどだめなんだなあ……。俺も同じ人間としての感情があるんだと思っ

けど、佐賀はちょっとオーバーだと思ったな。映画ではあなるかもしれないが、実際にあんな場面で暴力団にいれずみなんか出してよう。金鶏殿章いくつだなんて言ったら大変な事になっちゃうよ。映画ではどういう計算をしたかわからないが、俺自身としては、もっと真実を基にした方がよかつたんじゃないかと思っっている。

扉をのり越えたのなんかはそのとおりだが。兄貴が映画を見て来て、あれはテメエだろう。あれじゃまずいぞなんて(笑)。

それから旗をもって、皆さんが来るか来ないか待っている姿は本当によかつたなあと思ひ。

山谷 山本、武田氏の今までの経験もあつてのことだろうが、山場が多かつたね。今までの映画だと一度見てしまうと次に見る時は、このあとはどうだ、こうだ、と筋ばかり追つてしまつて

とても何回もみる気にならないが、とにかくあきないんだ。この映画は、上映の時はよく売店に手伝いに行ったが、時々映画シーンを覗いてみたのだが、そのたびに引きつけられて出てこれない。みんなに「お前は売店をやりに来たのか。映画を見に来たのか。」と批判されるので、見ないようにしているのだが(笑)。

何回みてもあきない映画

藤村 俺は、最初に見た時は感じなかったんだよ。何となく俺達が製作に参加したという感じを強く持っていたから、どういうふうになるだろう。言わんとするところが出ていかどうかという不安感と、言わんとするところを観客が受けとめてくれるだろうか？、というような不安感が先に出て感動したという気がなかった。

その内、何度か見て、やっぱりあきないんだなあ。それは現実の闘いが描かれているところからくるのだと思うが。あの中で鈴木副委員長が旗を持って立っている所、あれは、ロールでは柴崎と貝柄が持っていたのだが、あの当時の不安であった気持を良くつかみ汲みとって表わしてくれているという事にすごく感心した。ただ、その気持から言うと、もっというろいな出来事があったし、それらの事を思い出すにつけ、食いたらない不満足感がどうしても残る。

千葉 ずい分見たが、やっぱりあきない。一番感じた所というと、馬場の一五年前という

訴える所、それから、第二組合の中であって活動する稲垣と土井、あの二人感動するというよりきびしいという気がした。

手塚 俺はねえ、主演男優賞だからね(笑)。いつも撮影する所をくつついて歩いたろう。だから、最初、文京公会堂で見た時は、「どういうふうに出てくるかなあ。」という気持が強く、見終って「やはり商売人だ、うまくつなげてある(笑)」「そんな感じだけだった。それと自分の出ている所が気になり、あれはちよつと固い感じだなあなんて(笑)、早く消えねえかなあ(笑)」「いっぽろが出るか(笑)、なんて、結局五回見たが、あとになって、そんなに気にしないで見れるようになった。一番感じた所は光子が東亜マグネットで訴えたらう。あの所が現実には弱い所じゃねえか、そんな所がグツと来た。

酒井 だいたい同じだなあ、三回見たがやはりあきなかった。最初はあいつがどこにいるかなんて気になったが、三回目位になると、グングンひきつけられて行くのが自分でもわかった。特に感じた所と言っても皆と同じだが……。ただ光子が訴える所、あそこは一番むずかしい所なんだが……。それだけで「決まった」と観客は見るだろうし、受けとられてしまいやしないかと感じた。現実には非常にむずかしい所だし、もう少し時間をかけて出してもらいたかった。映画で一番労働者の仲間に訴えたい所の一つであったのだから。



「ハイスタート」武田監督の指示にしたがう仲間たち

心配だった映画の出来上り

司会 じゃ、次に東部のオルグに

渡辺 俺は林がグリーンから落ちた所、あれは実際には第二工場での事件だったが、俺もあの時はすぐ飛んで見に行ったんだ、ムシロをかぶせてあって、その時の気持は、本当に「ひどいなあ」と思ったし、谷山があそこで怒ってやがて労働者として変っていくのだが、その気持がすごく自然だし一番引きつけられた。それと組合結成の場面だ。ロールではあの時は二時上がりで歌などを書いて会社へもって行ったのだが、柴崎達が旗を持ってたっているんだよ。不安でなあ、あの時の場面の気持がピッタリと出ているよ。俺はもう十何回も見したが、内容をじっくり見ていると、その時、その時やっぱり感動するんだ。

もっと見たいよ。

新井 今度は俺の番か。俺も手塚と同じでさ、あそこはどうなっているか。工場が出てくる場面にあうと、いくつもの工場を合わせて撮っていることを知っているの、あれで一つの工場に見えるのか、林の落ちる場面も人間が落ちるといっように見えるか、そんな心配ばかりしてしまっただよ。二回目からは、そんなことをぬきに見たが、一番泣けそうになったのが馬場の話の所だなあ。組合結成の時も良かったんだが、あの場面もいくつかの工場で撮ったんでどうもその辺の所が気になって駄目なんだ。

千葉 そういう裏があったのか、知らない人には全然わからないよ。

横田 俺はそうだねえ、映画撮影が始まって、生活がガタンとくずれちゃったね。

それから、くずれっぱなしだけどさ(笑)。俺もずっと一緒にこの映画製作活動に参加したら出来上がった時、一番最初に見たかったんだよ。10秒か20秒くらいのをまとめて行くんだろ。心配で心配でどうしようもなかったんだよ。最初に江戸川公会堂で見たんだけどさあ、その時は内容なんか全然気にしなかったよ。次にはこうなって、ああなってと、「本当にだいたいよぶかなあ」なんてのが先にたつてさ。

須賀 監督意識だね(笑)。

横田 次に見た時、今度は安心して見たんだよ。それがまたよかったんだなあ、画面に自分

がすいつけられるような感じだった。その後、何度か見て、いちばん俺がよかったなあと思ったのは、鈴木副委員長が旗を持っている所、それから第二組合の中で活動している土井と稲垣、中立の人が全金へ行くだろう。その時、鑄造へ知らせてくる人がいて、それを受けて、土井が「俺達も全金へ行こう」と言うのと、「全金は勝てるのか」って横で言うだろう。その時、土井が「勝てなくてさあ」という場面、あそこが何ともいえないんだよ。そのあと稲垣が土井をつれて行っていっしょにやろうと言った時、「お前、全金か」と言ってる稲垣を見る。その時の土井の表情が実に良かったんだなあ、俺は土井に演技賞をやるよ(笑)。

それから東亜マグネットの大会の様子、一度決定した事が、日色が立ち上がった話すんだが、きれいな女の子に弱いというのか簡単に通ってしまうとは(笑)。それに闘いから逃げ出してしまふまでの悩み、苦しみの内容をもう少し出すべきだったなあ。

うまく行き過ぎる筋書き

須賀 なんていうか、感情には表わしきれない感情というのがよ、良く出ていたなあ。俺ネエ鑄造の中でネ、やっぱり全金の仲間なんだって気づいてヨ、なんて言うか、とっても嬉しくなっちゃうって言うあの場面で、あの男はだいぶ勇気が出るわけだよ。偉そうな事いえば、あそこに運動のイイトコがあるわけだよな。日色ともえが「私ものむ」と言うのは、そういう意味が入っ

ているわけだよな!!

横田 それから、やっぱり谷山が通夜の晩に目覚めていくところ、あそこもいいじゃない。

須賀 でもあれは、あまり極端すぎるんじゃない。

横田 いやいや、極端すぎるっていったってさ、感情としてはあの場合あなるのが当たり前だと思っただよ、俺。

司会 何か、あの所ちよっと考えさせられたものね。「この中で誰が反対した」「オロオロする林をおおりとばしていたんじゃないか」なんて……。だいたい感銘をうけた場面は出してもらったんだけど、次に実際との関係での評価を出して見ようよ。

型通りの「塚本」の描き方

渡辺 俺、組合結成の事なんだけれどね、映画では挑発にのって組合を結成したようになってくるけれど、そういう設定でなく、そういう討論もあったがという事で、やっぱり敵の攻撃を自分達の要求ではね返し、結成にもって行く方向がよかったんじゃないかと思ってる。

酒井 渡辺さんも言っていたけれどさ、委員長が「闘いは起こさなくはいけないが、公然化はまだ早い」って言うでしょう。あれで一般の人わかるのかなあ。

渡辺 だから、あの場面では挑発という形できまらなくも、違った形で結成が決まることはい

いと思うんだ。そうすればもっと結成の場面が盛り上がるような気がする。

酒井 最終的には別の所で決まったのだろうが、映画ではあれで決まったように見える。

藤村 結局、裏切っていた塚本、あれが何となくウズツベラの甘ちゃんに描かれた感じだよなあ。塚本にしょっぱなから三百万という金が出てくるでしょう。そのへんから一寸オーバーだという感じ。その後、塚本が挑発して結成にもっていく設定だけど、その挑発があまりにスナリっているように受取れるんだ。裏があるなら、裏のある発言の仕方が必ず何かあると思うんだよ。それが出ていないから金はもらったが、真剣に組合の事を考えているように見える。

千葉 でも、ああいう事だってありうるんだよ。正にあれが挑発者の姿かもしれないよ。

酒井 あの前に何かの表現があればもっといいのだがなあ、そうすれば錯覚ないよ。

やはり重要な「情勢分析」

千葉 問題は、あの時重要なのは情勢分析だと思うんだよ。あの場合塚本がやったのは感情だけなんだ。本当は情勢はどうなのか、力関係はどうなっているのか、「もっと討議しなくていいんですか」ってのはその事だと思うんだよ。

渡辺 現実にあの情勢のむずかしさ、力関係の弱さがあれば出ればあの時点では決まらないじゃないかなあ。

山谷 だけど、やっぱり塚本の発言によって組合員大衆が引きずり込まれることは、塚本の工作が成功したんだよ。書記長は「もっと討議を深めないでいいんですか」と言ったんだから。けれどあの時「林が殺されたんだ」「大衆は公然化を待っている」なんてブタれるとその気になっちゃりよ。

千葉 あれはやっぱり完全に間違いないんだよ、あの時決めるのは。しかし、皆で決めたら、間違っているもやらざるを得ない場合もあるんじゃないかなあ。

渡辺 それから、委員長があんまりどっしりし過ぎてなあ。団交をしている時、第二組合の結成を知らされて、すぐ「塚本のやつ」って言うが、あの辺もう少し動揺すべきだよ。

千葉 あの委員長は、ペテランということだからね。前から信用があって、普段からどんな時にも落ち着いているという人物設定があったから。

佐賀・谷山は働く者の期待される人間像

司会 その場面はその位でいいかな。俺なんかさっき須賀さんが言った、佐賀が暴力団にたてつくところ、あの辺ちょっとオーバーだと思った。それともう一つは、給料袋のところ、課長の机の上でネメマウスところ、労働者だって、ちょっとあんな事は出来ないと思うが。

須賀 職人としちゃあ、ああいう職人氣質の人は方々にいるよ。

渡辺 ロールだって結成する前、非公然の組合員であった製鋼工場の組合員数人が、仕事のことで頭に来て、工場長を事務所中つきとばしたり、椅子をふり上げたりしたんだから、そういう労働者はいるんだよ。

須賀 たしかにあるよ。あの時会社へ行くと、旋工の連中が真っ黒いジャンパーなんか着てピケを張っていてさ、顔を見ると協力してくれよっていうし、家へ帰れば「又、帰って来たの」なんてお母母はいうし（笑）、出ていけば皆に会うし、今日はどっちを回ろうかなあ（笑）。ずつと遠回りをすれば、今度は機械工場の若い連中がいるし、あきらめて帰っちゃう（笑）。そういう苦労をして会社へ行つて、給料日に遅刻で引いてある。そりゃ頭にくるさ、その態度は、ああいう形で出るのはむしろ自然だよ。実際では、机の上へあぐらはかかなかつたけどさ（笑）。あの頃の事を考えると映画を見ていて、やっぱりそうだったなあと思うからさ、もう見る気がしなくなっちゃって、目をつむっているけど、言葉が入って来ちゃってさ（爆笑）。

組合員の中にはね、コツコツまじめにやる人もいれば、バカな事をするものもあるさ。

須賀 俺は佐賀はすごく自然にみえたんだよ。それに佐賀や谷山は、今、文部省が「期待される人間像」というので、ピクターのマークの犬のように主人の言うことを「ハイ」「ハイ」と言つて忠実に聞く人間を作ろうとしているだろう。それに対して、物事を自分で考え、自分が正しいと思つたら、ガムシヤラに突き進む、そういう点では、働く者の期待される人間像として描か

れていると思うんだ。

「ドレイ工場」はどこにも

司会 その場面はそれでいいね、他の所ではどうか。

横田 あとね、組合の結成の折、あまり皆、愉快そうなんだよな。俺、結成の時には、ガタガタふるえていたんだから、皆の顔だってさ、あまりニコニコしているように見えなかったよな。目は血走っちゃってさ、ものすごかったよ。

山谷 俺さ、皆んなあまり出してないんだけど、まず、映画館が暗くなって「ドレイ工場」のタイトルが出て出演者が、有名人、無名人関係なく並んで出て来る。バックミュージックの「わが母のうた」やっぱ俺達の映画だなあ、と最初からグツと引きつけられたよ。

本当に二五〇円ずつ持ちよつて、労働者が作った映画だと、冒頭から強い印象をうけた。須賀 それから、第一組合の人が言うには、給料袋をもらったら、その明細書を大写しに出して、基本給がいくら、残業何十時間でいくら、差し引かれるのがいくらいくら、手取りがいくらというよりなところまで出して、タバコ屋の借金、飲屋の借金がいくら、二、三日したら給料がパーになっちゃって、あとは徹夜、残業でやっているという姿をもっと出してほしかったと言っていたよ。

山谷 それと、争議に入ってから生活の苦しさを描ききっていないって言うんだよ。

須賀 「ドレイ工場」という中身が半分位しか出ていないって。あれどころじゃない。もう明
日中に仕事を終わらせろと言われて、徹夜でやらされて、くたくたになって帰っていくというよ
うな場面が出ていないっていうんだよ。

須長 俺の友達がああ映画を見てさ、何で「ドレイ工場」っていうんだい。ありゃ「ドレイ」
じゃなくて「普通」じゃないかというんだよ。まあ、生活の面があまり出ていない欠点はあつた
が。あれが二〇世紀のドレイだと言ってやったんだよ。

一同 さすが、大学出は口がうまいよ(笑)。

司会 まあ、あの映画の状況というのは、だいたいどこの職場でもやられているよね。それを
「ドレイ」だと自覚していないだけなんだよ。

須賀 だから、映画を見て、ああよかったなあと言うすぐあとで、うちの会社と同じだとい
う人がだいたいいるもんなあ。

山谷 そこに「ドレイ工場」という題名をつけた意味があると思うんだよ、自分達がそんなふ
ろに「合理化」でやられていても自覚していないと思うんだよ。日本中が「ドレイ」のような状
態で働かされているというので映画「ドレイ工場」という題名になったのだから。

司会 まだ、いろいろあると思うんだけど、この辺で終りたいと思います。今度は職場で生

き生きとして活動している所が描けるよう、日本ロール闘争を勝利させるため頑張りましたよ。
どうもくろくろくさんでした。

Ⅳ 闘いの中で



六年半と、一言でいうのはいとも簡単である。

しかしその六年半の間には、積極的に闘争を推し進める、活動家として育ってきた者がいるかと思えば、一方では闘いを去って行った者も少なくない。

生れたばかりの赤子ですら小学生となり、中学生であった子供達も、どぶ川学級をへて高校を卒業し、社会に出てすでに職場で闘いを組織している者すらいる。闘いの中で結婚し父親となった者もいる。この項においては、長い闘いの中でそれぞれが労働者として、組合員として、あるいは、一人の人間としてなやみ、苦しみ、笑いを共にわかち合い、今日まで団結して闘いぬいてきた姿を組合員の手記を中心にまとめて見ました。

1 エピソード

第一話 質問

十月十八日の組合結成一周年記念集会在大成功に終り、労働者の連帯に感激した組合員のUさ

んは、「俺も一生原命闘おう」と決意して、スト突入一周年の二月五日には連帯ストライキをどうしても成功させようと、毎日毎日交流会に参加したが、時には一度も発言できず帰ってきた事もあった。そのUさんも

「二月五日は、全員が必ず訴えに行ってください。」という闘争委員の発言を聞いて、今度はどうしても自分で訴えなければと思い、闘争委員にたのんで訴えの案文を作ってもらい寮に帰って暗記を始めたが自分一人では進まないで友人に応援をたのみ一晩中かかって暗記したという。応援を引受けたSさんは一字ちがっても、そこは「て」じゃない「め」で切るんだよとか、皆さん「が」じゃなくて、皆さん「の」だよ「皆さんの支援により」と続かなくちゃだめだ。といった具合に一字まちがってもゆるしてくれずUさんはいわれる通り頑張ったという。

2・5当日Uさんは××製作支部でみごとな訴えをやり一安心と胸をなげおろしたが、質問が出されその場で立往生、というのは質問に対する答えは闘争委員の案文の中に一言も無く暗記のしようがなかったというのである。これは一例であるが、……

第二話 結婚をのぼして

今だから、と前置きして組合員のOさんが話してくれたのは結婚当時の事でした。

昭和三十八年四月下旬に結婚したので闘争が始まって二ヶ月半位たった。当時社宅に入っ

ていたし、三月初めには結婚することで本人も両親も確認していた。

結婚を間近にひかえ、全金をぬけ会社の娯乗を越えたり、遠廻りをして就労し、一生懸命働いた。ところが同じ就労している仲間から「第二組合のやつが〇は全金の鉢巻をまいた奴だ。今はおとなしいがあまり信用出来ない」といつているぞ」と聞かされ、全金の方が正しい事をやっているんだから自分もストに参加しようと決意しビケに参加し全金の仲間とスクラムを組んでこれが本当の俺の姿だ正直な姿だ、と思いながらどうも気になるのは結婚をどうするかの問題である。

仲間達とスクラムを組んでいても落着けない。

なるようになるさと、半分捨鉢的な気持と、やるだけはやれ、打手を探すべきだという気持が何日か続いたが、「よおし、やるだけやって見よう」と決意して新潟の彼女の実家へのり込んだ。

酒が入らないと、口もろくにきけない自分を励まし、張りつめた気持で彼女の両親と相対した。

「実は俺は今、ストライキに参加しているので闘争が終るまで結婚を待ってもらいたい。」

「俺は、酒が好きで、今までは貯金もないし結婚しても苦労ばかりかけると思うので」とぼつりぼつり。しかし真剣に訴えた。

ところが彼女の母親は、結婚を断りにきたと思ひ込み、彼女に「あきらめなさい」と言ったそりて彼女は、「今まで私の気持をもて遊んでいたのか？」とつめよってきたので「心配するな。

おそくなるうが早くなるうがお前と一緒にいる。その決意が出来たからわざわざ来たのだ。ちょっとまってくれ」と彼女に言い置いて母親の所へ行き「今は汽車賃をかけ、気まずい思いをしながらわざわざ来たのだ。もし断る気なら五円のハガキ一本で事は終っている。俺の誠意はくんでもらえないのか。」と啖呵を切った。そこで結婚は四月下旬という事で双方の意見がまとまりましたが、四月になっても争議は終らず、金も無し、そこで腹をきめた。「なあに結婚さえすれば親せきや友人、知人から少しはお祝金が入るだろう。それで何とかなるさ」ということだった。新潟から出てきた新妻さんはおどろいた。お金がないと聞かされていたが一銭もないとは思っても見なかつたからである。家を出る時、母が「何かの時に」と渡してくれたお金もあつという間になくなってしまったという。又、結婚した時、家財道具といえる物は小さな坐り机え一ケと、鍋三ケの他に茶わんとはしが少しあつただけで茶棚どころか、ヤカンも急須もなかつたという。さらに一人者の時、月給は全て酒をのんでしまい月賦で背広とラジオ他に一ケ、三品とも頭金を一回払ったきりで後はそのまま残っていた。結婚資金ならぬ、結婚備金？であり結婚後、奥さんが働きに出てから月賦も全部払ったという。

又、奥さんを一番こまらせたのは、毎日毎日酒をのんで帰り第二組合員の悪口をいったことだという。田舎出の奥さんは西も東もわからない。第二の奥さんや、中立の奥さんからいろいろおそわらなくては買物も出来ない時の事であつたから何とか悪口をやめさせようとするさらには声

が高くなった。

そんな事があつただけに今は幸せですと奥さんはいう。

当時、夫は二十八歳、私は二十一歳でした。「今、上の子は五歳になり二児の母親ですが、この子供達の父親（私の夫）は、正しいと思つたことを必ずやり通す人ですから一時は苦しくても闘争も必ず勝利すると思つているし、勝つた時お互に「良かったね」と喜び合えると思ひます。

口に出して言葉に言いあらわせないような苦勞をしてきただけに勝利の感激もまた大きいでしょう。私も夫を助け共に闘つてきただけに一日も早く勝利できるようこれからも夫をばげまし頑張りぬきます。」と決意をかたつていた。

第三話 楽書帳より

組合員諸君、楽書我記帳を早くいっばいにうめつくそう。書きまくろう！
楽しい事、苦しい事、何んでも書き込もう。友は多いのだ。

その一、ああ競馬がやりたい。でもこの闘争が終るまで、がまんしよう。

あのひづめの音、ああしびれる。

錦糸町の場外もなつかしいなあ…… 中山、府中へ行きたいが金がない。

ああ愛しいホース（馬）よ待て、今しばし。馬券売場のおねえちゃん

勝利の日まで、待っておくれよね。

KK

その二、花さけど、まだまだ遠い俺が春

TY

その三、俺は、青木運之助の有難い教えで、労働者として目覚め、自覚することができたのだ。
さらに頑張ろう。!!

KI

その四、私は、びんぼうだ、私の生活は苦しい。だが私は組織労働者だ、だから労働者の大道に生きてびんぼうもし、堂々とした人生の中で大いに苦しもう。

土方 敏蔵

その五、誰よりも、誰よりも、何よりも、何よりも、組合を愛す。

木坐 平

以上の「楽書帳より」は闘争突入一年半位食堂に掛けてあつた、組合員楽書帳に書かれている物の中から選んで見ました。「その二」「花さけど」は労働者の連帯行動は大成功という花を咲かせているが、俺達の闘いの勝利の春はまだこないという気持を表わしていると思ひます。

又、土方敏蔵は、土運びをしている頃、書かれたもので土方をもじつたもの。木坐平は、キザな奴の意味にとれる。

編集担当者の解釈

第四話 とうちゃん、かあちゃんへ

小学校六年生

きまつた仕事をしてもらいたい。けんかをしないでほしい。どこかえつれて行ってほしい。心ばいかけない仕事をしてもらいたい。闘争の事で心ばいかけないでほしい。

心ばいなら闘争なんかやめちゃいなよ!!

第五話 飯炊き六年半

「俺は年だし、アルバイトに出ても若い者のようには体も動かん、若い者が腹をすかさず毎日元気にアルバイト先で仕事が出来れば年寄りの俺が闘争の中でみんなの足を引っばらずに協力したと言えりさ」と言いながら六年半毎日、朝飯炊きをやっておる戸島さんは六十四歳である。

定年を過ぎていたので闘争に勝利しても、再度日本ロールで働けるかどうか不安だといいながらも毎日朝飯を炊きつづけている。

「今は人数も少ないが初めてのころは百人以上が食堂で朝食をしたので朝は四時半には飯炊きを始めなければ間に合わなかったんだよ」という。

「夏の四時半は明るいし、涼しくて気持ち良いが、毎日では大変だし、冬の四時半では暗いし寒いし、おまけに水は冷たいし本当に大変だった」とも言っていた。

その戸島さんも、六年半の中で田舎の葬儀(姉と甥)が二回と弟の結婚式にそれぞれ五日間位と、奥さんが入院した時に休んだので合計二十五日間位は、飯炊きを休んでしまったと残念そうにいうが組合員にして見れば戸島さんの炊いたご飯で六年半を闘いぬいてきたのである。

戸島さん長い間、本当に御苦労様、これからも日本ロール闘争を干乾しにしないようよろしく

お願いしますよ。

第六話 かえうた(ネリカンブルースの曲でうたう)

一、東京に来てから三年目 初めの一年見習工

後の二年はストライキ あなたはどこの子 ロールの子

二、二月五日は恐かった 二月六日はおちついて

二月七日はほほえみも 今じゃ ど根性 ロールの子

三、買いたいシャツもあきらめて、春、夏、秋、冬闘う子

あなたは何がほしいのよ。皆んなの幸せほしいのよ。

四、お金もちには、さげすまれ、暴力団にはなぐられて

警察官には、バクられて、ロールの子等はそだち行く

このかえうたは、全金江戸川地域支部の古くからの活動家が、アルバイトに出ているロールの若い組合員と同じ職場で一緒に働き、いろいろ話し合い、後に組合員がバイト先を移る時、自分の家によって御馳走しながら、「実は君達の事を歌って見たのだが」と、歌ってくれたものです。

その後、組合の方へ二十番までの詩がとどけられたが、ここには一部をのせて見ました。
一時、若い組合員の間でさかんに歌われました。

(編集担当)

第七話 松川行進に参加して

組合員のS君と、H君の二人は闘争に入りまだ一ヶ月半位の頃、青梅から松川事件の集中行進に参加した時の事を次のように話していた。

「俺達は全金の旗もちとして参加したが、その時松川事件の元被告の鈴木信さん達と一緒に歩きながら、ロールの事を一生懸命話した。ところが夜、宿屋についてから「色々沢山の団体が参加しているので、交流会を行なう『君達もロールの事を皆さんに話して下さい』と言われ、こまっつてしまい二人でフロに行こうと部屋をぬけたそうしたら部屋の前でバッタリ鈴木さんと会ってしまった『これから皆の前でロールの話をしなさい』と言われ、部屋にもどったが訴えなどやることがないので『私達は暴力団になぐられたり警察になぐられたりしています。』といった調子に少しづつ訴えた。その他には何を言ったかわからなかったが翌日、行進中の小集会では必ず鈴木さんのあいさつの中に『今日私達と一緒に行進している人の中に、毎日暴力団になぐられ、警察官におどかされても、なおまげずに闘っている全金日本ロールの仲間がいます。私達が真実を訴え闘いつづけてきたように、日本中には沢山の人が正義を守るため闘い続けています。私達

は無罪です。松川事件はデッチ上げです。闘う以外にないし、正しい者は闘えばかならず勝利出来ます。』と言っていたのが今でもわすれられない。』と六年たった今でも思っている。

2 手 記

密告者と疑いをかけられた苦しい経験

榎林 勝 志 (29歳)

長島寮にいた時、七十人位いる寮の中でほとんど非公然組合に入っていたが、おれと本間は「あいつ等はあぶない。」とだれも組合の話をしてくれなかった。

俺がようやく非公然組合にはいったのは第一工場の若手では一番おそかった。これと決めたら人の後にくっついてやる事の嫌いな俺は、それまで組合の組織ができないでいる他の工場の仕事を一生懸命やった。

そしてほとんどの工場の中に非公然の組合員ができたところ今まで俺が工作していた工場の連中が、急に俺と話をしなくなりました。

組合を作っているのが会社にバレて、委員長の手葉や中心的な者が工場長に呼ばれて首にするとおどされ、組合の内情をよく知った者が密告したらしい、どうも榎林が怪しい、こんな噂がおれのところにもきこえてきた。

畜生、いつおれが会社に組合の事をバラしたとか、組合に入ってから俺は夢中になって他の工場の労働者を工作してきたではないか。俺は頭にきて夜も寝れなかった。

委員長の千葉さんをつかまえて「こんな噂が流れているがどうなんだ」と聞いたら「君も疑いという中に名前が出ている」とぬかしやがった。

頭にきてしまったので「俺でない事がわかたら殺してもよいか」と千葉さんにつめよった。

この時（昭和三十七年八月）から、全金日本ロール支部の公然化（三十七年十月十八日）までの苦しい毎日であった。なんで組合なんかに入ってしまったのか？組合の連絡はなにもこない。

俺が連絡をつけていた工場の連中も近づいて行くと話をやめてしまう。

第一工場の仲間もだれ一人話などしてくれない。いったいだれが会社にバラしたのか。バラしたやつをさがし出すまで疑いは晴れない。

「おれではないと弁解して歩いてもだれも信用してくれない。どうせおれだと思われているなら知っている全部を会社に話してしまいか」とも考えたが、それでは、やっぱりあいつだったという事になってしまいうだろう。そつと田舎に帰ってしまうか、でもやっぱり逃げ出したと思われる。

本当におれはどうしたら良いのか？会社に話す、田舎に帰る、それとも自殺でもするか？とこれらが頭の中を駆けめぐる。

会社から悪く思われても恐くはないが、働く仲間から疑われるのがこんなにも苦しいということを初めて知った。そして考えた。おれはなぜ疑われたのか？

その時弁解し擁護してくれる者がどうしていなかったのかも考えて見た。

急に組合のことを真面目にやりだしたけれども今までの生活態度が駄目だったからなのだ。すぐ信頼されるなんてことは出来ない。長くかかるがやっぱり今までのチンピラヤクザみたいなことをやめてしんぼう強く努力する以外にはない。

十月十八日全金日本ロール支部が結成されたこの日から組合の先頭に立って会社の組合つぶしの攻撃に対して闘った。その結果、俺は会社からずい分憎まれたらしく、三十八年二月四日、十三名の首切りが出された時、俺も首を切られていた。それから毎日のように暴力団になぐられ必死になって闘い続ける内、組合結成前二ヶ月間の苦しさなどふつとんでしまった。

この長い苦しい闘いの中で仲間達の俺に対する疑いもどけてきて少しづつだが信頼されてきた。

今ふりかえって見るとよくあの時短気をおこさず頭張り通せたものだと思う。自分自身に負けなくて本当に良かった。

同時にこれからの組合運動を、私のようなつらい経験を若い労働者がしなくてすむように仲間に対する信頼や思いやりなど配慮のゆきとどいたものにして行きたい。

首になってから七年目になる。どんなに長くなってもどんなにつらくても完全勝利まで闘う。全国の支援してくれている仲間を裏切らないために。

おれ自身に負けないためにも。働く者の生活向上のためにも。一九六九年七月、代々木病院で

金さえあれば

高橋 幸男（28才）

小学生の時から結核をわずらい、学校もろくに通えない兄をかかえて、父の漁業と、人から借りたわずかな畑の収入で、生計を立てていたわが家は楽ではないが、何とか食う程度の生活は続いていた。

そんな中で雨の日、洗たく物をひろおうとした父が、足をすべらせてころんでしまい。その時下にあった杭にぶつかり、じん臓を悪くしてから極度に生活は苦しく、一家十人の大黒柱である父と、それを助けるべき兄は、二人とも長わずらいという最悪の事態になってしまった。

小学校すら出ていない気の強い母が、一家をやりくりし何とか親子が干乾しにならず生きていく、という状態が続いたがどうにもならず親せきで、民生委員をやっている人の世話で、生活保護を取るようになった。

その頃、姉達二人は、働きに出ていたが、保護の問題がきっかけで役場からつとめ先の工場へ調査が入り、いろいろと調べられるので、家え帰ってきてそのことを泣きながら話し、母をなじ

り、せめるのです。そんな時、母も涙を流し一緒に泣きながら、

「やな事もあるだろう、でもな、そうせんと一家干乾しになっちゃうになあ、今の仕事かて止めてんで頑張ってくれ、な、頼むで分ってくれ」とたのんでいた。

幼かった私もこのような母を見てそのころから金さえあればと考えていた。

入院している兄の見舞いに行く兄からも、何時もそんなことを聞かされてきた。こうした生活の中で中学三年になった。私が一番恐れていた時がきてしまった。というのは、中学卒業間近には当然、進学の話になるからだ。私も決断をせまられた。進学は私の夢でしたが保護を取っている中で進学は無理とのことでした。担任の先生は、いろいろ心配して、「もしお父さんお母さんがゆるしてくれるなら、私の養子になり、進学しては」といつてくれた。

しかし、私は進学をあきらめた。それは、幼い時から金がないため、家族が苦労しなければならなかった事実を、あまりにも知りすぎていたから、何とか自分で働いて家計を助けたという気持ちと、先生の所から進学しても、近くにいれば、金がないために何かと問題ばかりおきる家と、その中で苦労している弟達に申し訳けなく思う気も強くあった。

こうして私は、一日も早く、家の手助けができるようにと、職業訓練所への道を進んだのです。貧しい家を助けるため金をためることはかり考えるようになり、日本ロールに入社しても、その考えは変えず、一生懸命働けば今に何とかなるだろうと、友達との付き合いもせず、一生懸命

働いた。未成年でありながら、一カ月二百時間の定時労働をはるかに越す、三百三十時間という月が続いた。しかし、こんなに働いても就職する時考えていた。一月五千円程度の貯金など、夢物語りにひとしく、自分一人の生活がやっとならぬ、家の手助けも、定時制高校へ行くという希望も、無惨に打ちやぶられ、それでも残業もし、大人達と一緒に働いた。この労働強化がたまったのか、今度は、私が腎臓結核になり入院半年間の療養生活をするはめに落ちいった。

それでもまだ、一生具命やれば今に良くなるという気持は変らなかつたが、休んでいる間、健康保険の傷病手当で生活したが、良く調べて見ると、何と自分達の納めている保険等級と実際に支給されている等級では、大きな差があることがわかり、保険事務所に行き調査したら、会社が私達から高い等級を取り、保険局には低い等級しか納めてないことがわかった。

この事件をきっかけに今までの私の考え方は、大きく変化せざるをえないところとなった。

私は日本ロールに労働組合を作り、今まで会社に搾り取られた物を、取り返すために活動を始めたのです。

非公然活動のころから役員として活動してきた私は、会社に目を付けられ十月に入り、大坂営業所へ長期出張という形で追出されて十月十八日の結成大会には参加することができず、二ヶ月後帰ってくると執行委員として私は選ばれていたのです。

私は、何としても勝って日本ロールに組合を作ろうといういろいろ学習もしたし、一生具命闘いま

したが、初めのうちは毎日暴力団や、機動隊とのわたり合いで気も張っていたし、皆さんなど真剣に一生具命闘ってきたのですが、一年が過ぎ二年三年と長くなるにつれ、「あわてたって今すぐ勝てる訳でもないのに力が入るものか。」とか

「これだけ闘っても勝てないのだから時機をまつより外にない。」などの無気力的な気持が組合員の中に出てきた。

執行委員である私ですら、そのような組合員の気持におし流されつつあった。

そんな中で私は、東京争議団の会議に出るようになり、多くの人達がいろいろな形で、闘っていることを知ると同時に、労働組合もなく、しかも女性が一人で子供をかかえながら、不当な首切りはゆるせぬ、撤回させるまで断固闘う、といって頑張っている姿やそのかけの苦勞をきいて日本ロールのように、百二十名もの組合員がいて、しかも全国金属が、組織を上げて支援しているという有利な状況にある私達は、まだまだ闘えるしどんなことをしてもかならず勝利しなければという新たな決意をかためました。

又、私の中学校時代「金があれば何でもできる。何をするにも金。金。」と言っていた兄。

二十歳の時から、十四年間闘病生活を送り、今なお、家から一銭の小使いすらもらっていない兄、その兄から「実は療養のかたわら、サボテンを作っていたが、それを売った金が入ったけれど入院中の俺には使いたくても金を使うような時はないので」と二千元とおまけに、お前のやっ

ていることは、正しいことなのだから元気に頑張ってくれ、俺も最近は良く、お前達のように思
い切り動きまわりたいと思うことが時々ある。実際には体の方は、思うように動いてくれないと
思うが、とにかく正しいことをいうには勇氣がいる。行動に移すには、より大きな勇氣が必要だ
と思う。それを実行できる幸男は幸せだな……お前の力になれない自分がいやになる。つくづく
なまけなくなる。でもお前は頑張ってくれ、俺の分もな」という手紙が送られてきました。

又、闘争初期のころは、会う都度「そんな事をやっていて、家はどうするの、お前の送金をた
よりにしている、父さんや弟たちをどうするつもり学校へも行けなくなるじゃないの。幸男、お
前は馬鹿正直すぎるわよ」と言っていた二人の姉も、今では私のやっていることを理解してくれ
るようになったし、苦勞ばかりしてきた弟たちも最後まで頑張れと励ましてくれていた。私は、
この兄弟たちのはげましに涙を流し、兄弟たちの言葉を心の奥深くきき込みながら、一日も早
く勝利することが私を励ましてくれる兄弟や、日本ロールの闘いを支援してくれた全国の働く仲
間に対する真の応え方だと心に誓った。

そして一家の大黒柱である父に代り必死に働き続け、五十二歳と若くして何の楽しみもなく苦
勞ばかり多く、この世をさった、母の霊前で「私は正しいことを、仲間たちと共につらぬき通し
ました。」と報告できる日が一日も早くくるようこれからもさらに頑張る決意です。

仲間にはげまされ

内田宜長(43才)

俺の会社には労働組合はいらない。ほしい奴はよその会社でやれ、労働法を無視する発言を
平然と行なう社長、それとはうらはらに、労働組合の必要性を助長するような職場の環境や、勞
働条件の中で生活を守るため営々と残業に汗を流す私が、労働組合に加入したのは、十月十九日
で、総評全国金属、日本ロール支部が結成された翌日でした。

しかし、労働者としての自覚を持たない私には、組合に入りさえすれば生活は向上するとしか
感じていなかつた。闘うことも知らなかつたといえます。その現われとして、四ヶ月後の解雇が
出るまでの間、しつような職制の説得や暴力団の介入で全金の鉢巻をはずす仲間がふえると心細
くなり、二月三日には全金をぬげ中立という立場にかわってしまいました。

争議突入当時からこくな弾圧の状況を入づてに聞く中で、説得班の全金に戻ってくれとの要請を
無下に断れずやんでいた気の小さな私にも一かけらの正義感があったのでしよう。

三月初めには再び全金の鉢巻をしめ争議団の戦列に戻りました。

うわさ以上の暴力介入、機動隊、公安、官憲の弾圧に今までの私の社会的な感覚は根底からく
ずれ、資本金と労働者の力関係が労働条件を作り憲法に保証される基本的人権が守られる。この
ことは闘う以外に道はないのだと考えられるようになりました。

数多くの集会や、全国オルグに参加する中で仲間たちは見たこともない私を労働者階級の一員として暖かく迎え励ましてくれたことにより一層確信につながり、勝利の日まで頑張りぬく決意をかためて行くのに大きな力となりました。同時に私が争議を続けることにより直接被害を受けることになり、生活のきびしさから私をつき上げる女房に対し、当時中学生であった娘が「お父さんが悪いんじゃない、政治が悪いんだ」という発言は私を助けてくれた。

「お前達、えらそうなこといってご飯を食べずにいられるのか！」とヒステリックに怒鳴り散らしていた女房が、生活はあたえられるものではない。闘い取るものだという方向にかわってきただけの生活保護や、婦人の闘いに参加するようになり、仲間達のはげましによるものです。

苦しさの中に真実がある。いろんなカベに突当りながらも今日までいや、勝利の日まで闘う決意ができたのも全国金属を中心とする全国の働く仲間の皆さんの暖い支援があったからこそだと思えます。

今後尚一層の御配慮をいただけますようお願いをする次第です。

布団を取りにきたのに

横田 精一郎 (29才)

われわれの闘いも七年を迎えようとしている。顧りみればこのように長い闘いになろうとは思像もおよびませんでした。一ヶ月、三ヶ月、半年闘えば、一年も闘えばと、勝利する日を考えな

がら闘い続けてきてしまった。

なぜ、俺は闘ってきたのだろう。組合の「ク」の字も知らなかった俺が、日本ロールという会社に愛想をつかし、やめようとした俺だが、人間の運命？なんて己の決心次第で決めるのではないかと思う。なぜならば、田舎の両親にも会社をやめることを話し、布団を送るために上京したのだから。皮肉にもこの日(三十八年二月十一日)ストに参加する決心をし、実行してしまつた俺、ロール闘争がただ首を切られてピケを張っているだけの状態であつたら争議に俺は参加しなかつただろう。

その日、俺が寮に帰つたのが五時半頃、二月の午後五時と言えば夕闇がせまり、電気が必要な時間で真暗な寮に帰るのがなぜか異様な感じがして隣の店に寮の連中は何しているか聞きにいった。

寮に帰り部屋に入ろうとした時、化物のように顔の原形をとどめない程はれ上り、傷ついた寮生を見たのだ。真暗な部屋の中でただ突立っている自分に気がついた。

一瞬、空白な時間を過ごした俺は、やめるなんて、このまま帰るなんて、そんなこと俺にはできない。あんなにも残酷に若い寮生に乱暴を平気で行なう会社に対し、改めて怒りを覚えずにはいられなかった。

一緒に仕事をし、いろいろ話し合った連中が、暴力団に毎日いためつけられながらピケをはっ

ている。俺一人がやめるなんてどうしても俺にはできなかった。俺の気持が許さなかったのだ。正義がなぜ暴力で踏みにじられなければならないのか、ほんの一時であったが俺は考え、まったく未知のストライキ、いや暴力ロックアウトで闘う仲間の一人になったような次第です。

そんなことから七年近くを闘いの中で過してしまった。

七年といえば生れたばかりの赤ん坊が小学生になる年月だ。けっして、けっして短くない。

闘争三ヶ月位の時、糝谷の大華工具分会の決起集会で、自分の言っていることがわからなくなり、壇上で立往生し汗顔一斗の想いをしたこともある。又10・18団結集会ではこんなにもたくさん仲間達が俺達を支援してくれるのなら勝てるという確信を得られました。

又、二・五連帯ストではロールのために皆勤手当をとばし、賃金カットまでされて俺達の闘いを勝利させようとした東部一万の仲間達には、統一と団結の偉大さ、労働者とは、労働組合とは何たるかを教えられました。

時には松川、白鳥を守る会などの活動を通じたり、裁判所へ通う中でいろいろな体験の中で七年という歳月の中で、金で買うことのできない経験をしたと思う。又、資本家先生から眞の労働者の義務教育課程を身体で感得した。これでは勝利の日まで闘わずばなるまい。

敵より一日長くではなく、一日も早く勝つために頑張りたい。

初めて地区別の議長になる

新谷 照夫 (24才)

錦糸町からバスに乗り、葛西橋を渡ると窓の外の景色は、大きく変わり、田や畑の中、葦菰屋根が点々と見えてきた。これでも東京なのかと思いつつ、しばらくすると青黒くくすみ、高い屋根からもうもうと黒煙をはき、あたりの田畑に何となく暗い影を落している巨大な工場が見えてきた。

これが僕が就職しようとする日本ロールなのか……雷(いかづち)という、いかにも変わった名前のバス停でバスを降り、親戚のおじの家へ、母と姉と共に田圃道を歩いて行くと、時々バリバリという雷のような音に何となくおびえた。

おじの家は、会社のすぐ横にある社宅で製鋼工場(二十トン電気炉でスクラップを溶す)がすぐ横にあった。それが先程の雷のような音の正体であった。

そして今まで一年間働いていた。港区六本木の小さな町工場をやめて、ここに来たことにひそかに後悔の念をいだいていた。昭和三十六年三月二十六日僕が満十六歳の時であった。

次の日、長島寮という会社から十分位歩いた所にある寮の十三号室に入れられた。

初めて寮に入った日のことは今でも良くおぼえている。部屋には僕が今まで見たことのないベットが五つあり(後にカイコ棚と呼ぶ)その一つのベットに布団を敷いて、部屋の人達が帰るの

を待っていた。これから一緒に生活する人達が、良い人でありますように心の中で祈っていた。やがて四人が一緒に帰ってきたので、僕はベットのの中から、新谷照夫です。どうぞよろしくお願いします。」と挨拶した。後で部屋の連中に「ベットの中でかしまっているのを見た時は、また変な奴がきたものだ、と思った」と言われ笑ってしまったが、その時の僕は、真剣そのものだった。

僕が日本ロールに入って感じたことは、前の会社にいた時は、小さな町工場で新入りには、優しく親切にしてくれたが、ここは全くおかまいなしで、僕の部屋の連中と来たら、会社でも悪い連中として、マークされている者ばかりだったので、一ヶ月の中、会社に出て働くのはせいぜい二十日位で、あとは遊んでいるような連中であつた。

類は友を呼ぶという諺があるように、僕もその気があつたのですぐに部屋の連中と仲良く付き合い始めて、タバコ、酒を覚えるのに時間はとらない。前の会社は、絶対未成年者は、タバコや酒を飲むなと社長から言われていたのに、ここでは中学を卒業してすぐ就職してきた者でも、タバコ、酒位当り前のように見られ、むしろ注意する者は付き合いが悪いと言って仲間はずれにされてしまう特殊な環境にあつたのです。

このような環境は、ロールの会社ばかりでなく、当時は葛西、浦安というロールをつつむ全体がそのような感じであつた。僕らの田舎には中学校にも行かずに悪い遊びに耽っているという連

中はいなかつたが、この土地ではそのような連中がいるのは当り前のようになっていた。

こんなことが今の教育ママ連はどう理解し、その解決を考えるのだろうか。

とにかく、日本ロールにきて常識的なことは通じないことを知らされた。

僕の働いていた、鑄造工場とは鉄を溶し圧延用ロールの金型に流し込みロールを作る、その他いろいろな型があり、溶した鉄を流し込んで品物を作る仕事だ。

工場内は、すすと黒鉛で真黒、そこに深さ五〜六メートルの穴があり、電気炉二基、反射炉二基、キューボラが一基から成っていて、毎日それらの炉から溶けた鉄の湯を型に流し込んでロールを中心を作っている。

小さなロールでも一トン位、大きな物は四〇トン位のものもある。僕は鉄の湯を流し込む時はいつもノロかき（鉄の湯に浮くかすを長さ五メートル位の棒の先につけたもので熱から守る役目）（湯を金型に流し込む人々を五メートル位の棒の先にトタン板をつけたもので熱から守る役目）なので体中やけどのない時はなく、一つ違えば頭から鉄の溶けた湯をかぶるか、ロールの穴に落ちて死ぬかだ。

やっと一日の仕事を終って帰る頃は、顔は黒鉛とススで、笑うと歯だけが白いとよく機械工場の連中と言われた。会社の風呂水はまたすごい。僕はよくコーヒー風呂と呼んだが、地下何メートルから汲み上げるのか知らないが、風呂水は赤土を溶したような色をしている。

そこへ、体中真黒にした何百人もの連中がその湯と水を使って顔でもどこでも洗って、その湯の中に入る。町の風呂屋や、自分の家の風呂に入っている人には、とてもこの風呂に入ることができないだろう。

そして、会社内の食堂では、重油で炊いたまずい飯を食って寮へ帰る。どこの寮でも一台しかないテレビを廊下に置いて、いつもチャンネルのうばい合いがつき物、同じ寮でも部屋が違えば敵である、僕もその頃はよく喧嘩した。そんな会社だったので一年目には何んの未練もなく止めようと思っていた所へ職場の仲間から、組合を作るから入らないかと誘われ、どうせ止めるなら、こんな会社うんと困らせてから止めてやろうと思ひ、組合がどういうものか全然知らないまま、全金に加盟した。そして一週間後に突然会社の正門近くで赤旗を振り、人が集まっているのを見てビックリしたが、僕もそれに加わった。それが三十七年十月十八日のことだった。

そして、三十八年二月四日ついに今までもめてきた会社と組合が真正門から対立した。

それは三十三名の首切りが出たのだ、次の二月五日、早朝、会社の正門前に組合員が首を切られた仲間と一緒に就労しようとするスクラムを組んで行くこと待ちかまえていた暴力団、機動隊とぶつかった。

しかし結果は、さんざんで暴力団には殴られるし、助けてくれると思つた機動隊には逆にけとばされ、こん棒で殴られた。僕はおまわりさんは正義の味方だと思つていたが、この時初めて警

察官に対する甘い思いも吹きとんでしまった。

それからは連日連夜、暴力団、機動隊は、僕らがビケを張ることに妨害し、おそいかかつてきた。組合の中に怪我人は続出し、救急車がくると又ロトルかと地域の人達は話していた。

こんな日が何日、何ヶ月と続き僕はその時十八歳の春だった。

最初のうちは、毎日毎日が緊張していたので何も考えることはできなかったが、やがて一年、二年と過ぎるとだんだんに闘争に対する熱意が薄れ、アルバイトを友人と一緒にてんでん歩いてやがて闘争からも離れ神奈川の座間に二ヶ月、千葉に三ヶ月と渡り歩いて一ヶ所に三ヶ月とおち着いてはいられなかった。

その頃、闘争などそっちのけで働いては、その金で夜の街をさまよい歩いていた。

しかし、帰る所といえは、やはり田舎よりも葛西の町の方が住み良かった。だから、三ヶ月位いなくなり又帰って二ヶ月位寮に在るといふような生活が二、三年続いた。組合では、誰も僕に注意などする者はいない。いっそのこといわれればサツパリしたかもしれない。何もいわずに帰ってくれば組合員食堂で飯を食べ又皆んなと楽しく話をする。

こんな僕にすれば本当に有難い所に違ひなかった。そんな僕にも少しづつではあるが、この闘争は勝たなければならぬという意識が生まれ始めた。

そんなある日、突然、会社で僕が「おやじ、おやじ」と呼び、いろいろと面倒を見てくれた、

僕には本当のおやじ以上に思えたおじで（入社の時、世話になった人）が起重機で、重さ二トンもある金型を他の人が釣って移動中、金型が落ちて見るも無残な死に方をした。いや、会社によって殺されたというのが正しい。その時、僕と正徳（殺された、おじの息子）君と、良平君は、埼玉の上尾にアルバイトに行っていたが、僕達はすぐ上尾から電車で作業着のまま会社に向い、会社につき、事故現場に行こうとすると守衛が数人とび出してきて、僕達三人をとり囲み、どこへ行くのかと言ってきた。その時ほど腹わたのにえくりかえる思いをしたことはなかった。

しばらくは声も出なかったが、俺の親父だ！とどなり返し、事故現場に入り、無残に殺されたおじを見た時は、目前が真暗になり、大声で泣きわめいた。昭和四十一年五月二十七日の事であった。それから寮に落着つき、寮からアルバイトに通うようになった。

このことでさらに会社に対する憎しみが一段と強まった。

そして二年後、再び僕の生涯で忘れることのできない悲しい事が起った。

昭和四十三年四月八日の朝、僕と同じ田舎からきた、僕より一つ年下の武藤進君が組合の闘争資金を稼ぐために、アルバイトに行く途中で交通事故で死んだのだ。

その日、僕はやっと見つけたアルバイト先に仲間と二人で行き残業までして帰ってからやっと知ったのである。組合では僕のバイト先の電話番号もわからず、どうしようもなかったのだという、僕は何が何だかわからず組合事務所へ駆けこんだ。

皆んな集まっていて、僕の顔を見て、聞いたか？とポツリといったきりで、誰の顔にも悲しみがいっぱい、普通なら陽気な組合事務所もこの日はかりは誰一人として無駄口をきかない。僕は一氣にたたみ込んで涙を聞いているうちに涙が頬をつたってスリッパをはいた足をぬらしていた。

何ともいいようのない悲しみから、どうすることもできず、今まで兄弟のようにしていた武藤のことをいる思い起して枕も涙でぬれ、一睡もできずその夜を明かした。

いったいどうして僕の周りから親しい友人、親父のようなおじまでこの世を去ってしまったのだろう。僕はこの世の中をのろった。

考えて見れば僕も武藤も田舎が同じという所から良く気も合った。それまでの六年間、良いにつけ悪いことにつけいつも一緒だったし、組合員の中でも気持が一番良く知っていた。今となつては武藤から貰ったラジオだけが残っている。これがただ一つの形見となつてしまった。武藤は僕より闘争の活動はずうっと真面目にやってきましたし「俺は、勝つまでは絶対にやめない」といつも言っていた。田舎の親達も良く理解してくれていた。

しかし武藤が亡くなった今、僕は武藤の分まで頑張つて闘うのだと心に誓わずにはいられなかった。

そして僕は初めて長島寮の地区別会議の議長になり、今まで僕を知っている人達は良くそこま

でやる気になったと驚いていた。

組合の方もこの一年間いろいろなことがあって、組合員一人ひとりの自覚も高まってきたことも事実だ。「一日も早く勝利を」を合言葉に闘争も七年目を迎えた。僕は今年の三月ころから、体の調子が悪く、三月末には診察を受け、急性肝炎と診断され、入院してしまった。

僕は病氣らしい病氣を初めてして、入院といわれ本当にどうなるのかと初めのうちは気が気ではなかった。

しかし、約一ヶ月間の入院中は、毎日組合員の誰かが見舞にきてくれるし、いろいろと元気付けてくれるし、少しも淋しくはなかった。こんな時本当に仲間の暖かさや有難さが身にしみて嬉しかった。

一緒に入院していた人も、いい友達が沢山いてうらやましいと言った位だ。

病院生活の中で満二十四歳の誕生日を迎え、なんとなく六年間の闘いを振り返って見ると、あまりにも多くのことがありすぎていつの間にか年を取って行くような気がした。

現在、肝臓の方も良くなり退院して少しずつ仕事のできる体に回復しているが、油断はできない。

これから先もいろいろのことがあると思うが、仲間達と良く話し合い、自分に負けないようにしながら、一日も早く勝利を闘い取るまで頑張ります。

雑記帳より、手紙の下書き

上尾 武人(25才)

拝啓

朝夕は寒さがまだまだ身にしみるが、日中は春の訪れを感じさせるようになりましたね。

貴女の就職先も決ったようですね、おめでとう。私も元気で働いているつもりです。というのは、労働組合を作ったら首切りが出され、ストライキをもって会社と闘っているのです。

くわしくは同封のピラと新聞の切りぬきを見て下さい。新聞の切りぬきとピラ一枚は、私の兄の方へとどけて下さい。お願いします。

おやすみなさい。一九六三、二、二十一

武人

前略

兄さん、退院できておめでとう。といっても前のように働けないのは残念ですね。

初美ちゃんの修学旅行のことですがぜひ行かせてやって下さい。先日の手紙に書いたように私は今闘争のため沢山はないのですが少々送らせていただきますが、出過ぎたことと怒らないで下さいね。くれぐれもお体に気を付けて早く元気になって下さい。

今日はこれで 三月二日

武人

拜啓

初美ちゃん、お手紙拝見しました。人間の幸福とは何でしょうか？ 幸福を願う気持は皆同じように持っているでしよね。でもお願いするだけで幸福になれるのでしよか。

一生眞命勉強し、努力して自分の力で幸福をつかみとった時、本当に幸福なのではないでしょうか。だから私も元気に一生眞命闘っているのです。私はこの闘いに勝利して自分の幸福をつかみとるつもりです。必ず勝利できると思ひし、勝利した時、私は幸福を感じられると思ひます。貴女も一生眞命頑張つて下さいね。

四月九日 初美ちゃんへ

武人より

前略

兄さん、長らく御無沙汰致しました。私達の闘争の事、心配してくれているようなので少し書いて見ます。組合役員の人は、われわれの闘争は有利に進んでいるといつもいっています。

富士鉄へオルグに行ったり、二月九日から毎週青婦協（青年労働者と婦人労働者のこと）が中心になり、日本ロールの現地で交流会が行なわれ、三月十四日には現地で春闘勝利団結集会も計画されていますが、われわれ組合員の内部はあまり良いとはいえないこともあります。

たとえば、みんなアルバイトに行き、活動は一部の本部要員まかせであったり、闘争資金、生活資金の自活体制すらまだ確立しきれていません。

外部からは、英雄的な闘争をやっているといわれるのがすごくつらく感じられることもあるし

こんな闘いかたで本当に勝てるのだろうか、と不安になる時もあります。でも私は、自分で始めたことは、悪いことでないかぎり最後まで頑張りたいと思っています。今すぐ勝てなくても大丈夫、兄さん長くなっているので心配かと思いますが、どうか心配しないで下さい。

なお、2・5のビラと新聞切りぬきを同封します。今日はこれにて

昭和三十九年三月四日

武人より

闘いの中で父親になる

新村 貢（29才）

ストライキに入つてすでに六年半、私は、この中でいったい何をやってきたのだろうか。

今、手記を書くに当つて、いろいろ思い浮べると何もわからないまま、争議に入り、警察と暴力団にこずきまわされたことだけが頭に浮んでくる。

ストに入りすぐアルバイトに出た。いろいろの仕事をやってきたが今だにこれというものを身につけていないし、今一番の悩みは、組合員同士で仕事をやっていて自分だけが良くできないことだ。仕事仲間は、組合員なので、いろいろかばってくれる。実に嬉しい、だが組合の活動で批判されるより辛いこともある。だが、現在まで私を支えてきたのも仲間であり、組合員である。

今、組合では「一日も早く勝つ決意を固め、一日も早く勝利しよう」と頑張っている。

私自身も、一日も早く職場に入りたいと思つている。職場に復帰してもけつて楽しい職場で

あるとは思えない。職制の目は光り、会社は組合破壊のために、今まで以上の攻撃をかけてくるだろう。だがそこは私が六年間働いていた職場であり、仲間もいるし、安心して働ける職場であろう。

真夏の太陽の下で汗とほこりで体が汚れる、毎日のアルバイトも家へ帰ってくるとほっとする。玄関を「タダイマー」と入ると、やつと這い始めた娘がすぐにとんでくる。これだけは、人の子の親になって初めて知る喜びだ。いくら汚れていてもつい抱き上げてしまう。私は、二年前平凡な見合結婚をした。

見合の時、私は、いろいろと考えた。はたして結婚してうまくいくだろうか。その頃、結婚した組合員で活動がにぶっている者もいたからだ。

私は活動家という程でもなかったが「奴も結婚したら、組合に顔も出さなくなった」とか「結婚したら組合に金も入れなくなった。」等といわれるようになったら困るし、そんなようになるんだったら、結婚などしない方が良く、当時考え込んでいた。

見合当日、私と彼女は話だけで二時間近くも話合った。話合ったというより、私が一方的に喋りまくった。私は今、ストライキをしているので、生活資金はこの位で、君と結婚しても、毎日即席ラーメンで我慢しなければならぬかも知れないが、でも私は、ストライキをやめないよ。争議のことは、口で説明してもなかなか理解できないかもしれないが、もし私と結婚したら

少しでも私の立場を理解するように努力してほしい。とこんな具合であった。

今、思い浮べると体中がぐずぐずたくなってくる。

結婚当時、これという夢はなかったというより、生活に追われて夢を見る暇さえもなかった。

しかし、一年もならぬうちに長女が生まれた。病院で初めて子供を見た時「となりに寝ている子より家の子の方がづうつとづうつと可愛いく感じるね」と言っ妻に笑われた。

しかし、子供が生まれてからというものの金のかかるのにおどろいた。

生活費の前借りまでしなければならぬ始末、このころ金が原因で良く夫婦喧嘩をした。高物価と、少ない生活資金では、やりくりが大変、それでも何とか克服しなければならぬ。新婚当時は、争議のこと、組合の活動のこと、テレビを見ながら政治のことと一生懸命話したが、妻は判らないままにも真剣に聞いてくれた。今では妻から、組合のことを聞かれると『うるさい。』等と言ってしまうこともある。妻が私に用事をたのんでも、「組合に行ってくる」と家を出てしまう。

こんな時「行ってらっしゃい」とは言うものの妻の不安そうな顔は隠しきれない。

でも、最近では、私がアルバイトから帰って家でのおんぼりしていると、

「今日は、地区別会議の日よ、早くしないと遅れるわよ」というようになってきた。「うるさいな」と口でいいながら心の中ではニヤリとしてしまう。

先日、私の家で地区別会議をやった時も「最近、集る時間がルーズになったわね」でもあ

なただけは、時間を守ってね」という。この時もつい「うるさいな」といつてしまった。しかし私の顔は、かなりニヤケていたにちがいない。

最初に書いたように、今はただ私も妻も、一日も早く勝利して、一日も早く職場へ復帰することが唯一の要求だし、願いだ。そして「ドレイ工場」を解放するために、私にどれだけの力があるかわからないが、これからも頑張るだけだ。

友人への手紙

Y・K (27才)

前略

君からの便り拝見致しました。すぐ返事を出すつもりがいついおそくなって申し訳ない。返事がおくれたのでおこっているでしょうね。

先日の手紙によると、私がロール闘争に参加しての事について、今だに疑問が有るようなので答えになるかどうか、私なりの考えを正直に書いて見ます。

まず、なぜ六年も闘っているのか？という点ですが……

闘争に入ってすぐ君に送ったピラを見てくれていると思うが、日本ロールの場合は、権利闘争である事、労働者の権利は、私達労働者が会社に要求し、闘い取って行くものだと思います。たとえば君が会社から「明日から会社に出社しなくてもよい」と言われたらどうしますか。

明日から、飯の種がなくなる時、君がその立場に立たされた時、平気で「はい」と言えるでしょうか。君が書いているように、日本ロールより労働条件の良い職場は沢山あります。でも、その働き良い職場は、そこで働く者が長い間かかって闘い取って来たのだと思います。

私は、闘争に入ったころ、ロールをやめて、労働条件のよい会社に入ろうと思って職探しをやったが、でもやめる事は出来ませんでした。

私が争議に入って、半年位の時、弟が事故で亡くなった時は、半月ほど田舎にいたのですが、その時はもうロールに帰るのはやめようと思っていました。

でも、ロールに帰ったら、仲間が私を暖く迎え、色々励ましてくれました。私はこの時ほど「仲間って本当にいいなあ……」と思ったことはありませんでした。

その事があってからは、私がやめれば仲間を裏切ることになると思うし、又、仲間というものは、本当に大切にして行かなければいけない、と思うように変わって行ったからです。

最近、私も少し学習したので、自分達の職場は、自分達の力で働きやすい職場に変える必要があるのだということもわかって来ました。

前に君に会った時、話したように、ロールの職場は、人間を人間として扱わない、ひどい職場です。この「ドレイ工場」と言われるロールを働きやすい職場にする作業は、私達がやらなくて誰がやってくれるでしょう。映画(ドレイ工場)の中にあるように「闘いを止めたら、そこに

残るのは、「ドレイ工場だけだ」というところを思い出して下さい。

今、全国で私達のように、首切反対や、組合が二つに割られたりして闘っている人達が沢山いるのです。中には一人きりで「守る会」を作って闘っている人もいます。私達は、金属という組織に守られて闘っているが、私達よりまだまだ苦しい条件の中で闘っている人達は沢山いるのです。苦しい闘いを続けている人達のためにも有利な状況の私達が一日も早く勝つことが必要だし重要だと思えます。

この手紙を書いていると、私の頭の中に六年間の苦しみや、楽しかったことが浮かんできます。その苦しみや、楽しみを自分のものにしたと思ひ、闘い続けている訳です。

この闘争が終った時に最後まで闘って、仲間を裏切らずに闘ったという誇りは、人間にとって非常に、貴重な、重要なものだと思います。

それから闘いの展望のことですが、私は、私なりに勝つ展望を持っていますが、そのことを書くとも長くなってしまいますので、盆に弟の墓参りに帰るつもりですので、その時お会い出来たら話し合ひましょう。又その内、手紙書きます。それから盆休みの日が決つたら知らせます。

ところで話は変わりますが、君は「どぶ川学級」という本を読みましたか。もし読んでいなかったら是非読んで見て下さい。「どぶ川学級」を読むと私達が闘っている意味がよりはっきりわかるかもしれません。最後に、私の大すきな言葉を書きます。

「万人は、一人のために、一人は、万人のために」ゴリキーの母より

頭に浮かんだ事を書いて見ましたが、まとまりのない文になって申し訳ありません。今度会える日を楽しみにしています。今夜はこれにてペンをおかして下さい。

昭和四十四年四月三日

上山 義二

松本 一様

始めはデマにまよったが

家族 須賀 照子(39才)

十月十八日、日本ロールに労働組合が出来ました。その夜、主人は遅くなって帰って来ました。が、あまり口もきかず大変考えている様子でした。二、三日して、「俺も組合に入った、お前もそのつもりで頑張ってくれ」と言われびっくりしました。社長の認めない組合に入ってどうなるか？

全金はアカだ、会社を首になる、色々な不安が私を苦しめました。

今となっては恥しい話ですが、その頃は全金に対する会社のデマ宣伝を信じていたのです。

でも、自分でこうだと決めたら、私の言う事などき入れない、主人の性格をよく知っておりますので、何も言えず、どうにでもなれ、そんな気持ちで、私は子供をあずけて働きに出ました。

だが、救急車のサイレンの音を聞くたびに思わず、ドキッとして、主人が怪我をしたのではない

か、組合に何かあったのではないかと働いていても安心して働けた日は、一日もありませんでした。でも、夕食後、子供を寝かせてから、主人はよく組合の話聞かせてくれました。

五ヵ月、十ヵ月とたつうちに、闘争に対峙するというより、主人のしている事は本当に正しかった。間違っていないかった。とはっきり解るようになりました。

そして十月十八日、日比谷野外音楽堂で見せていただいた、あの団結のすばらしさ、私達のためにこんなにも沢山の人が参加して下さる。最後のガンパローを合唱した時は、涙で主人の顔が見えませんでした。あの感激は一生忘れられません。

又、他の支部からよせられた「団結袋」には、家中で大喜びしました。中には、かんずめに、「ロールの仲間、ガンパレ」と書いたのがあり、一ヵ月位食わずに、茶ダンスの上に置き、夕方主人が帰ると「今日も一日頑張って来ました。」なんて、カンズメに報告していることもありました。お餅を沢山いただきました。

このあたたい支援に報いるためには、どうしても勝たなければなりません。

必ず勝利して、一日も早く皆さんが職場に帰り、楽しく働けるように頑張らなくてはなりません。支部の皆さんと一緒に、主婦の私たちも一生懸命頑張ります。

それから、うちのお父さんにも、もつともつと、今まで以上に一生懸命頑張ってもらいます。

(注解) 一九六四年一月七日発行の闘争ニュース葛西の火より

妻となり母となって

黒田葉子(28才)

私が山形から出てきて一都民となったのは、昭和三十七年十一月のこと、会社は組合結成でこたごたの真最中に、主人と結婚しました。約一年半近い交際にも、主人は一言も会社の様子を知らせてくれなかったので、全金がストに入り、主人が協力して会社を休んだ時など課長が来て是非会社に残ってくれと、何度も頭をさげられた時には、布団をかぶっている主人を横目に、私がかたことの東京弁で「今朝は、早く会社に出かけると言って、もう出かけました」……課長は何ともふに落ちない顔をして、私をじっと見詰めているのを見て、心臓が早鐘のようになる気持ちを、じっとこらえた。

あの時は、随分純情であったものだと感じる。

時には、塀を乗り越えて帰った主人、その様子を心配かけまいと口に出さぬ主人、何もかもやる事すべてが、田舎では味わえない生活の上に、金の源である会社の様子を知らぬにつけ、夢に描いた生活とはこんなものかと悲しくなり、夜中に声を上げて泣いたことも、度々であった。

ようやく私も会社の様子もわかり、都会の生活にも慣れた時、やっぱり働く以上当然の条件をりたわれる会社にしなければならぬと考えられるようになった。

そのころ、組合員となった主人は、毎日毎日かた時も、はちまきをはなさない姿に、私も

めそめそしていられないと、自分に言いきかせて固く決心致しました。

又、ダンスは上京してから買うようにと、父母の汗のじみ出た金すら、気が付いた時には、もうすでに、口の中に入ってしまった。

安定所に行ったり、張り紙を見ては尋ねて行ったりして、仕事を探したが、今考えると、当時西も東も知らなかった私に、良くあれだけの事が出来たものだと思えてならない。

長男が生れたのは、三十九年六月、胸をふくらませて、上京した両親は三畳と四畳半に、主人のダンスがドカンとあるきりで、他には何一つ無い家の中を見渡して、びっくりして立ちどまっていた姿が、脳裏に焼きついて今でも忘れることが出来ない。

私も、田舎には心配をかけまいと全然知らせていなかったから、両親が驚くのも当然のことでしょう。

最初のうちは、家を建てたいから、まに合うものは、間に合わせるようにしているんだ……なんて言っていたのですが、両親の目はごまかせなくなり、主人が「はちまき」を持って出たある日、私はほつりほつりと話をしました。両親はそれを聞いて「当然のことなのだから、成し遂げる体制をとったのは、かえって偉いよ」と、力づけてくれた言葉は、何と物わりの良い親達だと、とても嬉しかったものです。

翌日、新しい茶ダンスが届けられた。父母は押入れを食器棚として使っているのを見かねたの

だろう。とどけられた茶ダンスに、押入から食器を出して入れかえている。父母の後姿を見て、とめどもなく、流れ出る涙をどうすることも出来ず、布団をかぶって、思いきり泣いた。

苦労人の母も、長男の風呂使いをして一ヵ月位で帰って行ったが、今はもう組合の様子を知らせても返事をしてくれる人ではなくなった。あまり長い闘争なので。

全国から、寄せられたカンパの服も、いくらか手を加えて、親子してよそ行きに着て行った時は、本当に嬉しく、又、有難く思えたことはなかった。

会う人々に礼を言いたくなる思いでいっぱいだった。

その時の服は、今でも色こそあせたが、ダンスの底に大事にしまっている。それを時々出して見る時、組合の様子は、闘いの展望は、と、聞かれてはいるような感じがしてならない。

又、親戚同様の組合員と家族が一体となって、暮の寒空の中の餅つき大会では、帰ろうと気がついた時には、フラフラになっただけでも、笑顔を忘れぬ仲間達を見て、もう鎖のようにつながったこの力こそ、絶対に必要だし、これなくしては何も出来ないと思った。

よちよち歩きの長男を歩かせ、身重の体で裁判所や、十・一八などに、おにぎりを持って参加した事も私は尊い一ページとして、人生の中に刻み込みたい。

会社の門前に、主人と立ちすくんだ時、背中をぐずぐず言っていた、長男もすでに五歳となり人並に着せたり、はかせたり出来なかったが、病気だけはさせまいと、気を配り続けたかいあ

って、元氣な子供に成長しています。

子供にせがまれ、玩具を思いきって買ってやり、おかずは三日前の大根料理を「マグロのトロ」や「ぶ厚いビフテキ」よりもおいしく、喉を通すのが惜しくてならないこともあった。

まだまだ若かった私は、化粧をして流行の服を着たい気持を持たない訳ではなかった。でも二度と味わえない若い人生において、物質的な面と、精神的な面とで得た体験こそ、本当に有がたいと思う。

又、組合、組合と何の抵抗も感じないでいる子供達にも、社会に出た時こそ主人と想う存分話し合い、あの体あたりして出来た「ドレイ工場」の映画も、親子して一緒に見られたらどんなに素晴らしい事だろうと、今から楽しみに思う今日このごろです。

主人は、誰からもうしろ指をさされぬ、真面目な組合員、今日も元気にバイト先へ出かける後ろ姿を見る時、組合からの朗報の知らせがあったら、足どりも軽々となるだろうにと、三男を抱えて見送る時は複雑な気持になる時もあるが、今後も妻として、家族として、一日も早く勝利するため、出来るだけの協力を続けるつもりです。

争議の中の新婚生活

私が彼と逢ったのは、あるおばさんの紹介でした。

加納 富喜子(28才)

「実は日本ロールの人で、とても背が高く一本気の性格の人だが、お母さんと二人で暮している人なので、貴女とは話が合うと思うから、是非会って見なさい。」と言われました。

私は活動していると言っても、ロールの人では、生活が苦し過ぎるのではないかと、そればかりを心配していた。

それにしても、かんじんなのは本人に会って、話をしてみなければわからない、とその日姉と一緒に行動してもらった。心配していた彼とはまったく違い、とても明るくて、さっぱりとした人であった。長い闘いの中で鍛えられた現われだろうと、姉と二人で話しながらその日は終わった。

私はその時から彼なら絶対に、どんな苦勞も一緒に歩いてくれる人だ。家庭を明るく、社会を明るく築き、育てていく人に間違いないと、心に決めました。

それから二ヵ月後に結婚の約束をしたとき、とても嬉しかった。

日取を決めるのに、なるべく休みを少なくしようと、祭日のいっぱいある四月二十七日、日曜日にしたが、式をどうしようか「内輪だけでやる？それとも会費制にする？」と聞かれ、「会費制にしたい。」と言うと「じゃそうしよう。」と話はまとまりました。

私は小さい時から願いがなかった。かた苦しい結婚式は不経済でしたくない。五、六人でも良い、友人に祝福してもらったら、どんなに幸せだろうと、何時も望んでいたからです。

彼の職場の仲間は、だいたい百人は出席する予定だと言われた時、私はびっくりした。

随分沢山いるんだなあーと、私の職場では私が初めなので、果して会費を出して祝ってくれるだろうか。実行委員も出さなければ、これは一寸気が重かった。

そこで青年部の役員に相談して見ると、早速返事が来た。

「それは良い事だ。よし、引受けた。大丈夫だよ心配しなくても」と励まされ、実行委員も出てくれた。

結婚式当日は、百四十余名の友人、知人、職場の仲間達に祝福してもらい、式は盛大に終りました。

又、旅行から帰った翌日は、メーデーに参加したが、私にはちよっぴりきつかった。

新生活に入って五日目、区役所へ非課税(申請書)を出しに行ったら課税課の人は、「いくら収入が無いといっても、アルバイトをしたり、内職をしたりで収入は少しはあるでしょうから、最低の七百円は、納めなければいけないですよ。生活保護を受けてる人でも、税金は納めているのでからね」「それに貴女が嫁いのですから、最低の七百円は納めなければいけませんよ」などと言われたが、良くわかりませんでした。

私は、「日本ロールの闘いは決して間違がってない。ロール闘争に参加している人に税金を納めさせるためには、会社の方へ言って下さい。」と言うと、課税課の人は、

「僕も、映画を見て知ってます。確かに主張は正しいと思います。まあ、がんばって下さい。」

しかし、いつまでも闘争中ということで非課税では通らないですよ」などと言いながら、玄関まで出て来て、「これはここだけの話にして下さい」とも言った。

私は、狐につままれたような感じでした。

仕事に出るようになってからは、主人は時々朝早くから、ピラまきに行ったり、夕食を済ませてから、会議や、活動に出掛けて行く、一晩として家に落ち着いたことはなく、その間には、私も会議などで、おそくなる時もあるので、なかなかゆっくり話し合う機会もなくて、つまらないなあと感じる時もあります。

又、たまには、ゆっくり体を休めてほしい。一生忙しい日々を送ってたら、寿命が短かくなってしまうのでは?と心配になる時もある。

交際を始めてから、今日まで半年以上、結婚して三ヶ月になるが、日曜日に二人で出掛けたことは一度もない。互いに活動をしているので、どちらかが都合が悪くなる。そんな時、私は自分で選んだ人ではないか、自分で選んだ道ではないか、と自分に言いきかせ、負けてはいけない、甘い夢を見ている、生活は出来ないのだ、と自分を上げます。

長い物には巻ける主義の、人の後からついて行くだけの人間では駄目なのだと思うから……でも早く安定した職場に戻るようになると願わずにはいられない。職場に戻れば活動も今以上に忙がしくなるだろうと思うけど、気分的には、落着いて仕事も出来るだろうし、活動も出来る

だろう。これから色々大変だと思いが、ロール闘争に一日も早く勝利出来るよう、一緒に頑張っ
て行きたい。

闘いの中の思い出

松田 栄(27才)

大学進学をあきらめ組合へ

私は、昭和三十五年三月に、長野の高校を出て日本ロールに入った。

東京のサラリーマン生活を夢に見ていたが、日本ロールには一ヶ月で幻滅を感じた。

日本ロールをやめようと思ひ、新聞の募集広告を見てIBMとか証券会社とかの面接に行つた
がだめだった。

母からは、「どんな会社でも三年間位は、下ずみの苦勞はするものだよ。がまんして働きなさい」という励ましの手紙がきた。

しかし、日本ロールで一生を過すことは、考えられなかった。

勉強もしてみたかったし、ゆくゆくは一流会社へ入りたいと考え、大学進学を思い立った。

一万円にもならない安い給料から二千円ずつ貯金し、大学受験の準備を始めた。一室五人の寮
生活では、なかなか受験勉強など進まなかった。しかし私はあきらめなかった。

その頃、すでに秘密の組合結成準備活動が始められており、同じ年齢の藤村君から、組合に入
るよう誘いを受けた。私は「日本ロールに労働組合は絶対必要だが、大学へ行くので、いずれ
会社をやめるから入れない」と断った。

しかし、彼は何回も説得にきた。組合の必要性を分つていながら、逃げるのは卑怯のように思
われるのがいやだったし、余りに熱心な、悪く言えばしつこい説得を断りきれず、組合結成して
から大学へ行こうと考えなおし、大学進学を一時あきらめることにした。

こうして、昭和三十六年七月頃、全金の非公然組合員となった。十九歳の時である。

組合に入ったからには、組合活動に集中しようと考え、大学受験の参考書は、全部トランクに
しまいこみ、二万円位になっていた貯金は全部おろしてしまった。

そして、神田の書店街へ行って、労働組合入門、賃金、労働法などの本を一度に十数冊買い込ん
できて読み始めた。しかし、寮の中では、監視の眼があり、会社に発覚される不安もあったため
藤村君といっしょにアパートに引っ越した。こうして、私たちの部屋がアジトになり、謄写版な
ども買ってきて、秘密のニュースなどを発行したりした。

私が組合に入った頃は、十四と五人がすでに活動しており、三十六年九月頃から、どんどん組

合員はふえていき、三十六年末には、百名をこえたため、それまで開いていた集會を各職場ごと
に開くことにし、翌三十七年一月十五日の第一機械職場の集會で、非公然組合の委員長に千葉さ
ん、書記長に私が選ばれた。その時、私は二〇歳になったばかりであった。

涙をこぼして書いた結成大会のピラ原稿

三十七年七月頃、腎臓を悪くしたため、会社に届を出して、長野へ行って、第一回目の入院を
していた。長野にいても、東京の非公然組合のことが、時々気になっていた。

そして、九月三日に、藤村君から「結成準備が会社にはばれて、幹部が呼び出された」との手紙
を受けとり、その日の内に、長野の病院を脱け出し、帰京し、アパートにもぐった。

会社には、もちろん、組合員にも、私がアパートに帰っていることは知らせなかった。知って
いたのは四、五人であった。

結成準備は、会社にばれたが、あわてて結成せず、しばらく様子を見ることになった。

私はアパートに隠れていたが、持病の喘息は出るし、腎臓も悪くしていたので、食事にも困り
近くの病院に入院した。非公然組合の會議には、病院から出かけた。この頃の會議は、会社から
かなり離れた所でやっていた。

次第に会社の攻撃が強まり、千葉委員長に対しては「組合を作りません」という文書を書かせ

たり、高橋、伊藤の執行委員には、大阪へ無期限の出張が命ぜられたりしてきた。ばれてから、
一ヵ月以上たっていたが、この間も、組合員の拡大は続けられていた。しかし、これ以上は、時
機をのばせないと判断して、まだ非公然組合員の数は少なかったが、いよいよ公然化に踏み切る
ことになった。

私は病院のベッドで、結成大会の当日に、日本ロールの全労働者にまくピラの原稿を書くこと
になった。

過去二年間の秘密の準備活動をふり返り、いよいよ開かれる結成大会のことを想像した。長い
間、あの暗い職場で、押さえに押さえられ、黙々と働かされ、泣かされてきた労働者が、もうす
ぐ立ち上るのだ。

旗のもとに集まってくる労働者の驚きと喜びの光景を思い浮かべて、私は、一人で感動してい
た。そして、胸が熱くなり、手に汗がにじんで、思わず涙がこぼれた。

(第一章の執筆者が、29ページにこのピラを引用してくれているので参照して下さい)

それから、一週間後の十月十八日に結成大会が成功した。

私は、十月十四日に、医者に無断で逃げるようにして退院し、十五日から出勤していた。

結成大会の時は、やっと作ったぞ。もう、物も言えない労働者ではないんだという一種の解放
感とこれから会社が、どんな攻撃をかけてくるのか、それに耐えられるだろうかという不安感と

が、入りまじった気持だった。

いつも考えてきた事

ある人から「日本ロール闘争を指導してきたあなたの指導理念は、どういふものですか」と聞かれた。この質問をされて、私はとまどってしまった。

私には、指導理念などというものは無い。問題が、おきるたびごとに、その場で「どうしようか」と考える場当りのなやり方が多かった。

また、「俺は、指導者なんだ」という自覚も、あまりもっていない。

私は身体が小さくて、やせていて、いつもおどおどしていて、誰が見ても、とても頼りがいのない男である。

しかし、一応日本ロールの書記長をやらせてもらっているのです、ある程度の責任と義務を果さねばならない。六年半をこえる争議を闘つてくる中で、いつも考えてきたことは、要約すると二つある。

一つは、組合員を脱落させずに、全員をどうやって団結させてゆくかということ。

今、残っている百四十名の組合員の中にも、社会党支持者、共産党支持者、創価学会員、政治には無関心の人など思想的には、いろんな人がいる。

また独身者、世帯者の考え方の違いもある。活動に積極的な人、あまり活動に参加しない人の違いもある。

しかし、考え方は違つていても、百四十名が、完全に一致できる要求がある。それは、「この争議に勝つたい。全員的首切りを撤回させたい」ということである。

この要求を基礎にして、できる限り民主的な組合運営をやっていくことをいつも考えてきた。特に、一九六四年に日本共産党の「四・一七スト」問題をめぐつて若干の混乱を起してからは、闘争委員会（十三人）の決定は、原則として全員一致制をとってきた。そのために、ささいな議題で三時間も四時間もかかり、夜十一時、十二時すぎになり、用意した重要議題は、次回に討議しなければならぬこともあった。

闘争委員の意見の不一致が不団結を生み、それが下部組合員における不団結にも広がる危険があり、そこから脱落者が出、あるいは争議団の分裂にもつながるかも知れない。そういうことは絶対に防がねばならないと考えたからである。

そして、地区別会議や大会で出される下部組合員の意見にも、注意を払うよう努力してきた。こういう組合運営に対して、組合員からも外部の人からも、「もたもたしすぎる」と批判されたこともある。

また、「闘争委員会は、政治闘争ばかりやりすぎる。もっと争議を早く勝つように考えろ」と

いう意見もかなり出された。この意見をあまりに気にしてしまい、最近では、政治闘争のとりくみが少なくなった。これについても内外から批判が出されている。みんなで相談する必要がある。

いつも考えていることのもう一つは「どうやったら早く勝てるか」ということですが、紙面の都合で省略します。

書記長としての喜びと悩み

私は、日本ロールへ入って査定課という事務職員をやっている、現場労働者が恐かった。査定課は、現場労働者の請負工賃計算をやり、労働者の賃金を低く押える尖兵の役目で、現場労働者にとっては、敵役になっていた。私は今でこそ、少しは大きくなったが、あの頃は、一五〇センチ、四五キロそこそこの小男で、身体の大きな力の強そうな現場労働者は、感覚的に恐かった。そういう私が、いつも工賃伝票をもって行っている、汗や油でまっ黒な顔して働いている労働者から、「バカヤローツ、こんな安い金で、この仕事ができると思ってるのか」と大声でどなられていたのではなさらずであった。

しかし、私も組合に入り、彼らの気持を知り、「同じ労働者として、組合を作ろう」と話合っていくうちに、ようやく味方扱いはされるようになった。これでようやく、「どなられずにすみそ

うだ」と思い、ほんとうにうれしかった。

争議に入って一二年は、無我夢中だった。

労働組合の経験など全くなかったから、何をどう処理し、指導していくのか等という事も、よく分らず、ピラ作り、ピラまき、組合まわり、書類の作成、整理、集会の動員、来客や電話の応待、会議の準備などを全金本部のオルグの人に言われるままに、毎日、毎日、忙しい、忙しいと動いていたようだ。そして、闘争委員会の中では最年少であったので、あまり冗談も言わなかったし酒もタバコもやらないので「固い男」と思われていた。

ところが、二年位して、いくらか落ち着いて考えられるようになって、組合員ともなじむようになり、飲めない酒も飲むように努力し、「冗談やエッチな話にも仲間入りするようになっていった。そんな私を見て、「書記長も、いくらかさばけてきたなあ」とか「松田もやわらかくなってきたぞ」と組合員から、言われるようになった。

今では、私の方から闘争本部で「カカオフィーズを飲んでえなあ」と言い出したり、冗談やエッチな話をするので「最近、書記長は頭がおかしいんじゃないか」といわれる時がある。

そんな話を分けへだてなくできるようになったのも喜びの一つかも知れない。

書記長をしていて、一番の悩みは大会などでの組合員の集まりが悪かったり、また決めた行動に組合員が動かない時である。これは、組合役員や活動家だれもの悩みであると思う。「どう

して集まらないだろうか？どうして動かないんだらう？俺は信頼されていないのではないか？方針がまちがっているのか」などと考え悩む。逆に、今まで出てこなかった組合員が出てきたり、参加者がふえた時や組合員の活動が活潑になっている時は、そして、組合員の心と心が一つになったと感じられる時は、とてもうれしく楽しい思いをする。だから思うのである。どんなにつらく長い闘いでも、組合員が本心に信頼し合って、団結して活動しているならば、けっして闘いはつらくは感じないだらうと。

私の悩みのもう一つは身体のことである

赤ん坊の頃から喘息をわずらい病弱に育った。そして組合活動に入って腎臓を悪くした。書記長になってから、四度も入院し、アパートで寝ていて、闘争本部へ出ていけなかったこともしばしばある。組合員からは「ボンコツ書記長」と冗談を言われたりもした。

筋肉隆々としたたくましい組合員の身体をいつもうらやましく思っている。そして私もまず太ることから始めた。生活資金のほとんどを食費に使い一日四食たべていたら三ヵ月位で四五キロから五八キロになった。ところが体操しないで食べたために腹がふくらんだ。そこで手塚さんにパーペルを作ってもらい筋肉運動をしたり一日五キロを走った。二ヵ月位続けたが、無理したためか再び腎臓を悪くしてしまい中止。喘息もでてきた。なんとか喘息を治そうと昨年から毎夜

二キロを今年の四月まで走りつづけた。寒い冬も全く喘息にならなかった。とうとう治ったかと安心していたらまた七月に喘息で苦しんだ。これにはがっかりした。これからも書記長としての任務を果していくためには、丈夫な身体を作ることが私にとって大切な仕事である。

私が入院した昭和四十二年十二月に、組合員の間で次のカンパ帳がまわされていた。

松田書記長の病気を治すためのカンパ帳

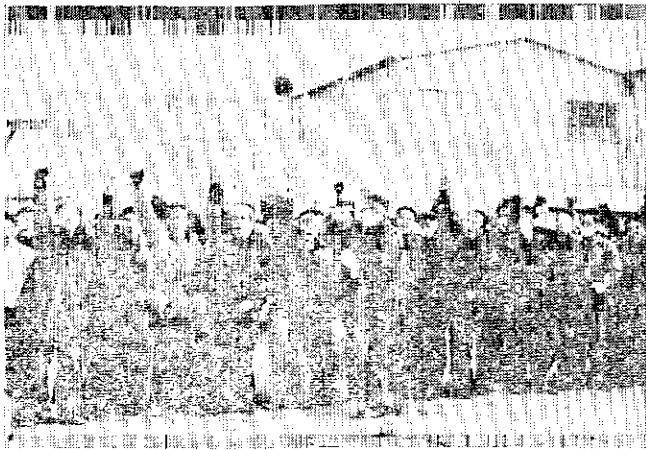
我が日本ロール支部の松田書記長が長い間、病院生活を送り、無事退院しましたが、身体もまだ思わしくありません。自宅で療養生活を送らなければなりません。日本ロール斗争勝利のため自分の健康を返り見ず毎日奮闘しております。しかし今一番必要なことは、ゼンソクを完全におさすことです。そのために皆様の暖かいカンパをお願いします。

そして、ある日、このカンパ帳といっしょに新品のガストープとマットレスが私の室に運びこまれてきた。「寒い部屋でせんべいぶとんで寝ているからゼンソクになるのだ」といって、暖かく寝られるようにとのみんなの「暖かい気持」がこめられていた。全くありがたい贈り物だった。私の身体を心配してくれる組合員の気持が、ほんとうにうれしかった。この好意に報いるためにも、丈夫になって一生懸命やらなけりゃならないと何回も、まっ赤に燃えているガストー

プを見つめながら考えた。

こうして組合員に助けられ、励まされながら日本ロール闘争の中で数多くのことを学び教えられ、私自身が成長してきた。もはや一流会社のサラリーマン生活は、私の好むところではなくなった。労働者階級の歴史的勝利を科学的に確信できるようになった現在、歴史の発展方向にそって生きていこうと決意している。

V 闘いの現状と決意



1. 裁判斗争について

日本ロール闘争の中で裁判闘争をいくつも、とり組んできましたが、特に解雇事件については次の三つを闘ってきました。

- (1) 小野一郎 六二年十月二六日解雇 六三年九月三十日東京地裁で勝訴、会社が控訴中。
- (2) 組合幹部三十三名、六三年二月五日解雇 六六年十二月十四日東京地裁で、十三名は勝訴
― 会社が控訴 十五名は敗訴 ― 組合が控訴。
- (3) 一七一名 六五年六月三〇日解雇 六六年十二月十四日東京地裁で勝訴 ― 会社が地裁の本訴へ。

日本ロールでは、裁判闘争をとり組む基本方針として、一、法廷外の大衆闘争と結合する。

二、法廷では、十分な審理を要求する。という立場でとりくみ、毎回の公判には、法廷をいっぱいにする組合員、家族、支援団体など二二〇名以上の傍聴動員を組織しつづけてきました。また、解雇無効判決要請の署名を約五万名分、要請はがき四万枚などを裁判所に集中させてきました。しかし、これらは、決して十分であったとはいえません。

組合幹部三十三名不当解雇事件に対する政治的判決について、

日本ロール闘争の中心問題は、六三年二月五日からの争議のきっかけになった組合幹部三十三名の不当解雇です。

三十三名の内、五名は争議突入後、組合をやめたため二十八名が、東京地裁に「地位保全の仮処分」を申請し闘ってきました。

二十八名に対する解雇理由は、要約しますと次の三つです。

- (1) 六二年十二月十日に、社長を社長室に監禁した。
- (2) 六二年十二月十五日付の委員長、書記長、財政部長に対する配置転換を拒否した。
- (3) 六二年十二月十六日、社長宅(千葉県市川市中山)に不法侵入し、暴言、暴力をふるった。しかし、実際は、(1)については、社長がこの日、出社したので、社長に団交に出るよう申入れを行った所、社長自ら社長室の内側から鍵をかけて出てこなかったものです。
- (2) は、査定課にいた委員長、書記長、財政部長の三人に対し、一方的に本社営業部への配置転換命令を出してきたので、拒否したにすぎないものです。この配転命令は、重役の監視の下に三人の、組合活動に制限を加えようとする目的で出してきたものです。
- (3) は、日本ロールの全権限を握っている社長が、団交に出ぬ限り、暮もおし迫っているのに年末一時金などの要求が解決しないので、十二月十六日に社長宅へ団交申入れに出むいたことをさして不法侵入などといっているものです。

組合はこの解雇理由のデタラメを法廷でも暴露するために、書面準備を一年半、十二回、証人調べ二年、十六回、要請行動二十二回の裁判闘争を闘ってきました。

ところが、六八年七月十一日の東京地裁判決は、会社の不当労働行為をほぼ全面的に認めながら、(8)の行為については「労働組合の正当な行為の範囲に属するものとは到底認め難い」として社長宅に出むいた十五人については解雇有効というきわめて政治的な内容をもったものになっています。

日本ロールのように、社長が経営方針、労務政策など全ゆる権限を握って、他の重役では事態の解決が一步も進まぬ場合、社長と会社内で会えない以上、組合が社長宅におもむいて団交出席要求をすることは、当然正当な組合活動と認められるべきです。

組合は十五名については、高裁に控訴し、法廷においても、この不当な判決を取り消させるべく闘いを進めています。

2 「あっせん案」をめぐる経過について

六八年九月五日、東京都労働委員会より「争議解決のあっせん案」が出され、長かった日本ロ

ール争議もようやく解決するかに見えました。が、会社の全く卑劣な背信行為によって解決されず全員解雇撤回めざし、さらにねばり強く闘うことになりました。

九月五日のあっせん案の内容は、

- (1) 全員解雇を撤回し、復職させること。
 - (2) 復職者の給与は、就労していた者と差別しない。
 - (3) 会社は、組合に二、四〇〇万円(三回分割)を支払うこと
- などを骨子としたものです。

組合は、九月二十五日、このあっせん案を「借金が全部返済できないなどの不十分な点はあるが、争議を解決するために、受諾する」ことを都労委に回答しました。一方、会社は、九月二十六日、このあっせん案を拒否してきました。会社の言う拒否の理由は「七月十一日の判決では十五名が解雇有効なので、十五名の解雇は撤回できない」というものです。会社のこの態度は、組合、労働委員会、会社の三者の確認をふみにじる全くの背信行為です。

会社の背信行為を明らかにするために、その経過を簡単に記したいと思います。

都労委の交渉は、六七年一月から、組合側四名、会社側三名、労働委員会四名が出席し、
都労委交渉経過
67年1月 都労委で交渉開始
67年8月 都労委の場で会社は「全員解雇
実質的な団体交渉の内容をもってすすめられ

てきましたが、一カ月に一回程度ののろい交渉ペースと会社側のしぶとい態度により一年八カ月の長期に及びました。

しかし、全員解雇撤回、職場復帰などの基本線が確認され、いよいよ交渉も大詰になった六八年七月十一日に東京地裁より、申請して五年もかかっていた組合幹部三十三名裁判の判決を出すことが、通知されました。このために、判決前の七月三日の交渉で「全員解雇撤回の基本線については判決によって変更しない」事が、会社、労働委員会、組合の三者で確認されました。また、判決後の七月十七日と二十四日の交渉においてもこの点を、三者で再三確認していました。ところが八月二十六日の交渉に出席した青木社長は、「判決にもとずいてあっせんしてもらいたい」と言

撤回」を表明。その後解決金などの交渉に移る。

68年3月 就労条件などで話合う。

6月 「あっせん案要綱」が示される。

7月3日、裁判判決に左右されない事を

確認

(7月11日 地裁より判決)

7月17日、24日 判決に左右されないことを

再確認。

8月26日、社長出席「判決にもとづいて

あっせんしてもらいたい」と言

い出す。労働委も会社を説得

9月5日、あっせん案出る

9月25日、組合、受諾を回答

26日、会社、拒否を回答

い出しました。これに対し、組合側は、三者の確認をふみにじる背信行為として厳しく抗議し、労働委員会も会社の不誠意な態度に対して注意と説得を行い、その結果、九月五日にあっせん案が出されたものです。

組合員全員は、九月二十八日、アルバイトを休み、会社に厳しく抗議し、全員解雇撤回まで闘い抜くことを宣言しました。

あっせん案をけられた時の組合員の声を十月九日付闘争ニュース「葛西の火」より抜粋して紹介しましょう。

よし、何年でも闘ってやるわ

須賀定男(39才)

組合が争議を解決しようと誠意をみせたのに、会社があっせん案を拒否してきた。よし、それなら何年でも闘ってやるわと思った。一人でも社長の所へ行つて、「いったいどういふつもりなんだ」と問いつめてみたい気持ちだ。

最後までやるわ

佐藤正二(52才)

あっせん案を会社はのまないと思っていたね。五〇才をこえた者四、五人で話合ったが、まだだいぶかかるだろうと言っていたね。最後までやるわという事になった。ここでやめる人はおそ

らくないでしょう。

就労の決意をもって闘いつづける

江川勝臣(25才)

「あっせん案を会社が拒否してきたというニュースを聞いた時「やっぱり」と思った。日本ロールの社長は、そんなよそらの資本家と違っている。奴にとっては恥だとか外聞なんてない。二十八日の抗議行動の時、会社がどんな言訳をするのかと思っていたとおりに「判決の主旨にそっていない」と居直ってきた。ここにも資本と国家権力が手を握っている事実がある。もうこんな奴等を許すわけにはいかねえ。俺達は、今後苦しい闘いを続ける訳だけど就労する姿勢をくづさないで闘いつづける。

このまま、やめられない

家族会 戸島トク(40才)

解決してもらいたかった。父ちゃんに早くおちついて仕事をさせてやりたいし、子供も可哀そうだしね。会社もあっせん案をそっくりのまないにしても、ある程度は解決する方向に向ったのかなと思っていたのに、けられてショックだったわ。五年半も闘ってきたのに。このまま、やめるわけにはいかない。がんばるだけですね。

3 一日も早い勝利をめざして

その後六八年十二月、会社は、判決で解雇無効となった組合幹部十三名に対し「解雇を撤回するので就労せよ」との通知を発送してきました。これに対し、組合側は、全金本部、支部、弁護士の連名で「十三名を就労させる誠意があるなら全員解雇撤回、争議の全面解決について団交を行うよう」申し入れました。

六九年三月より組合側と会社側で本格的な団交に入る前の「予備折衝」が行われるようになりましたが、会社は依然として、組合幹部十五名の解雇撤回を拒否し、争議の全面解決をはかるうとしていません。

日本ロール斗争は、八月五日で六年半を経過しました

今、私たちは、一日も早く勝つんだという決意を固め、これまで積み重ねてきた支援共闘や就労者対策などの活動をいっそう発展させ、広範でより強力な大衆的抗議行動を日本ロール会社へ向けて組織できるよう努力しています。

映画「ドレイ工場」の中で、日色ともえさんが演ずる林光子が、東亜マグネットの大会の場で

一人たち上って次のように、せつせつと訴えます。

「関東鉄工の人たちは、ものすごい会社の弾圧の中でやっと組合をつくったんです。人間なみの生活を要求して苦しい闘いを続けているんです。……みんな仲間思いのものすごくいい人たちがばかりなんです。……」と。

日本ロールの労働者は「ものすごい会社の弾圧の中で人間なみの生活を要求して」たち上りました。もし途中で闘いをやめるなら、青木社長に対して「人間なみ以下の生活」を頭を下げて承認することになってしまいます。それは、できません。

日本ロール闘争の目的は、全員の解雇を撤回させ、再び日本ロールの職場に復帰を勝ちとることです。そして、一二〇〇名の日本ロール全労働者の統一と団結を勝ちとり、ドレイ職場を人間なみの生活ができる職場へと変えていくことだと考えています。

現在、米日独占資本の「合理化」攻撃は、全産業に加えられ、全国の労働者の生活と権利を守る闘いはますます切実で重要になってきていますが、私たち全金日本ロール支部の闘いも、それらの闘い的一部分です。

全国の労働者の生活と権利を守り発展させる闘い、また一九七〇年を前にして、日米安保条約の破棄、沖縄全面返還など日本の平和、独立、民主主義を守る闘いを、全国の労働者と共に闘う中で、日本ロール闘争の一日も早い勝利を実現する決意です。

全国金属を初めとする全国の労働者のみなさんに、これまでの六年半の闘いに対して寄せられた物心両面の御支援と力強い連帯に心から感謝します。と同時に、日本ロール闘争の一日も早い全面勝利のために、今後もいっそうの御支援をお願いいたします。

お願い

(1) 日本ロール会社へ「不当解雇を撤回し、争議を全面的に解決せよ」との抗議を集中して下さい。まわりの人にもよびかけて下さい。

抗議先 東京都江戸川区葛西二の三〇〇〇

日本ロール製造株式会社 社長 青木運之助

(2) 全金日本ロール支部と交流会を開いて下さい。

連絡して下されば、こちらから出かけます。

なお支部発行の闘争ニュース「葛西の火」(月一回)を読みたい方は、申込んで下さい。

もえひろがれ 葛西の火

発行月日	1969年9月15日
初版印刷月日	1969年9月10日
編集発行	総評・全国金属労働組合 日本ロール製造支部 江戸川区葛西1-1376 TEL (680) 1508
印刷所	小池印刷株式会社 新宿区上落合2-10-14 TEL (362) 2035